
とある都市の事象選択《オールセレクト》

ITEM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある都市の事象選択
オールセレクト

【Nコード】

N7279X

【作者名】

ITEM

【あらすじ】

学園都市にある少年がいた。学園都市第二位の垣根帝督、“幻想殺し” 上条当麻を親友に持つ彼はある問題を抱えていた……。それは彼が人知を越えた力を持っていること。この小説は中二病にご都合主義、さらには主人公はほぼ無敵ときていきます。それでもokという方はどうぞ暖かい目で見守ってください。

プロローグ（前書き）

祝初投稿です？なにとぞよろしくお願ひします？

プロローグ

『窓のないビル』

その建物は高層ビルが多く建ち並ぶ学園都市第7区に建っている。その名の通りにその建物には窓がない、それどころか中に入る入り口すら見られない。この異様な建物こそ学園都市のトップ、統括理事長アレイスター・クロウリーの根城である。

特殊な液体で満たされた培養器の中で逆さに浮いており、大人にも子供にも男にも女にも見える容姿を持つ学園都市統括理事長の前に、一人の少年がズボンのポケットに手を入れながら立っていた。重苦しい空気を打破するかの様に少年が口を開いたことから物語は始まる。

第一話（前書き）

第一話完成したんで投稿します〇（＾　＾）〇　早くも中二病満載
ですね（＜　|　＞）

第一話

「いー加減人の夢の中に現れんのやめてくれねエ？寝起き悪いし寝不足になるし最悪なんだけど？」

黒をベースとしたパジャマに身を包み、左右違った色の瞳を持つ鮮やかな茶髪の少年かみき 神鬼大和は悪態をつく。

「君の夢に現れたのは君に用があるからだ。」

「当たり前だボケ。用もねエのに出てきたらブツ殺すぞ。」

まアコイツが夢に現れるのはよくあることだし、もう慣れた。ハアとため息を付くと大和はアレイスターに用件を聞く。

「で？何の用だ？どうせ仕事だろ？さっさと内容話して消えろ。」

「仕事は仕事だか君が思っている様な内容ではないぞ。」

「あア？どオゆう意味だそれ？いつもの掃除じゃねエのか？」

掃除と言つのは学園都市の暗部用語の一つで殺しや破壊活動のことを指す。

「君には柵川中学という学校に通ってもらおう。」

「・・・悪いもつかい言ってくれや。」

「何度でも言おう、君には柵川中学という学校に・・・消える力ス」

続きを聞きたくなかった大和はアレイスターの言葉の上に言葉を重ねる。

「酷いな。君がもう一度言えと言うから言ったのに・・・」

「ふざけんじゃねエぞコラ？何でオレがんなことしなきゃなんねエんだよオ？今更学校に通えだア？小学校に通わせなかつたのはどこのどいつだア？」

「説明は最後まで聞きたまえ。何も君に青春を謳歌してもらおう訳ではない。」

「ますます意味わかんねエよ。その学校の先コーでも殺すのかア？」

「その学校に近々二人の少年が入学してくる。名前は垣根帝督、上条当麻だ。」

「それがどオした？」

「彼らはいずれ私のプランに大きく影響する者たちだ。頭の回転が早い君ならもうわかってもらったと思うのだが？」

「オーケーオーケー理解したよ。つまりアレだなアソイツらと同じ学校に通いつつ護衛と監視の両方やれってことだなア？」

「理解が早くて助かるよ。」

なるほど護衛と監視か。それなら学校に通えというのも何とか納得できる。だが、ここで一つ疑問が生まれる。アレイスターに質問しようかと思っただがどうせプラン関連の質問には答えてくれないと思っただのでやめておいた。

「因みに垣根帝督は近い将来、学園都市の第二位となる者だ。君の手に負えるかな？」

アレイスターは嫌味にも聞こえる質問をしてくる。だが大和はそんなこと気にすることもなく吐き捨てる。

「誰に言っただア？未来永劫オレに勝てるヤツは存在しねエよ。」

第二話（前書き）

第二話できました〇（＾　＾）〇 駄文ですみません（＜　|　＞）

第二話

突然言い渡された学校通学命令という最悪の夢から目覚めた大和はポリポリと頭を搔く。

アレイスターが言うには入学式は二日後、入学に必要な手続きや入学後の教科書などはこちらで用意することだ。

と言ってもすでに学園都市最高クラスの頭脳を持つ大和には必要ないもののだが、形だけでも揃えておかなければ不審に思われるかもしれない。

(とりあえず今何時だ?)

時間を確認するため大和は枕元にあつた携帯電話を開ける。

現在時間 AM 8 : 48。

普通に学校に通つてる者なら遅刻確定の時間だが学校に通つていない大和からすればかなり早い時間だ。

(二度寝つて気分でもねエしなア・・・ちイとばつか早エけど起きるかア)

ベッドから身を起こすと顔を洗うために洗面所へと向かう。大和の自宅でもある学生寮は学園都市の中で一、二を争う大きさを持つ。

アレイスターからプレゼントなのだが、一人で住むには広過ぎるため大和からすれば普通の学生寮の方が良かったのだ。

顔を洗い、歯を磨き終わると大和はコンタクトレンズを付け始める。別に大和の視力が悪いのではなく、ある理由からコンタクトレンズを付けているのだ。

(腹減つたなア・・・自分で作んのもメンドオだしファミレスでも

行くか・・・)

ファミレスで朝食を摂ることにした大和は素早く服を着替え、身支度を整えると学生寮を後にする。

学校の登校時間が過ぎたこともあってか歩く人の数は少ない。本来ならこの時間に学生が出歩いていることがおかしいのだが、そんなことどこ吹く風と言わんばかりの堂々とした態度で大和は歩く。いつも通りに近道として使っている路地裏を通っていると何やら人らしきものがうずくまっていた。

(何だこりゃ？人か？)

近くで見ると、それは小さな女の子だった。見たところ髪も乱れているし、着ている服もボロボロだ。出来れば面倒事は避けたい大和だったがほっとく訳にもいかないのでとりあえず声を掛けてみた。

「おい？大丈夫かア？生きてるかア？」

「・・・ん、此処は・・・？」

意識はある、どうやらまだ生きてはいるみたいだ。

「お前、いくら夏だからってそんなカツコで寝てたら風邪引くぜ」

「・・・超ほつといてください あなたには関係ないことです」

せつかく声掛けてやったのにこれかよ。普段ならこのままほっておくのだが今日ばかりは何故かそんな気にならなかった。

「まアそう邪険にすんなよ お前朝メシは食ったかア？」

「いえ・・・まだですけど・・・」

「じゃ丁度いいやゝ今から朝メシ食いに行くからお前も一緒に来い」
そう言つと大和は少女の腕を掴み半ば強引に引つ張つて行つた。

「えっ？ちよつと！！何処連れて行くんですか！？」

「いらつしゃいませ！何名様ですか？」

ウェイトレスの元気な挨拶が二人を出迎える。若干少女のカッコを見て顔をしかめたがすぐにいつもの営業スマイルへと戻す。

「二人 できれば奥の席を頼む」

あまり人の目に付く席は好きではない大和はいつも通り奥の席を指定する。それに少女のこともあるのでなおさら奥の方が好都合だ。時間が時間なだけに店の中にはほとんど客はおらず、希望通りに奥の席へと案内された。

「ほらよ、メニユーだ 好きなもん頼め オレが奢つてやるよ」

少女にメニユーを渡しながら大和は言う。少女はまだどこか警戒している様だが、小さな声でありがとつございませうと言つとメニユーを受け取る。

少女にメニユーを渡したところで改めて大和は少女を見つめた。

（歳は・・・大体小学生高学年ぐれエか？見たところ学校に通つて

る感じはしねエな にしてもコイツ・・・)

間違いない、コイツは裏の人間だ。大和は同じ裏の人間としての直感でそう推定した。長年学園都市の暗部として活動していたためか、表の人間か裏の人間かは直感でわかる様になっていた。あまり嬉しいものではないが・・・。

「あなたは決まりましたか？」

少女が大和の顔を覗き込む様に尋ねてくる。大和がファミレスで朝食を摂る時は決まってサンドウィッチを注文する。

「あア大丈夫だ とりあえず注文すつか すみませうん」

一通り注文し終わると大和は本題を切り出す。

「お前何があつた？ただあそこで寝てた訳じゃねエだろ？」

「あなたには超関係ないことです」

やっぱりこうきたか・・・まア仕方ねエかア

「お前裏の人間だろ？」

その言葉に少女は手に持っていたコップを落としそうになる。

「どっとうしてそのことを!？」

「ダメだなア そんなに動揺しちまったらバレんだろ？まアそんな

ボロボロじゃせいぜい下つ端だろオがな」

まるで自分も裏の人間ですと言わんばかりに話す大和。事実大和はアレイスターの右腕として暗部に君臨している。

「まアいい、まだ名前聞いていなかったなア　お前名前は？」

「絹旗・・・絹旗最愛です」

「じゃ絹旗、何があつたんだア？そのカツコじゃかなり過激な仕事だつたみてエだなア」

再度尋ねてみるが絹旗黙り込む、やはりまだ警戒しているのだろうか中々話そうとしない。

（つたくメンドクセエヤツだなア・・・まアでも一度乗つちまった船だ、最後まで面倒見てやるかア）

「絹旗、警戒してんなら安心しろ　オレもお前と同じ裏の人間だそれもお前なんかよりもずっと深いところにいるな」

絹旗の顔に驚きの色が浮かぶ。それもそのはずだ。いきなり声を掛けてきた少年が自分も同じ裏の人間ですと言うのだから。

「だから安心して話せ　少なくともオレはお前の思っている様な裏の人間とは違エから」

その言葉に安心したのか、それとも緊張の糸が切れたためか何時の間にか絹旗の目には涙が浮かんでいた。別に泣かすつもりはなかったのだが・・・。

「そうですね　あなたになら話しても大丈夫みたいです。」

そうやって緞旗が話し始めようとした時だ、ファミレスにはおおよそ似合わない全身黒尽くめの男が数人、二人の席の前に立っていた。

第三話（前書き）

第三話完成！相変わらずの駄文

第三話

全身黒尽くめに見るからに屈強そうな体格と、ファミレスにはおおよそ似合わない数人の男が大和と絹旗が居る席の前に立つ。

「何だテメエら？朝メシの邪魔なんだよ さっさと消えろ」

「君に名乗る必要はない 朝食の邪魔をしたなら謝ろう 用が済めばすぐに消える」

そう言うと男は大和の前に座っている絹旗を睨みつける。

「こんなところに居たのか被検体E-57、戻るぞ まだスケジュールが詰まっている」

男は絹旗の腕を掴むと無理矢理連れて行くこととする。だが、絹旗も必死に抵抗している。それな身体も小刻みに震えている。

(ああなるほどなア そオゆうことか・・・)

一連のやり取りを見て大和は絹旗に何があつたか理解した。おそらく絹旗は置き去り(チャイルドエラー)か何かでコイツらに無理矢理裏の仕事をやらせられていた。それに絹旗のことを名前ではなく、被検体と呼んだ。どうせ訳のわからない実験も強要されたのだろう。

(仕方ねエ、助けてやっかア)

「オイ、オレは今コイツとメシ食ってんだよ 朝メシの邪魔して申し訳ねエと思つてんだつたらさっさと消えてくんねエかなア？」

「ああ！？テメエ誰に口聞いてやがる！？」

男の言葉が先程までの丁寧なものから一転して乱暴なものに変わる。だが、大和は臆することなく言葉を続ける。

「テメエに言っただよクソ野郎 それとも何か？言葉が理解できねエのかア？脳ミソまで筋肉で出来てんのかア？」

ヘラヘラと笑いながら大和は男をバカにする。さすがに男も我慢の限界が来たのか、その屈強な腕で大和の胸倉を掴むとそのまま持ち上げてしまう。

「このクソガキ！！調子に乗りやがって！！！」

腕を大きく振りかぶると大和の顔を殴りつける。男の拳は綺麗に大和の顔に入った。中学生が大人に本気で殴られたら普通は泣く、泣かなくとも痛がるはずだ。

「おーおー中々いいパンチだなア 是非ともボクサーへの転職をオススメするぜ」

殴られたはずの大和は泣くどころか、痛がる素振りすらも微塵も見せない。まるで何事もなかったかの様にケロっとしている。その光景に殴った男はもちろん、その様子を間近で見ていた絹旗や他の客店の従業員も驚いていた。

「てっテメエ・・・何でくらってねエんだよ!？」

「ああ？簡単だ、今テメエがオレを殴ったっていう“事象”を“拒絶”しただけだ つまりオレがテメエから殴られたっていう事実は存在しなくなる」

大和の隣を歩きながら絹旗は尋ねる。さっきの光景を見る限り大和は明らかに能力者、それもレベル4以上の大能力者クラスの……。

「その“あなた”ってのやめてくんない？ 気持ち悪くてかなわねエんだけど」

「私はあなたの名前を知りません」

「あれ？ まだ言っただけじゃなかったかア？ 神鬼、神鬼大和 大和って呼んでくれや」

「では改めまして大和さん、大和さんは能力者なんでしょうか？」

出来れば能力を使わずに追い払えば良かったのだが思わず能力を使ってしまったので、もう言い逃れはできない。仕方ないと思って大和は自分の能力を絹旗に説明することにした。

「お前の言う通りオレは能力者だ 神鬼大和、レベル5の《事象選択》（オールセレクト）だ」

「れっレベル5なのですか！？」

「ハア、だから言いたくなかったんだよ……レベル5って言ったら騒がれるから……」

「普通騒がれますよ！ と言うか騒がない人なんていませんよ！」

「同じレベル5なら騒がないんじゃないやねエ？」

「そっそれはあり得ますね……」

『レベル5』 それはこの街に住む学生にとって憧れの、同時に畏怖の対象となる存在。一人で軍隊相手にケンカを売れるレベル5は自然に多くの憧れを生む。だが、それだけでは済まないのがレベル5だ。憧れは同時に嫉妬の感情を生む、強過ぎるその力は恐怖の対象ともなる。

『化け物』

大和も幾度となく、そう呼ばれた。そう揶揄されても仕方がないのは大和自身が一番良く理解している。

「大和さん！聞いてますか!？」

どうやら思考の渦にはまっていたようだ。絹旗が自分に向かって何やら避けている。

「悪い悪い、ちイと考え事してたわ で？何だ？」

「大和さんのその・・・《事象選択》ってどんな能力なのですか？」

「オレの能力はこの世の全ての“事象”、簡単に言えば起こった出来事に対して選択できる力だ」

「うーん・・・よくわかりません」

「例えば・・・さつきオレが殴れた時、ケロっとしてただろ？あれは『殴られた』って事象を『殴られなかった』っていう事象に変えただけだ」

「とんでもない能力ですね・・・」

「それは自覚してる でも無敵って訳じゃねエからなア」

「あの最後の蹴りも能力によるものですか？」

「あれは・・・また別のもんだ、あれに関しては深くは聞くな」

大和はこれ以上の散策に釘を打つ。それ以上は学園都市の闇に繋がると思ったからだ。絹旗も裏の人間だが、まだ表に近い闇だ。大和のいる世界は一寸先も見えないぐらいの深い闇、関係のない者を巻き込む訳にはいけない。

「お前、これから行く当てでもあるのか？」

話題を変えるために大和はふと思いついた質問をする。

「いえ・・・私は置き去りですから行く当てなどありません・・・」
「なら、暫くオレの家に来て 知り合ったのも何かの縁だ、面倒みてやるよ」

絹旗はポカンとした顔している、理解が追いついていないのだろうか。だが直ぐに我を取り戻すと困惑した表情を見せる。

「いいのですか・・・？」

「別に構わねエゼ 丁度広過ぎるから困ってたんだよ」

「では、お世話になります・・・」

こうして、少年と少女の奇妙な同棲生活が始まったのだった。

第四話（前書き）

話しが全く進まない（^| ^ ;）

第四話

絹旗とも同棲生活が決まった日の夜、大和はアレイスターに呼び出されていた。どうせ今朝のことだろうと、大和はこれから聞くことになるだろうアレイスター統括理事長様のお説教にげんがりしていた。

因みに、絹旗は家に着くと直ぐに寝てしまった。大和としては彼女の衣類や下着を買いに行くつもりだったのだが無理に起こすのも気が引けたので、そのまま寝かすことにした。

(アレイスターの野郎も一々細けエヤツだなア あれぐらい見逃してくれてもいいじゃねエか・・・)

そんなことを考えている内に『窓のないビル』に辿り着く。それを見計らったかの様に案内人が現れる。

「また何かやらかしたのですか？大和君」

「ちいとばつか能力使って暴れただけだ、別段騒ぐことでもねエよ」

「君の場合ちよつとでは済まないでしょう・・・」

「うるせエな、さつさと中に入れろや こっちは今から聞くお説教にテンション最悪なんだよ」

さつさと終わらせて家に帰りたい大和は案内人に中に入れるよう急かす、案内人にも早くしたいのかこれ以上は何も言わず大和を中へと案内する。

中に入ると直ぐにアレイスターの前に立つ。表情をほとんど見せないアレイスターだが、その顔が呆れた表情を見せている気がするの
は気のせいだろうか。

「あれ程往来で力を使うなど言っているのに・・・どうやら馬の耳に念仏のようだな君は」

やっぱり怒っている。いや、呆れているのかもしれない。いずれにせよ大和にとつて面倒な状況であることには変わらないのだが。

「仕方ねエだろ？能力使わなきゃオレがKOされちまってたよ」

「私が言っているのは能力の使用についてはない・・・“聖人”の力を使用したことについてだ」

“聖人”という単語に大和はピクリと反応する。・・・やっぱりバレたか、恐れいるよアレイスター様。

「聖人は本来なら魔術側の所有物だ、なのに君は能力者でありながら聖人の力をも持つ。これが魔術側に漏れれば何かしら問題へと発展する。君とて厄介事は避けたいだろう？」

「・・・」
「その上君の場合はそれだけでは収まらない。君の持つ力は科学と魔術を根底から覆してしまうものだ」

「アレイスター」

そこまで言うとうとうやく大和が口を開く。大和がアレイスターを見る目には明らかに敵意の色が浮かんでいた。

「オレは確かにお前の右腕だ、だが犬にまで成り下がった覚えはない。お前の憂いを晴らすためにオレは存在する、お前はオレの起こした問題を解決するために存在する、違うか？」

目だけではなく、その言葉にも敵意が含まれている。元々大和は人の言う事を素直に聞く人間ではない、それが統括理事長であっても

だ。

「つまり協力はする、だが命令は聞かない、そういうことか？」

「そオゆうこつた、あの時から何一つ変わらねエスタンスだ 科学てか魔術とかがどオなるうが知つたこつちゃねエ オレの障壁になるんだつたらブツ潰すだけだ」

最後に大和は何か言おうとしたが何も言わなかった。だがアレイスターには大和が何を言おうとしたかはすぐにわかった。

邪魔するならお前も容赦はしない、と。

「もオいいだろ？さつさと家に帰らせろ、365日24時間逆さで浮いてるだけのお前と違って疲れてんだよ」

大和は回れ右をして案内人呼び出そうとする。

「では最後に一つだけ聞かせてくれ」

「なんだよ？」

「君は自宅に少女を連れ込んでいるようだが、まさか君はそういう趣向の持ち主なのか？」

「紛らわしい言い方してんじゃねエ！！！！！！誰かに勘違いされんだろオがア！！！！！！あとオレはロリコンじゃねエ！！！！！！」

「君がお望みと言うならもっとその気になる環境を提供するが・・・」

「人の話しを聞けエエエ！！！！その気になるってどんな環境なんだよオオオオオ！！？」

先程までのシリアスな雰囲気を持ち壊すかの如く、大和の怒声が窓

のないビル内に響いた。

「やれやれ、彼を怒らせてどうするつもりですか？本気で怒らせれば一番困るのは貴方でしょう」

大和を外へと送り、戻って来た案内人は上司であるアレイスターにため息を吐く。

「彼が暴走しても君なら彼を止めることができるだろう？」

「冗談言わないでください 彼とまともにやりあってタダで済む訳ないでしょう・・・」

案内人は今日何度目になるかわからないため息を吐く。こんなことが毎回毎回続いていたら、胃が保たない。そろそろ本気で転職を考えそうにもなる。

「よろしいのですか？彼をほっておいて、あの様子では“聖人”の力だけでは済みませんよ？」

「それだけの利用価値が彼にはあるということだ」

アレイスターはニヤリと微笑む。一見優し気な微笑みに見えるが、アレイスターという人物を知る者が見れば邪悪な微笑みと感ずるだろう。

「彼の起こす問題など利用価値に比べれば微々たるものだ、例え魔術側と戦争になろうとも彼に勝る者など存在しない」

「まアそれは言えてますね、魔神クラスの魔術師でも引つ張って来なければ話しにすらなりませんしね」

アレイスターとしても戦争というのは最後の手段だ。仮に科学と魔術の間で戦争が勃発すれば学園都市もタダでは済まない。当然大きな被害も出るだろう。だがどんなに大きな被害が出ようが、学園都市の敗北はあり得ない。これだけはアレイスターは確信している。彼がいる限り、神鬼大和という名の最終兵器ファイナルウェポンがこの街に存在する限り……。

「プランはこれまで通り継続する」

「……彼の邪魔が入るかもしれませんよ？」

「何も問題はない 彼の妨害もプランの一部なのだから……」

だが、アレイスターはまだ知らない。彼がそのプランを叩き潰そうとしていることを。

そして、彼は知らない。自分自身がそのプランであることを……。

第五話（前書き）

次話からかなり時間が飛びます（汗）
後先考えなかった結果がこ
れです

第五話

「ふわア〜眠みイ　こりゃア明日も寝不足確定コースだな」

窓のないビルから脱出（？）した大和は一人学園都市の夜道を歩いている。普段ならこのまま自宅へ帰るのだが、一つやり残したことがあるので、自宅のフカフカベッドへダイブはまだお預けだ。

大和はポケットから紙を取り出す。その紙にはとある研究所への地図が書かれていた。

（さてと、帰る前に一仕事すつか・・・）

地図に書かれている場所を確認すると、大和はニヤリと顔を歪ませる。

「「ゴミ掃除」といくかア　クソ野郎共」

「何イ！？取り逃がしただと！？貴様らはガキ一人連れ戻すことから満足にできるのか！？」

「申し訳ございません・・・」

白髪の老人が屈強な男数人に怒鳴りつける。老人は白衣を着ているのでおそらくは科学者だろう。

傍から見ればかなりシニールな光景だが、この研究所の所長と部下という設定を加えれば納得もできる。

「しかし所長！邪魔が入ったのです！仲間も一人そいつにやられて・
・・」

必死に男は弁明をするが、老人はさらに怒鳴りつける。

「聞けばその邪魔とやらもガキだったそうじゃないか！ 大の大人
がガキに負けるとはどうなっておるのだ!？」

「いいやジイさん、そいつらは悪くねエぜ 相手がオレじゃ仕方ね
エよ」

何処からともなく声が聞こえたかと思うと、突然凄まじい轟音がな
り後ろのドアが破壊される。
破壊されたドアから誰かが中に入ってくる。

「こんばんは、お前ら全員殺しに来たぜ」

緊迫した空気には似合わない明るい子供の声が聞こえたかと思うと、
その声の主である神鬼大和が堂々と部屋の中に入ってくる。

「貴様何者だ!?!どうやって研究所に入ってきた!?!」

老人が鬼の形相で尋ねるの対し、大和は八二カミながら答える。

「そんなの正面突破に決まってるだろ？ わざわざコソコソと侵入
する必要なんざねエからなア あっ因みに他のヤツらは既にご臨終
だア あとはテメエらだけだから」

「所長!!!こいつです!!!こいつが今朝オレたちの邪魔をしたヤツ
です!!!」

「ん?テメエら今朝のクソ野郎の残りカスかア?あー残念だけどテ

メエらのお仲間はくたばつてたわア！　一応急所は外したんだけど即死だったみてエだわ　安心しろ、死体はちゃんとゴミ箱に捨てたから」

何が可笑しいのか大和はゲラゲラと笑いながら目の前の標的にゆっくりと近づいて行く。

その目は獲物を狙わんとする野獣のそれだ。ただの野獣ならまだよかったのだが、彼らの前に居るのは学園都市最強の野獣だ。

「さアて今から三秒だけやつからその間に神サマにでもお祈りするんだなア　テメエらみてエなゴミでも最期ぐれエは応えてくれるかもしんねエぞ？」

「随分と勝手な事を言ってくれるな小僧、此処は科学の街だ　神頼みをするなどナンセンスだ　それに・・・死ぬは貴様だ小僧！！」

叫んだのと同時に老人は一気に奥のドアへと走る。

「お前たち時間を稼げ！！私はアレの準備をする！！」

（時間稼ぎ、あのジジイ何かする気だな　それに去り際に言ったアレってのも気になる・・・）

大和としては直ぐにでも後を追いかけていたが、アレイスターからは皆殺しにするようにと指示を受けている。大和は最初から皆殺しにする予定だったので問題は無い。とりあえず目の前にある障壁から片付ける事にする。

「オレ相手に時間稼ぎったア面白エ　果たして何秒立ってられっかなア？」

悪魔の様な笑みを浮かべて学園都市最強の怪物が今狩りを再開する。

「何なのだあの小僧は！？一体どうなっている！？」

ある物の準備をしながら白髪の実験者は叫び続ける。少なくとも此処に来るまで30人は居たはずだ。それをあの小僧は皆殺しに言った。あり得ない、高々中学生ぐらいの子供がそんなことできるなど。

だが、こちら側には切り札がある。まだ試作段階だがその威力は置き去りを使った実験で確認済みだ。勝てる、絶対に。そう確信した時だった。

「よオジジイ、準備とやらは終わったかア？」

先程の様にドアを破壊する事なく大和が絶望と共にゆっくりと入って来る。意地悪そうな笑みを浮かべながら。

「貴様・・・先程のヤツらはどうした？」

「あアあんなヤツらで時間稼ぎ出来るとでも思ってたのかア？舐めてんじゃねエぞコラ」

首をコキコキと鳴らしながらとんでもない事をサラリと言っている。見たところ傷どころか汚れ一つない。

一体この小僧は何者なのだ？

ますます疑問が生まれる。

「随分と強い者のようだ。だが貴様もここまでだ」

白髪の研究者は白衣から何かを取り出す。それは何かのスイッチのようだ、アレというのはこれの事だろうか。

「何だそらや？爆弾でも爆発させるのかア？無駄だから止めとけ、
テメエだけ吹き飛ばさぞ？」

「ふん、科学者たる私が爆弾なんぞ物騒なもの使うと思うか？爆弾
なんかよりも強力なものじゃ」

そう言うと白髪の研究者はスイッチを押す。

キィィィィィィィンと甲高い音が鳴ったかと思うと突然の頭痛が
大和を襲う。

「テメエ・・・何しやがった？」

「こいつはキャパシティダウンといって能力者に反応する装置だ
その様子を見る限り貴様は高能力者のようだな」

「・・・」
「どうした小僧？さっきまでの虚勢は？あまりの苦痛に言葉もでん
のか？」

白髪の研究者は自分に酔ったかの様に言葉を続ける。

「アハ、アハハハハハハハハハ！！！！こいつは傑作だア！！」

何か切れた様に大和は突然大声で笑い出す。何かに操れているか
の様に、いつまでもいつまでも。

「何故だ・・・？何故キャパシティダウンが効いていない!?」

「バカだろテムエ？そんなもんで勝てるとも思ってたのかよオ？抱きしめたくなくなるぐれエ哀れだぜテムエ」

ようやく笑い終えたのか大和はゆっくりと話し始める。

「何で効かねエのか？簡単だ、そのキャパシティダウンとやらの音を聞いたつつう事象を拒絶しただけだ」

「事象を拒絶しただと・・・そんなこと出来る訳が・・・!?」

ジジイが何かに気付いたのか、その顔がみるみる内に青ざめていく。

「まさか貴様、“事象選択”か!？」

「ようやく気付いてくれたかよ、気付いてくれたお礼に最高にキツイ死をプレゼントしてやる」

そう吐き捨てるのと大和はゆっくりと白髪の実験者に近く。研究者は逃げようとするが素早く前に回り込むと、動けない様に両足を骨を砕く。

「ギヤヤヤアアアア!!!????」

激痛のあまりジジイは大声で悲鳴をあげる。痛みからか、それとも恐怖からその目には若干涙らしきものが見える。

「待ってくれ!!!わしを殺してみろ、貴様統括理事会から睨まれるぞ!!!」

「ああ？どオいう意味だそれ？」

「キャパシティダウンを製造するように頼んだのは他にもない、統括理事会だ!!!」

「!？、……なるほどなア」

「わかったか？わかったなら早くわしを……」

それ以上言葉が続くことはなかった。何故なら大和がさっきの男から奪った銃で頭をブチ抜いたからだ。

さっきのジジイの言葉で大和はこの仕事の本当の目的を理解した。

（最初から妙だと思ったんだ　こんなクソみてエな簡単な仕事何でオレにやらせたのか……）

今回の仕事はただの研究所の破壊と研究員の皆殺し、規模の大きい研究所ならまだしも、大して大きくもないこんな研究所の掃除に学園都市最強の戦力を使うこと自体がおかしいのだ。

（アレイスターのヤツ……オレを実験台に新兵器キャバシテイダウンの性能を試しやがったな!!）

あの研究者は最期にキャバシテイダウンは統括理事会の命令で製造したと言った。統括理事会が下した命令をそのトップであるアレイスターが知らない訳がない。

つまりアレイスターは対能力者用の新兵器があるのをわかって大和に仕事を命じたのだ。

（事前情報がいやに少なかったのも、オレを実験台にするためと考えりゃ合点がいく　絹旗のことにしてもとやこや言わなかったのも全てはこれに繋げるためか……）

クソったれが

大和は齒軋りをし、怒りを露わにする。

利用されたことに怒りを感じている訳ではない。今に始まったことではない。元々大和とアレイスターはお互いを利用し合う関係ではないのだから。

大和が気に食わないのはこんな安い仕事、新兵器の性能の確認という仕事に学園都市最強の存在である自分が使われたことだ。

（面白エじゃねエかアレイスター　テメエがその気ならこつちも利用させてもらうぜ　今にテメエのそのツラ真つ青にしてやっから覚悟しろよ！！）

そう決意すると大和は研究所を後にした。獰猛な笑みを浮かべながら……。

「理事長、大和君からの報告です　研究所は完全に破壊、関係者は全員始末したとのことです」

報告を聞くとアレイスターは満足そうな笑みを浮かべた。

「よろしかったのですか理事長？あのような内容の仕事を彼にやらせて　随分と御立腹でしたよ」

「今回の件は彼でなければならなかったのだよ　その辺の雑魚を使つたところで新兵器の性能を確かめられなかったのですね」

「満足のいく結果は得られたのですか？」

「もちろんだ、お陰で素晴らしいデータが採取出来たよ」

理事長は何か得たものがあつたのだろうか？案内人からみれば対能力者というのが売りの新兵器が能力者の大和に簡単に突破されたと

いう欠陥しか見出だせなかつたのだが。

「・・・新兵器は見事に大和君に突破されましたが？」

「彼があ程度の物で屈するはずがないだろう？私が見たかったのは新兵器の性能もだが、あの環境下で彼がどの位闘えるか見たかつたのだ」

「・・・それ彼が知つたら間違いなく殺されますよ理事長？」

「その心配はないよ 私が死ねば一番困るのは彼自身だ」

「・・・」

全く理事長には恐れ入る。殺されることは絶対ないとわかっているからこそ、ここまで彼を利用出来るのだ。

仮に大和が理事長に牙を剥いても何かしらの策が有るのだろう。

一体彼と理事長の駆け引きにいつまで付き合わされるのだろうか・・・。

新たな始まり（前書き）

宣言通り、時間がかかなり飛びます（汗）
本格的に飛ぶのは次話からですが（汗）
何卒ご勘弁お願いします

新たな始まり

学園都市

東京の西部を切り崩して開発された街であり、学園の名が示す通り総人口230万人中8割が学生というまさに学生のための街。

「記憶術」だの「暗記術」という名目で超能力研究、即ち「脳の開発」を行っており、それに伴ってか科学技術もブツ飛んでおり、「外」の技術とは約20年程の差があると言われている。

そんな学園都市だが朝は『外』と同じ様に訪れる。

「学校だるいなア〜」とか「今日サボっちゃおうかなア〜」と学生が思う考えるのも、同じく学園都市も変わらない。

どの世界において基本的に朝はダルい、憂鬱なのである……。

「大和さ〜ん！！超起きてください！！朝ですよー！！」

そんなモヤモヤを吹き飛ばすかの如く、元気な声が学園都市のとある学生寮に炸裂した。

主人公設定（前書き）

タイトルの通りです 途中ちょっとした変更があるかもしれません
（汗）

主人公設定

名前： 神鬼 大和（かみき やまと）

性別： 男

年齢： 13歳

人物： 年齢的に本来は中学3年だが上条当麻、垣根帝督の護衛、監視のために統括理事会の権限で彼らと同じ高校に通っている。
アレキスターをも驚愕させる力を持つことから学園都市の“最終兵器”（ファイナルウェポン）と呼ばれている。

容姿： 髪の色は茶髪。髪型は鏡音レンの様な感じ。
身長はあまり高くなく、寧ろ低い方に分類される。
肌の色はアクセラレーター程ではないがかなり白く、右目が赤、左目が青と左右色の違う瞳を持つ。
服装は垣根とよく似たものを着るが、とにかく目立つものが多い。
統括理事会級の権限を使って学校でも私服が着用できる様にしている。

性格： 超がつく程の攻撃的な性格で破壊志向が非常に強い。だが無意味な戦闘は好まない。
暗部の人間ながら喜怒哀楽が激しく、感情も豊か。
基本的には親切なのだが絹旗曰く、親切ではあるが優しくはないらしい。

生活： 物心ついた時から学園都市に住んでおり、現在は絹旗と2人で学園都市でも1・2を争う巨大な学生寮に住んでいる。

基本的に自炊はしないが、プロの料理人顔負けの腕の持ち主。
学園都市からの莫大な奨学金に加え、暗部での仕事料も貰っている
のでかなりの金持ち。

知能： アクセラレータをも超える学園都市最高の頭脳の持ち主。

戦闘能力： “事象選択” という能力に加え、“聖人” の力を持つ
つなど、学園都市最強の戦闘能力の持ち主。

アレイスター曰く、これはまだ大和の本当の力の一部らしい。
また鋭い観察力、状況を一瞬で把握する理解力、最適な選択を一瞬
で下す判断力をも備え持つ。頭の回転も早く相手の裏を突くを能力
も高い。

能力： オールセレクト 事象選択

発生した事象に対して選択権を持つことができる。

簡単に言えば、起こってしまった出来事をなかったことにしたり、
別の結果に変えたりすることができる。

未来の事象に対して選択権を持つことはできない、またこの能力の
使用者以外の人体に直接能力を作用させることはできない。

一度に選択できる事象は3つまで（ただし大和はある方法で最大9
つまで選択できる）

その他： 頭脳明晰、容姿端麗という事もあってか“秀才美男”

（クールメン）という通り名で学校中の女子の羨望を集めている。

（本人は超がつく程嫌がっている）

自他共に認める超甘党で甘い物に対する情熱と執着心はし顔負けの
レベルである。

呼び出し(前書き)

タイトルって考えるの難しいですね

呼び出し

少女はどこぞ緑の恐竜顔負けのヒップドロップが大和に炸裂する。傍から見れば仲の良い兄妹、朝から騒がしい光景に見える。少女が能力を使用していなければの話だが……。

「グフツ！！？？絹旗テメエだから能力全開でそれすんなっていつも言ってるオがアアアア！！！！！」

「いつ迄たつても大和さんが起きないからじゃないですか！！！」

「もつと他に起こし方あんだろオがアアアア！！！！オレじゃなきゃ確実に死んでんぞオ！！！」

「はア起こしてもらったのに文句ですか……昔はこんなんじゃないかったのに……」

「おいテメエ何遠い目してエんだ、ブチ殺すぞ」

朝早くから怒声をあげたのは神鬼大和、その外見からはわからないがこつ見えて学園都市最強の能力者である。これから新しい1日が始まるというのにその顔は既に残業明けのオヤジの様な疲れ切った表情をしている。

学園都市最強に臆することなく強烈なヒップドロップ……改め殺人ドロップを炸裂したのは絹旗最愛、大和の同居人だ。

絹旗はレベル4の空素装甲だ。オフエンズアーマー身体の周りに空素の膜を張る事で銃弾を防いだり、軽々と車を持ち上げたりすることができる。

そんな能力を全開にしたヒップドロップは本来なら地面にクレーターが出来かねない威力を誇る。

“聖人”である大和とはいえ直撃すれば流石に痛いのだ。痛いだけで済むだけでもおかしいのだが……。

絹旗と同居生活を始めてから早3年が経つ。最初は何処かきこちなさがあったが今では本当の兄妹の様に接してくる。先程のやり方も前までなかったことだ。……殺人ドロップはやめて欲しいが。

「大和さん、今日は超どうしてこんなに早く起こすように頼んだのですか？」

朝食の食パンを口に運びながら絹旗は大和に尋ねる。

大和は学校ある時以外は基本遅寝遅起きの生活スタイルだ。今日は7月20日、夏休み初日だ。だから絹旗は大和が何故早起きをしたのか気がなったのだ。

「学校の担任から呼び出し喰らったんだよ 大和ちゃんは頭が超いなので先生のお手伝いをして下さい だとさ こんな事になるんだつたらテストでオールパーフェクトなんざ取らなきゃよかった……」

学園都市中の全ての学生を敵に回しかねない発言をする大和。実年齢13歳の中学生なのに飛び級で高校に通っている時点で十分天才クラスなのだが、そこにオールパーフェクトときたら連行されるのも無理はない。

(次は超手抜いてやるか……)

次のテストに向けて最悪な計画を練っていると、ピンポンと自宅のチャイムがなった。

「はいはい、超今行きますよー」

いつも通り絹旗がパタパタと玄関へ小走りで向かった。
こんな朝っぱらから誰だ？と思いつながら大和は大和特製の超激甘力
フェオレを飲む。

「大和さん、超お客様ですよ」

「あア？オレにか？」

大和は椅子から立ち上がると玄関へと向う。こんな朝早くから自分に客が来るのは久しぶりだ。

「よオ大和、おはようさん」

「帝督？こんな朝っぱら何か用か？」

玄関に立っていたのは服の襟ぐらいまで伸ばした長い金髪にホストを彷彿させる服装、さらには端正なルックスの持ち主、大和の親友である垣根帝督だ。

「その様子じゃお前も小萌先生に呼び出されたみてえだな」

「お前もってこたア帝督もか？」

「ああそうだぜ なんでもバカ共の補習の手伝いらしいぜ」

この垣根帝督も大和と同じくレベル5、学園都市の第二位の能力者だ。大和程ではないが当然頭もかなり良い。

高校に入学して最初のテストで2人揃ってオールパーフェクトを叩き出した時は学校中の噂になった。

「当麻のヤツも補習のメンバーらしいぜ？」

「はっ、当然だろ。アイツが補習メンバーじゃなきゃ誰が選ばれんだよ？」

今この場には居ないもう1人の親友、上条当麻をこれでもかとはかりにバカにする2人。

どうせ今頃不幸だー！とかが言っつて頭を抱えてるのだろう。

「それにしても最愛ちゃん相変わらず良い子だな。ありや将来有望だぜ？」

「バカ言っつてんじゃねえよ。あの野郎朝からオレ起こすのに能力全開でヒップドロップだぜ？そのどこが将来有望なんだよ？」

「はあ羨ましいなあ。大和は俺何か毎日1人で起きてんだぜ？」

「それが普通なんだよ。バカ。オレの場合はちよつと特殊なだけだ。」

「2人共、時間はいいんですか？超そろそろ時間ですよ？」

どうやら玄関で話している間に登校時間が近づいて来たようだ。絹旗が2人にその事を伝える。

「帝督悪いな。オレ歯磨いたら直ぐ追いかけるから先に当麻のヤツ迎えに行つてくんねえか？」

絹旗から渡された歯ブラシ片手に大和は垣根に先に行くよう伝える。

「オーケーわかった ゆっくり歩いとくから急がなくていいぜ アイツの寮ここからそんな遠くねえし」

そう言うと垣根は当麻を迎えに行くべく玄関から出て行った。

垣根は急がなくてもいいと言ったが、やはり友人を待たすのは気が引けるので大和は何時もよりスピードを上げて登校の準備をする。

「じゃあ絹旗いってくんぜ 出掛けんならちゃんと鍵閉めろよ」

「はいはい超わかりましたよ 行ってらっしゃい」

自宅を出ると大和は垣根に追いつくために走り出した。

予想外（前書き）

かなり無理矢理な展開です（汗）

感想、ご意見お待ちしております

予想外

大和の寮から当麻の寮まではそれ程遠くなく歩いても10〜15分ぐらいで到着する距離だ。時間的にもまだ少し余裕があるので垣根はのんびりと当麻の寮へと向う。

(補習の手伝いってなににするんだ？まさか小萌先生の隣に立って教鞭を執るのか？)

これからの補習の内容を考えながら垣根は歩く。夏休み初日から学校に行かなきゃなんねえとはついてねえな。

「おーい！！帝督ウー！！」

声が出た方向を見ると大和がこちらに向かって走って来た。先程までの真つ黒なパジャマではなく全身赤をベースとしたその格好はホストの様だ。

よくエセホストと呼ばれる垣根だが大和の方がよっぽどホストに近いだろうと垣根は思っている。

「おう、随分と早えじゃねえか？」

「オレは人待たせんのが嫌いなんだよ 親友ときたら尚更だ」

長年暗部に身を置いてきたためか、大和は時間に関してはかなり気にする性格だ。特に人を待たすのを極端に嫌う。無論アレイスターは例外だが。

「なア垣根、補習メンバーって当麻以外に誰がいんのか知ってるか

「？」

「いや俺も当麻しか知らねえ けど当麻がいるってことはあの2人も一緒だろ 何せ三バカ（デルタフォース）だからな」

「そりゃ言えてるなア つかアイツらに補習なんざ小萌先生も大変だねエ」

「わかるぜその気持ち 俺だったら絶対投げ出すけどな」

そんな失礼千万な内容の会話をしている間に2人は当麻の学生寮に辿り着く。大和の住んでいる学生寮と比べるとかなり小さい建物だ。もつとも大和の寮が大きい過ぎるだけなのだが……。

当麻の部屋の前に到着すると垣根はインターホンを鳴らす。何時もなら直ぐに出てくる筈の当麻だが今日にかぎっては中々出て来なかった。

聞こえてねえのか？と呟くと垣根はもう一度インターホンを鳴らす。だがそれでも当麻は出て来なかった。

「おい当麻！！お前補習だろ！！まだ寝てるのか？」

だが返事はない。折角の夏休み初日を見事に潰されたことでイライラしていた大和には我慢の限界だった。

無言でドアの前に立ち、ドアノブを掴むと一気に引く。聖人の力で引かれたドアはカギ諸共破壊され、客人を中へと招き入れる。

「おい当麻、折角迎えに来てやったのにガン無視したアいい度胸だなア 誰の為に朝から来てやったと思つて……」

大和は途中で言葉を切らした、いや切れてしまったと言うべきか。ドアを潰して最初に目に飛び込んできたのは親友である上条当麻が銀髪の女の子に頭をかじられていた光景だった。それだけでも十分驚きの光景なのだが問題は親友の頭にかじりついている女の子は頭にフードらしきもの被っている以外は何も着ていない、つまり完全素っ裸だったことだ。

「おい大和どうした？何固まってんだ？」

後ろから垣根が顔を出すが、目の前の衝撃的光景を見ると大和と同じく固まってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

超がつく程の気まずい空気が流れる。

垣根はポケットから携帯を取り出すとどこかへ電話をかけ始めた。

「あーもしもしアンチスキルですか？今目の前で親友が女の子に淫らな行為強要してるんですが・・・」

「ちよつと待て垣根えー！！！！誤解だ誤解！！！！」

学園都市の平和な朝に1人の少年の悲痛な叫びが響いた。

「理事長、“幻想殺し”が禁書目録と接触しました “未現物質”と大和君も一緒です」

「フフ、そうか・・・報告ご苦労」

案内人からの報告を聞くとアレイスターは満足そうに微笑む。

「よろしいのですか？大和君はともかく、未現物質の接触は完全に予想外でしょう？」

「確かに予想外だがプランの進行に支障はない 寧ろ好都合といったところか・・・」

「何が好都合なのですか？大和君はともかく未現物質の接触は完全に予想外でしょう？」

学園都市の最深部に生きている上に、本来なら魔術側の所有物である聖人の力をも持つ大和なら遅かれ早かれ魔術側に接触するだろうと予想できた。しかし学園都市の第二位である未現物質の接触は完全に予想外だった。

いくら大和の親友とはまさかこのタイミングで・・・。
そこで案内人は気付いた。アレイスターの狙いを。

「わざと未現物質を接触させたのですね・・・？」

「・・・何故そう思う？」

「簡単ですよ、あなたには『アンダーライン滞空回線』という絶対的な情報網がある 彼等の行動は逐一わかる、つまり彼等が禁書目録の居る幻想殺しの学生寮に向かっていることもわかっていた筈です」

「それで？」

「本来に未現物質と禁書目録の接触を避けたいのであれば一時的に彼等を別行動させる事もできたし貴方ならこれぐらいの事何の造作もないことだ。だが貴方はあえてそうしなかった。最初から未現物質を禁書目録に接触させたかった・・・違いますか？」

アレイスターはただ黙って案内人の推理を聞いていた。何も言わずただ静かに。

数秒ぐらい沈黙が続いただろうか、アレイスターがゆっくりと口を開き始めた。

「素晴らしい推理だ。だが完全には正解ではないな」

「？」

「私は未現物質・・・垣根帝督と禁書目録を接触させたかったのではない・・・彼を魔術と接触させたかったのだよ」

「・・・は？」

言っている意味がわからなかった。何故彼を？学園都市の第二位である彼を。魔術とは限りなく縁のない彼を何故？

「私が予想外と言ったのは彼が垣根帝督がまさかこれ程早く魔術に関わった事にだ。未現物質はまだ私にも、そして彼にも完全には解析出来ていなというのに・・・」

「言っている事の意味がよくわからないのですが・・・」

「“未現物質”とはどのような能力だ？」

そんなのわかりきっている。未現物質とは『この世に存在しない物質』を作りだす能力だ。未現物質の前ではありとあらゆる物理現象、自然の法則すらも通らないまさしく未知なる物質だ。その能力の応用性の高さは第一位をも上回ると言われている。

「では何故『能力者』は魔術を使用出来ない？借りに使用すればどうなる？」

それもわかりきっている。才能無き者が異能の力を使用するために産み出したのが『魔術』と呼ばれるものだ。能力者、一度でも脳の『開発』を受けた者は脳の回路が常人とは異なるため魔術は使用出来ない。仮に無理に魔術を使用すれば人体に甚大な損傷が出てしまう。

そこで案内人はハツとなる。

「理事長・・・貴方まさか・・・」

「君の想像の通りだ。『魔術を使っても人体に影響が出ない』という未現物質を生成すればどうなるか・・・彼とて自分の体内で未現物質を生成したことはあるまい」

「そんなこと不可能です！出来る筈がない！」

「何故そう言い切れる？君の言う通り未現物質は自然の摂理をもすら捻じ曲げることが出来る能力だ。決してあり得ない事ではあるまい」

「・・・・・・・・ツ」

「垣根帝督の性格だ 魔術に関わっていく内に必ず私と同じことを考える筈だ それは君も同感なのではないかな？」

その通りだ。学園都市最強の親友、神鬼大和をライバル視し、打倒アレクスターを掲げる彼なら目的を達成するために魔術を取得しようとするだろう。目的の為ならどんな危険も省みない・・・それが垣根帝督という人間なのだ。

「・・・何故彼に魔術を取得させようとするのです？貴方には大和君がいるでしょう・・・」

「使える兵士（兵）は多くいて困ることはない 彼が魔術を取得すればあちら側にとって脅威になることは間違いない それだけ優位に立てる 平和的な交渉においても、戦争においてもね・・・」

「！！ 戦争でも始めるつもりですか・・・？」

「フフ、まさか 私とて戦争は望まないよ 多くの労力と犠牲が伴うからね」

だが最後にアレクスターは今はまだね・・・と付け加えた・・・。

魔術（前書き）

お気に入り登録された方ありがとうございます。

魔術

「いやぁー正直かなり焦ったぜ 俺たち3人の友情も此処でジ・エンドかと思っただぜ」

先程の衝撃的な光景を他人事の如くゲラゲラと笑う垣根。

「お前・・・絶対楽しんでるだろ・・・？」

朝だと言つのにげんなりとした表情をしているのは今回の騒動の当事者である上条当麻。これから地獄の補習なのだが既に疲れ切つてしまっている。

「朝から大変だなアお前も 正直かなり同情するぜ」

そうは言うもの明らかに同情する気のない笑いを浮かべているのは今回の騒動の第一発見者の大和。

「テメー明らかに同情する気ねーだろ！！??？」

当麻の怒声を完全に無視した大和はくるりと向きを変えると、安全ピンを何十本もギリギリと光らせている修道服を身につけている女の子を見る。

「で？テメエは魔術結社とやらに追われて逃げていると 少しでもって頭ん中に10万3千冊分の魔術の知識が詰まっている 素っ裸だったのは当麻の右手に触れたから そうだな？」

大和は先程当麻から聞いたことを女の子改めインデックスに確かめ

る。

インデックスがコクンと頷いたことから間違いないようだ。

「おい大和 お前こいつの言うこと信じんのかよ？」

垣根が意味不明と言う表情で尋ねてくる。当麻も同感だと言わんばかりの表情をしている。信じるも何も聖人である大和にとって今回の件は立派な身内事なのだ。

イギリス清教、禁書目論、インデックス魔術結社、そして10万3千冊の禁書・
・全てが大和にとって全て知っている事だ。

(コイツら完全にオレの事疑ってやがるな・・・ 聖人の事はバレルと面倒だし上手く誤魔化すか・・・)

「別に信じてる訳じゃねエよ ただ世界は広い 能力つてもんがあらんなら魔術つてもんがあつても不思議じゃねエだろ？それに“完全記憶能力”つても実在する力だ その“歩く教会”とかいう服だつて何かしら異能の力があつたから当麻の右手に反応したんだろ？」

大和の言葉を聞いて垣根と当麻はなるほどといった表情をする。再び大和はインデックスを方に振り返えると言葉を続ける。

「デメエはこれからどオするつもりだ？」

「そつだよ、俺の家にいるか？何なら鍵渡しておくぞ」

当麻も同じことを思ったのか大和に続いてインデックスに質問する。垣根も気になるのかインデックスの返事を待っている。

「ありがとう でもいいよ 出てく」

そう言うとインデックスは破壊された玄関に向かって歩いて行く。

「何でだ？追われてんだったら此処でじっとしてりゃいいじゃねえか それにお前『外』の人間だろ？そんなカツコで出歩いてたらアンチスキルに捕まんぞ？」

垣根はインデックスに言うが彼女は首を横に振る。そして自分の服を掴む。

「この歩く教会は魔力でできているの だから敵はこの服の魔力を探知して追ってくるの・・・ その君に破壊されちゃったけど」

「だったら問題ないじゃねーか 発信源ぶっ壊したんだから探知は出来ないだろ？」

「だとしても『歩く教会が破壊された』という情報は敵に伝わっちゃうよ 簡単にいえばこの服は『要塞』並の防御力のある特殊な服なの 理由はどうあれ『要塞』が壊れたとわかったら何かしらの手は打ってくると思う」

「おいおいちよつと待てよ じゃ尚更放り出す訳にはいかねえじゃねえか 敵が追って来るのわかってんのに丸腰の奴放り出す程俺たちは鬼畜じゃねえぜ？」

垣根の言葉を聞いたインデックスはきよとんとした顔をしたが、直ぐにっこりと笑顔になると垣根と当麻に言った。

「じゃあ、私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」と。

その言葉を聞いて2人は言葉を失う。
優しい言葉の筈なのにその言葉にはどこか厳しさを感じた。
笑顔の筈なのにその目はとても悲しそうに感じた。

(地獄の底か・・・ 笑えねエなア・・・)

心の中で大和は呟いた。幼い頃から学園都市の暗部に、それもこの街の最深部に限りなく近い暗部に身を置いてきた大和にはその言葉をどれほどの決意で、どれほどの思いで言ったのかよくわかる。

大和は静かに立ち上がると2人に言う。

「もオいいだろ、コイツだって大丈夫だって言ってるんだから放って置きゃいいんだよ ホラ学校行け 早くしねエとマジで遅刻すつから」

大和の言葉を聞くと垣根もそうだな・・・と言って立ち上がる。インデックスもありがとうとだけ言うと当麻の学生寮から出て行ってしまった。

当麻が後を追いかけてよとしたが大和は右手で当麻の肩を強く掴む。

「お人好しも大概にしるよテメエ 仮にアイツが何かに追われてるとしてテメエに何が出来んだア？自分の世話一つ出来ねエヤツが一丁前にヒーロー面してんじゃねエよ」

インデックスの気持ちが悪くわかるこそ大和はあえて当麻にキツク言ったのだ。このまま彼女を引き留めていれば十中八九、当麻に危険が及ぶ。彼女とてそんな事してまで引き留めては欲しくないだろう。

大和は彼女が忘れていった帽子を拾うと当麻に渡しながら言う。

「これはお前が持つてる　これはお前の起こした問題だからな」

当麻に帽子を渡すと大和は学校に向かうべく玄関へと向かう。

「玄関のドアは直しておいてやる　オレと帝督は先に行くから遅れねエようにしろよ」

そう言うと大和は先に行ってしまった。後から垣根もそれに続く。時間的に急がないと遅刻する時間なのだが当麻は直ぐに立ち上がる事が出来なかった……。

「理事長、彼をお連れしました」

「ご苦労、下がってくれ」

アレイスターがそう言うと案内人は訪問者を残すとフッと何処かへ消えてしまった。残ったのはアレイスターと訪問者の2人だけ。

「既に知っていると思うが学園都市に魔術側あちいの人間が侵入した人数は3人　3人共君がよく知る人物だ」

「わかっているなら何故直ぐに対処しない？遊んでいるのか……？」

「予想外の事に侵入者の内の1人である禁書目録に“未現物質”、“幻想殺し”、そして“事象選択”の3人が接触してしまつてね

対処しようにも出来ないのだよ」

「予想外だと？ふざけるな 初めから貴様の手の内だろうが」

来訪者はあからさまに怒りを露わにする。対するアレイスターはただ笑みを浮かべるだけだ。

このままでは平行線を辿るだけだと判断した来訪者は話を次の段階へ進める事にした。

「オレにどうしろと言うのだアレイスター まさか身内同士で潰し合えとでも言うんじゃないだろうな？」

「まさか、私とてあちら側のゴタゴタに巻き込まれるのは勘弁願いたいところだ しかしこの街で起こってしまった問題である以上こちら側で対処しなければならぬ・・・」

「どうするつもりだ・・・？」

補習も終わり大和と垣根は自宅への帰路をとっていた。本来ならもう少し早く帰宅出来る予定だったが担任である月詠小萌と今後の打ち合わせなどをしている間に最終下校時刻を迎えてしまったのだ。

「何でお手伝いのオレたちがあのバカ共より帰るの遅くなるんだよオ！ー！」

折角の夏休みを潰された上に帰りまで遅くなった事に不平不満をぶちまけていると垣根がなあ・・・と話し掛けてきた。

「俺たちさああのガキ本当に放って置いてよかったのか・・・？」

大和ははアーとため息を吐くと呆れた様に垣根に言う。

「いいに決まってるんだろ？オレたちがあのチンチクリン助ける必要もなけりや義理もねエ」

「そりゃそうだけだよ・・・」

「それにだ、お前だって面倒事はたくさんだろ？朝は魔術、昼は補習ときたらこつちの身が保たねエよ」

そこまで言う和大和はピクツと何かに反応した。一瞬頭の中でその正体を考えるも直ぐに答えを明らかにすると大和は垣根をチラツと見る。

垣根はまだ気付いてはいないようだ・・・。そう判断した大和は垣根の方を振り向く。

「あー帝督、オレ用事思い出したからさア悪イけど先に帰っといてくんねエ？明日の事はまた後で連絡すつから」

垣根は一瞬何かを考えていた様だが直ぐにわかったとだけ言うつと先に自宅へと帰って行く。

垣根の姿が見えなくなるのを確認すると、大和は近くの路地裏へと入って行く。最終下校時刻を迎えている事もあってか路地裏は目に見える以上に暗く感じる。

路地裏の真ん中ぐらいまで歩くと大和は立ち止まり先程から薄々感

付いて気配に話し掛ける。

「隠れてねエで出て来いよストーカー野郎 それともこっちから引
つ張り出さねエと出てこれねエのか？」

「いや、その必要はないぜい大ちゃん^{やま}」

大和の声に応えたのは聞き覚えのある声だった……。。

〈特別編〉

柵中の三臣（前書き）

今回は大和たちの中学時代の話しです。過去編は不定期に投稿する予定です。

大和たちがインデックスと出会う一週間程前、垣根と当麻の2人は中学からの親友である神鬼大和の家に遊びに来ていた。リビングに大和と垣根と当麻、そして大和の同居人である絹旗最愛の計4人で世間話をしたり、直ぐ間近に迫っている夏休みの予定について話したりとおしゃべりに花を咲かせていた。

「そう言えば今日、中学の時の卒アル持って来たんだぜ」

そう言うとなを思ったのか垣根は自分のカバンから表紙に金色の文字でデカデカと「柵川中学 卒業アルバム」と書かれた分厚い本を引っ張り出した。

「へーえ卒アルかー 懐かしいな ていうか何でそんなもの持って来たんだ？」

「わかってねえな当麻 こんな時こそ卒業アルバム見て昔を懐かしむんじゃないか！」

そんなものなのかと当麻は隣の大和に尋ねるが大和は知らんと簡潔に答えるだけだった。

「みんなの中学時代のアルバムですか？超興味があります！！見てもいいですか？」

「どうぞどうぞ ていうか最愛ちゃん、大和の卒アル見た事ないの？」

「はい・・・ 大和さんはそういった話は超全く話しませんから」

「大和、お前つてヤツは！！何で最愛ちゃんに言わねえんだよ！！俺たち『柵中の三臣』の武勇伝を！！」

「うるせエ！！急にでつけエ声出すんじゃないやねエ！！何が『柵中の三臣』だ！！アレかなり恥ずかしかったんだぞ！！」

2人はそのまま言い争いを始める。仲が良いんだか悪いんだか正直わからないなど当麻ははあとため息を吐く。

「でも『柵中の三臣』か・・・ 懐かしいな 確かオレたちそう呼ばれてたよな・・・」

「超何ですか？その・・・『柵中の三臣』って」

何の事かさっぱりわからない絹旗は当麻に尋ねる。すると大和と言い争いをしていた垣根はくるりと絹旗の方を振り向くと説明し始める。

「俺たち3人の中学の総称、簡単に言えばあだ名みたいなもんだ」

「超大層なあだ名ですね・・・」

絹旗はまさかただのあだ名だとは思っていなかったのか半分拍子抜けの表情をしている。

「絹旗が言う通り今思えば随分大袈裟な名前だよなー あの時は何とも思ってたけどオレ達結構いろんな事したよなー」

昔を懐かしむ様に当麻はしみじみと言う。

「そりゃ言えてる 確かにちょっとやり過ぎたつてのもあったよな
あ まあ楽しかったからいいけど」

当麻に続いて垣根も笑いながら言う。

「ケツくつだらねエ あんなもん今思えばただのバカじゃねエか」

「まあバカつてのは言えてるな でもお前だつて結構楽しんでたじ
やねえか」

垣根が茶化す様に大和に言う。大和はプイと顔を背けたがまあ楽し
かったのは否定しねエと小さく呟いた。

「あの・・・3人は中学の時どんな感じで超過ごしてたのですか？」

やはり気になるのか絹旗は身をのりだす様に尋ねる。

「聞きたい？最愛ちゃん」

「はい！超聞きたいです！」

「聞いたところで面白くも何ともねエぞ」

「いいじゃないか大和 たまには中学の事思い出すのも悪くないぜ
！」

「当麻・・・ テメエもかよ」

3対1。人数的にも場の雰囲気的にもこれ以上は無駄と判断した大和は勝手にしろ・・・と呟くとまたプイと顔を背けたしまった。

「決まりだな」

垣根はニヤリと顔を弛ませると意気揚々に話し始めた・・・。

「とある中学に3人の少年がいた。

1人は一度見たら忘れないツンツン頭に不幸体質、右手に特異な力を持ち

1人はホストを思わせる様な服装に端正な顔立ち、誰も見た事ない力を使い

1人はどう見ても中学生とは思えない童顔と身長に左右色の違う瞳を持つ、学園都市最強の能力者

人々は普通でない3人の事をこう呼んだ・・・

『柵中の三臣』と

土御門 元春（前書き）

誤字、脱字がありましたらお知らせください

土御門 元春

「まさかとは思ったがテメエだったとはな 土御門」

物影から現れたのは大和のクラスメイトにして今朝の補習メンバーの1人、土御門元春だった。

「いつから気付いていたのかにゃー？大ちゃん」

「最初からだよ 学校出て直ぐ誰かが後付けてるのはわかったが誰かまではわからなかったけどなァ」

「じゃあどうして付けてるのがオレだとわかったんだ？」

「それは企業秘密だ 何でもかんでも教えるとも思ってたのかァ？」

「それは言えてるぜよ」

するとピリピリピリと携帯の音がなる。その着信音から自分の携帯ではないと大和は判断する。

携帯の音は土御門のもので彼は電話に出ると何も話さず最後にわかったとだけ言うと言と直ぐに切ってしまった。

「それで、オレに何の用だァ？くだらねェもんだったらブツ殺すぞ」

「そう慌てるもんじゃねえぜい大和 本題に入る前にいくつか聞きたい事あるんだけどいいかにゃー？」

「どオセダメって言っても聞くんだろ？さつさと話せ」

大和がそう言うと土御門はふうと息を吐くと大和に尋ね始めた。

「学園都市に3人程侵入者が入ったんだが大ちゃん知ってるかにゃー？」

「ああ？知る訳ねえだろ」

「本当にゃー？大ちゃんはその内の1人に会っている筈ぜよ」

「はア？テメエ何言って……！！」

そこまで言うと大和はハツとなる。

「その反応じゃ何か心当たりがあるみたいだにゃー」

大有りだ。おそらくその3人の侵入者の内1人はインデックスの事だろう。なら後の2人はインデックスを追っているという敵の事だろうか。

「あのチンチクリン…… やっぱり『外』から来たのかよ」

「じゃ2つ目の質問 大ちゃんが考えているのは多分禁書目録の事だと思っが彼女以外に侵入者らしき人物と接触したかにゃー？」

「してねえよ つーかオレもテメエに聞きてエ事あんだけどよオ」

「オレの質問が終わったら聞いてやるぜい 最後の質問 もしその侵入者が大ちゃんの前に現れたらどうするぜよ？」

「どオもしねエよ 面倒事に巻き込まれんのは御免だからな まアオレに向かつてくんなら話は別だがなア」

「そうか・・・ 手前取らせて悪かったにゃー それでは本題に入るけど・・・」

「ちょっと待て」

土御門が本題に入ろうとするのを大和が止める。大和も是非土御門に聞きたい事があるのだ。

「先にオレにも質問させる 本題に入んのはその後だ」

「んー確かにオレはすっかり話すのも悪いしにゃー いいぜい 何が聞きたいのかにゃー？」

「テメエ何もんだア？」

大和は端的に聞く。

コイツは明らかに普通のヤツじゃねエ、暗部の直感でそう感じたのだ。後の付け方も明らかにプロの付け方だった。今だってそうだ。話している間でもまるで隙一つない。

「テメエのした質問の内容は明らかに統括理事会クラス、それも理事長に近けエヤツじゃねエと知り得ない内容ばかりだ 侵入者の正確な人数、しかもその内1人の素性まで掴んでやがる そこら辺の下っ端じゃわからねエ筈だ」

「・・・」

「それにだ、テメエはインデックスの事を『彼女』と呼んだ 何でアイツが女だつて知つてんだ？しかも何の違和感なく『禁書目録』
つて言つた 普通そんな名前だつたら少しは疑うだろ」

「……………」

「これらから考えだせる事は2つ 1つはテメエは裏の人間で理事長に近いところにいる もう1つはどの位かは知らねエがある程度は魔術に関して知つている事だ 黙つてねエで何か言つたらどオだ？」

「……驚いたぜい まさかたつたあれだけの情報でここまでわかるとはな……」

土御門は驚いているというよりも感心しているといった表情をしている。まさかこの短時間でここまで推理されるとは思つてもみなかつただらう。

観念したかの様に両手を挙げると土御門は再び話し始めた。

「大ちゃん『必要悪の教会』^{ネセサリウス} つて知つてるかにゃー？」

「確かイギリス清教の暗部みてエなもんだっけ？」

「随分とアバウトだか簡単に言えばそんなところぜよ オレは必要悪の教会と学園都市のスパイ、つまり二重スパイつてところなんだぜい」

なるほどなアと大和は納得する。必要悪の教会の一員なら当然魔術の事も禁書目録の事も知つている筈だ。それに学園都市のスパイと

なれば統括理事会、特に理事長であるアレイスターとの距離も近くなる。

「そろそろ本題に入るぜい 侵入者の後の2人は魔術師、おそらく必要悪の教会の人間ぜよ 大和ちゃんにはその魔術師の撃退、そして禁書目録の保護をしてもらいたいんだにゃー 後魔術師は殺したらダメだぜい」

「そんなところだと思っただぜ」

大和はやれやれといった表情をする。土御門は必要悪の教会の一員だからまず不可能、他の者を行かせるのも魔術の存在を知らないのダメだ。そうなれば消去法で大和にその役が回ってくる。しかも好都合なことに能力者でありながら魔術の存在を知っている。

「どオセアレイスターの命令だろ？オーケー引き受けたよ ただしオレがヤンのは撃退までだ 保護の方は他を当たれ」

「わかったぜい アレイスターにはオレからそう伝えておくぜよ」
するとまた土御門の携帯が鳴った。電話に出た土御門は一瞬目を見開いたかと思うと今度は無言で電話を切った。

「大ちゃん、早速お仕事ぜよ 魔術師の1人が戦闘を始めた しかも相手はカミヤんだぜい」

「マジかよ・・・ アイツもとことん不幸なヤツだなア」

親友が闘っているというのにまるで驚かない大和。大和自身遅かれ早かれあのお人好しが魔術師とぶつかることは大体予想していたの

だ。

「仕事にはオレも同行させてもらっぜい アレイスターからそう言われてるものでやー」

「当麻にバレたら色々面倒じゃねエの？」

「そこら辺は大丈夫だぜい」

何が大丈夫なのか大和にはわからなかったが本人がそう言うなら大丈夫なのだろうと大和は判断する。

「さアてオレの親友に手エ出したクソ野郎にきつーいお灸据えてやつかなア」

ニヤリと三日月の様に口を歪ませると大和は戦場へと向かった。

ただの高校生（前書き）

初バトルです！！ お気に入り登録、ありがとうございます！！

ただの高校生

大和と別れた垣根は1人自宅へと帰っていた。途中コンビニにでも寄ろうかと思つたが最終下校時刻を迎えていることもあり風紀委員や警備員に見つかれば色々面倒なので真っ直ぐ帰ることにしたのだ。歩きながら垣根は先程の大和とのやり取りを思い返していた。

用事があるから先に帰ってくれ。

大和は垣根にそう言った。普段なら何も思わなかつただろう。だが今回は違つた。

去り際に見た大和の目。その目は明らかに自分ではなく別の何かを捉えていた。中学からの親友である垣根だからこそわかる事だが。

(大和のやつ また何か1人で抱えているな・・・)

別に何か確証がある訳ではない。親友としての直感でそう思ったのだ。

垣根はズボンのポケットから携帯を取り出すと何処かへ電話を掛け始めた。

「あーもしもし？俺だ、垣根だ 何？言われなくてもわかるって？相変わらず可愛げのねえやつだなあ」

「実はよちよつと調べて欲しい事あんだけどよ、人目に付く場所じや話せねえから例の場所に来てくれ ああ？もちろん全員だ 今から1時間後に集合だ いいな？」

そう言うと垣根は携帯を切る。そして再び歩き始めると心の中で咳く。

(さあて『スクール』再始動といくかな・・・)

大和と土御門が魔術師と当麻が闘っているであろう当麻の学生寮に到着すると寮は炎に包まれており文字通り火の海の状態だった。

「この感じ・・・ルーンの魔術か」

「ルーンって事はステイルのやつかにゃー？学園都市だというのに随分と派手な真似してるぜい　というか大ちゃん、どうしてルーンの魔術ってわかったんだ？」

「後で説明してやるよ　それよりもテメエはここに居ろ　魔術師の野郎ブツ飛ばしてくっからよ」

そう言うと大和は寮に更に近づいて行った。

「さてさて、じゃあ土御門さんは高みの見物と行くかにゃー」

そう言うと土御門は何事もなかったかの様に移動を始めるのだった。

「さてと、どうやって上まで行こうかね」

燃えさかる寮を見上げながら大和は魔術師に接近する方法を考えているとドーン！！と何が落ちて来た様な音が聞こえた。

何だ？と思つて音のした方を見るとそこには痛つてえと言いながら腰を押さえている当麻がいた。

どこまでコイツに知られてもいいのかと大和は考えるがある程度は大丈夫だろうと勝手に判断すると大和は当麻に近づく。

「おい、大丈夫かよ当麻？」

「!?!?・・・何だ、大和か」

「人が折角心配してやってんのに何だとは失礼なヤツだな」

当麻は何か言おうとしたが上から突然ゴォー！！と大きな音がした。何だ？と思つて大和が上を見上げる。そこには炎で出来た巨人の様な物が2階の手すりを持ちながらこちらを見下ろしていた。

「魔女狩りの王か・・・インケンティウス随分と派手なもん使つてきやがったな」

「ど、どうしてあれの名前を知っているんだ!?!」

「説明は後だ 話せば長くなるからな」それよりインデックスは何処だ？どオセテメエの事だ、アイツが絡んでるから闘つてんだろ？」

大和の言葉を聞くと当麻は少し笑いながら言った。

「インデックスの事・・・助けてくれるのか？」

「勘違いすんじゃないやねエよ オレは親友に手エ出したヤツが許せねエ
だけだ あのチンチクリン助ける訳じゃねエ」

「素直じゃないなお前も でも・・・ありがとよ」

当麻は大和に礼を言うと現在の状況を説明した。インデックスは当麻の家の玄関前に居て背中に重傷を負っている、そのため1人で動く事が出来ないと言うことだ。魔術師もそこにいるらしい。

「なるほどなア、オーケーわかったぜ オレが魔術師とやりあつて
間にインデックス連れて逃げる そんなもつてどっかで治療して
もらえ」

当麻にそう指示すると大和はゆっくりと上に続く階段を登り始める。
後ろから当麻が1人で大丈夫か？と言うのが聞こえたので大和は階
段の真ん中ぐらいで止まると前を向いたまま答える。

「安心しろ オレに勝てるヤツなんざ未来永劫現れやしねエよ」

(やつが戻って来ない・・・ 逃げ出したのか?)

タバコを吸いながらステイルは学生寮を飛び出してから戻って来な
い当麻の事を考えていた。

魔女狩りの王に怯えて逃げたのだろうと考えたステイルはインデッ

クスを回収すべく彼女に近付こうとしたその時だった。
カーン、カーン、カーンとゆっくりと階段を登る音が聞こえてきたのだ。

（やつが戻って来たのか？ならどうしてこんなにゆっくりと階段を登れるんだ？）

魔女狩りの王は最新型の追尾式ミサイルのようなもので一度標的をロックすると殺すまで追いつける。もし今階段を登って来ているのがやつなら当然魔女狩りの王に追われている筈、こんなにゆっくりと移動する余裕などない筈だ。

なら誰が？ 階段を登る音は徐々に近づいており最終的にステイルの居る階で止まった。

警戒心を強めているステイルの前に現れたのは当麻ではなく鮮やかな茶髪に両手をスポンのポケットに突っ込んだ大和だった。

当麻ではない事に少しホッとしたステイルは強めていた警戒心を緩め大和に言う。

「君は此処に住んでいる生徒かな？」

ステイルとしても無駄な争いは避けたかったので魔術師としての顔は伏せておく事にした。しかし次の大和の一言でその言葉の意味をなくす。

「下手クソな演技してんじゃねエよ、魔術師」

その言葉を聞いた瞬間、ステイルは強めていた警戒心を再び最大にまで戻す。

「そうカリカリすんなよ イギリス清教必要悪の教会の魔術師、ス

ネセサリウス

「テイル!! マヌグスさんよオ」

その言葉にステイルは目を見張る。自分の正体を知られている。それでもステイルは出来るだけ表情に出さず冷静さを保とうとした。しかし・・・

「魔女狩りの王イノケンティウスか・・・ こんな目立つ魔術、学園都市なんかで使うもんじゃねエぜ」

今度は驚きの表情を隠す事が出来なかった。自分の素性を知っているばかりか、魔女狩りの王イノケンティウスの事まで知っていたのだから。ステイルはイノケンティウスと呟くと大和に尋ねる。

「君は魔術側マジックの人間なのかい・・・？」

「まア正確に言えばハズレだけどなア 魔術に関しては知っている もちろんテメエ等の事もインデックスの事もな」

「なら尚の事生かして帰す訳にはいかないな」

そう言うとステイルは炎の巨人に命令する。殺せ、と。

主人の命令を聞き付けた巨人はそれに従いターゲット（大和）に迫る。

対する大和は何の抵抗もせず両手をポケットに入れたまま直ぐ目の前に迫ってくる魔女狩りの王イノケンティウスを眺めているだけだった。ステイルは一緒呆気にとられたが魔女狩りの王イノケンティウスはそのまま大和を3000度の炎で包み込んだ。

（一般人相手に少しやり過ぎちゃったかな まあいい、これでやつ

もお終いだ)

ステイルが勝利を確信したその時だった。3000度の炎で焼かれている筈の大和が何事もなかったかの様にこちらに向かつて歩いて来たのだ。

「残念でしたア こんなシヨボい魔術じゃあ当麻のヤツは殺せてもオレは殺せねエよ」

ステイルは言葉を失った。3000度の炎に包まれた筈なのに大和は火傷一つ、汗一つかいていなかったのだ。

「貴様！！何故生きてられる！？」

「あア？簡単だ、オレが魔女狩りの王に呑まれたっていう事象を拒絶したんだよ 流石に魔術に直接干渉すんのは難しいがオレの身体自体に起こった事象なら魔術だろうが何だろうが関係ねエよ」

事象を拒絶？

ステイルは訳がわからなかった。そんな力聞いた事もないし、仮に存在するとしたら最早人間の域を超えている。

「い、魔女狩りの王！！！！！！」

ステイルが叫ぶと魔女狩りの王は再び大和に突進する。

大和は目を閉じる。そしてゆっくりと目を開いたかと思うと、魔女狩りの王は大和の目の前で動きを止めた。そして見えない何か引つ張られるかの様に魔女狩りの王は空間に引きずり込まれてしまった。

「なっ、魔女狩りの王！！！！！！」

スタイルが叫ぶが何も起こらない。その様子を見て大和はニヤリと笑うと静かに言った。

「無駄だったの、テメエがいくら叫んだところで魔女狩りの王は戻イノケンティウスつて来ねエよ」

「どついう意味だ!？」

「魔女狩りの王は空間イノケンティウスごと別次元に飛ばした　つまり今アレはオレ達の知らねエ別世界に存在してるって事だ　いくら呼んでも反応する訳ねエだろ」

スタイルは呪文を唱え炎剣を作ろうとするが大和は聖人の脚力を使い一気にスタイルとの距離を零にする。

「貴様は一体何者なんだ!!!」

スタイルの質問に大和は右手で握り拳を作りながら答える。

「なんの変哲もねエただの高校生だよ」

大和の右ストレートがスタイルの顔面に突き刺さり、向こうの壁まで吹き飛ぶとそのままスタイルの意識が途絶えた。

もちろん手加減はした。聖人の力を全開にした状態で顔面を殴れば間違いなく顔の原形がなくなるか最悪の場合首から上が吹き飛ぶ。

大和はこのままスタイルを殺したかったのだが土御門から殺すなど指示が出ていたので放って置く事にした。

大和とステイルの戦闘の一部始終を見ていた土御門は啞然としていた。

魔術に関してやたら詳しいかと思えば見た事もない力で魔女狩りの王を退け、おまけに聖人の力まで見せたのだ。
インケンティウス

（何かあるやつだとは思っていたが・・・まさかここまでのものとは）

土御門が一番驚いたのは大和が聖人の力を完璧に使いこなしていた事だ。

世界に20人と居ないと言われていた聖人はその強過ぎる力のあまり使いこなすのが難しいとされている。力を全開にするのはもちろん、先程の大和の様に手加減するのも非常に難しい。それを科学側の人間である筈の大和が、魔術側の力である聖人の力を完璧に使いこなしていたのだ。

「神鬼大和・・・お前は一体何者なんだ？」

土御門の謎はさらに深まったのだ・・・。

空腹の余り・・・(前書き)

超電磁砲組、初登場です!!

空腹の余り・・・

魔術師、ステイル・マヌグスを撃退し結果的にインデックスを救出した大和は当てもなくブラブラと学園都市を歩いていた。朝早くから当麻から電話があり、インデックスは無事で今は担任の小萌先生の家に居候しているとの事だ。

(腹減ったなあ・・・)

思えば昨日の夜から何も食べていない事に大和は気付く。こんな日に限って炊事係りである絹旗は昨日の夜から出掛けたままだ。自炊する気にもならなかったので家に居ても仕方ないと判断した大和は出掛ける事にして現在に至る。

とりあえずファミレスでも行こうかと思ったその時だった。ドカーン!!と凄まじい爆発音がした。何事だ?と思い大和は音のした方を向くと銀行のシャッターが破壊され中から顔に布を巻いて目だけが見えている3人の男が出てきた。

(銀行強盗か?また随分と派手なご登場ときたもんだ 今時こんな強盗マンガでもいやしねエゼ)

興味をなくした大和はそのままファミレスに向かうことにする。

「そ、その茶髪の子!!ど、どこに行くんですか!!」

後ろから突然大声で呼ばれたのであア?と言いながら振り返ると、頭に色取り取りの花々を装備した少女が大和に向かって叫んでいた。大和は最初花瓶が歩いているかと思っただがそれ以上に彼女が着ている制服に見覚えがあった。

（こいつは……『柵川中』の制服か、って事はオレの後輩か……）

そして次に目に入ったのは左腕に巻いている緑と白の腕章。

『風紀委員』（ジャツジメント）

『警備員』（アンチスキル）と並ぶ学園都市の治安維持機関の一つで学園都市の教師で構成されている警備員アンチスキルと対照的に主に学生により構成されている。

構成員の多くが何らかの能力者だが能力者でなければ入隊出来ないといった事はなく学生であれば一定の訓練をこなし、入隊試験に合格さえすれば誰でも入隊出来る。

ジャツジメント
風紀委員の腕章を巻いているのでどうやらこの花飾りの少女は風紀委員ジャツジメントのようだ。

「危ないので早く避難して……って聞いていますか!!」

花飾りの少女は大和の前に立つと進路を塞ぐ。彼女としては風紀委員ジャツジメントとして避難誘導の職務を全うしようとしているのだろう。だが大和にとってあの程度の爆発や強盗など何の脅威でもなく一刻も早くファミレスで朝食を摂りたいのだ。

「邪魔だ退け 前に立たれたら進めねエだろオが」

「前に進もうとしないで下さいよ！ 危ないですから!」

花飾りの少女も頑として退こうとしない。

大和はアと溜息を吐くとそれだけで人を殺せそうな目で花飾りの少女を睨み付けながら言う。

「ああ？退けって言うてんのがわからねエのかア？それとも実力行使でもしねエといけねエかア！」

後輩、しかも風紀委員相手に脅しに掛かるのは若干気が引けたが大和としても空腹の限界が近づいてきているので余裕がなかった。

大和に睨まれた花飾りの少女は今にも泣きそうな顔をしている。少しやり過ぎたか？と大和がそう思った時だった。

「初春さん！！大丈夫！？」

向こうから誰かが大声でそう言いながら大和達がところへ走って来た。

誰だ？と思い顔を上げると見覚えのある制服を着るこれまた見覚えのある少女が見えた。

常盤台中学校。

学園都市でも5本の指に入ると言われている名門校で世界有数のお嬢様学校である。しかも生徒の全員がレベル3以上というまさにエリート集団だ。

そんな名門校の制服を身に纏う少女の名は御坂美琴。

学園都市に7人（大和を含めれば8人だが）しかいないレベル5の第三位、『常盤台の超電磁砲^{レベルガン}』の異名を持つ最強の電気使い（エレクトロマスター）だ。

レベル5は音信不通の第六位を除けば全員の顔と名前は知っている。だがこうして顔を会わすのは第二位である垣根以外では初めてだ。美琴は初春の隣に並ぶと大和に食って掛かる。

「ちよつとアンタ！初春さんが離れるって言うてるんだからさつさと離れなさいよ！」

いつもの大和ならもう少し冷静に対処しただろう。だが空腹から来

るイライラで気が立っていた大和にそんな冷静さはなく同じ様に美琴に言い返す。

「いきなり現れて何言ってるんだテメエ　つかテメエも一般人じゃねエか」

見たところ美琴は風紀委員ジャッジメントの腕章は巻かない。つまり美琴も大和と同じく一般人という事になる。美琴は私は事件の当事者だからいいのよ！と訳のわからない言い訳をしている。

このままでは埒が明かないと考えた大和は2人にある提案をする。

「じゃあこうしよオヤ、今からオレがああ強盗とっ捕まえてやるそうすりゃあ事件解決、危険ナシになんたる？」

美琴と初春はポカーンとした表情をしている。それもその筈、自分達と歳が変わらないような少年が強盗を捕まえると言っているのだ。直ぐに我を取り戻し大和に何か言おうとしたが既に大和の姿はなかった。まさかと思いつつ後ろを振り返ると強盗に向かって突っ込んでいる大和の姿があった。

「ちよつとアンタ！待ちなさいよ！」

「だから危ないですって！」

美琴と初春がひきりなしに叫ぶが大和は完全に無視をする。だが途中で立ち止まると後ろを振り返りニヤリと笑うと2人に言った。

「余計な心配してんじゃねエよ　オレに勝てるヤツなんざ未来永劫現れやしねエよ」

ジャックジメント
風紀委員の一人、白井黒子は強盗に向かい合っていた。対する強盗は右手にサッカーボールぐらいの大きさの炎の玉を作り出していた。炎の大きさから見て恐らくレベル3クラスの発火能力者だろう。バイロキネスト
レベル4の空間移動テレポートの能力者である黒子からすればこの程度の相手なら何の問題もなく対処出来る。それでも何もアクションを起こさないのには理由がある。

一つは強盗の正確な人数がわからないため。確認出来た強盗の人数は3人、だがこれは黒子の目で確認出来た人数であり正確な人数であるという確証はない。正確な人数がわからない状況でアクションを起こすのは危険が伴う。

二つ目は相手が能力者であるため。目の前の強盗は少なくともレベル3はある。下手に動いて一般人にでも能力を発動されたら命の保証は出来ない。

3つ目は一つ目と関連するのだが残りの強盗が能力者であるかもしれないため。仮に強盗があと1人だけだとしても能力者、しかも自分よりレベルが高い者ならばかなり厄介な事になる。更に人数がいるなら尚更だ。

「どうした？来ないのか？ならコッチからいくぜ！！」

痺れを切らした強盗が炎の玉を黒子に投げようとする。黒子はテレポートで後ろに回り込もうとしたがもの凄いスピードで何が黒子を横切った。

「おっと危ねエなア そんなもん投げちゃあ 火遊びはいけません

「つて先生に習わなかったのかア？」

大和はそう言うのと強盗の後ろに回り込み炎の玉を投げようとしている右手を掴むと、そのまま腕力だけで強盗を投げ倒す。そして投げ倒した強盗の背中に乗ると左手で頭を押さえ、左膝で背中を押さえながら強盗の右肘の関節を捻り上げる。

「イテテテテテ！！！テメエ何しやがる！！！」

「悪いな、オレの朝メシ掛かってんだ 大人しく捕まってくれや」

強盗を押さえながら大和は言う。そしてポカーンとした表情でその光景を見ている黒子に手錠を要求する。

「おい、何ボケエとしてやがる さっさと手錠寄越せ それぐらい持ってたんだろ」

大和の声で我を取り戻した黒子は手錠を手渡す。黒子から手錠を受け取った大和はそれを強盗に掛けると残る強盗を探すべく周りを見回す。

「確かアイツ等は3匹だったな もう1匹何処行きやがった」

横で黒子何か言っているが大和の耳には入らない。強盗を探すのに必死な大和は中々見つからない事にかなりイライラしているようだ。

「ちよつと貴方！！聞いていますの！？」

先程から何度呼び掛けているのに完全無視されている事にしびれを

切らした黒子は大和の耳元で大声で叫ぶ。

ようやく気付いたのか大和はゆっくりと黒子の方を向く。だがその顔には明らかかな怒りの色が浮かんでおり黒子を睨み付けるその目は今まで見てきたどの犯罪者より鋭く、恐ろしかった。

「聞こえてんだよクソ野郎が 耳元で叫んでじゃねエぞ 死にてエのか」

その言葉の一言一言に背筋が凍りそうな感じをする黒子。足がガクガクと震えており、額から出る汗が止まらない。しかし次の瞬間その恐怖心は一気に吹き飛ぶ事になる。

「動くんじゃねえ！！このガキがどうなってもいいのか！！」

声のした方向に大和と黒子が振り向くと強盗の1人であろう男が男の子を腕に抱き、頭に銃を突き付けていた。

つまり人質、逃げられないと判断したからだろう。

しまったと黒子と思う。人質を取られてしまった以上下手に動く事は出来ない。もし動けば最悪人質が殺されるかもしれない。完全に手詰まりとなった。

「チツ、人質かよ 面倒くさい事しやがって」

深刻な顔をする黒子とは対照的に緊張感がないのか大和は頭を掻きながら舌打ちをする。

「どうしてくれますの！貴方の責で人質を取られてしまいましたの！」

先程の恐怖心は何処に行ったのか黒子は大和に小声で文句を言う。

大和はどうしてオレの責になるんだ？と思ったが無駄な体力は使いたくなかったので聞き流した。

「ちょっと聞いてますの！！」

「あーうるせエうるせエ わかったよ あの野郎とっ捕まえて人質助けりゃ文句ねエだろ？」

「そう言う事を言っている訳ではありませんの！それに貴方は一般人！これ以上勝手な事は許しませんの！」

「そんな事言ってる場合かア？強盗が逃げちまうぜ それとも風紀委員ジメントのヤツはみんな融通の効ねエアホばかりなのか？」

黒子は何か言い返そうとしたが言われてみれば大和の言う通りだ。人質を救出するのに身分など関係ない。それに悔しいが自分1人ではこの状況を打開出来ない。先程の逮捕劇を見るかぎり大和はかなり手練れである事はわかった。不本意ではあるが黒子は大和に協力を求める事にした。

「ですがどうするつもりなんですの？人質がいる以上、下手には動けませんわよ」

「んな事テメエに言われなくてもわかってるっての まア見てな」
何か策でもあるのだろうか大和は強盗に向かって歩き始める。

「おいお前！！動くなって言ってるだろ！！」

強盗は大和に叫ぶ。銃を使うのに慣れていないのか心なしか手が震

えている。

（ありやあ素人だな 手が震えてやがる さつさとしねエと関係ね エヤツまで撃つちまうかもしれねエ・・・）

「動くんじゃねえ！！このガキ殺すぞ！！」

人質となっている男の子は目にいっぱい涙を溜めている。肉体的にも精神的にももう限界だろう。そう判断した大和は行動を起こす事にした。

「待て待て、オレはテメエを捕まえるつもりなんざ微塵もねエ」

「お前風紀委員ジャッジメントじゃねえのか！！」

「違いエよ 誰があんな面倒くさいとこ入るかっての」

そう言うと大和はポケットから何か取り出す。それに強盗が気付き、銃口を男の子から大和へと向ける。

「お前！！ポケットから何出しやがった！？」

「ああ？鏡だよ鏡 オレさアコンタクト付けてんだけどちょっとズレちまつて何にも見えねエんだ だから直させてくれよ」

大和は取り出した鏡を強盗に見せる。取り出された物が本当に鏡だった事を確認すると強盗は再び銃口を大和から男の子に向ける。

確かに大和はコンタクトを付けているがそれは目が悪いからではなく別の理由からだ。故にいくらコンタクトがズレたところで目が見えなくなる事などなく、もちろんコンタクトがズレたというのも嘘

で鏡を取り出す為の口実に過ぎない。
大和はズレたコンタクトを直すフリをして上目で太陽の位置を確認する。

（オーケー完璧だ　いくぜ！）

「あんがとよ　おかげで直ったぜ」

大和は鏡をポケットに直そうとすると強盗が待て！！と大和に言う。

「何だよ？」

「その鏡、ポケットに直さないでこっちに投げろ」

狙い通りだ、大和は心の中でそう呟く。だが気付かれないように出来るだけ面倒くさそうに強盗に尋ねる。

「ああ？何でだよ？」

「次は何か武器になる物出すかもしれねえだろ！！だからもう両手はポケットに入れさせねえ！！両手を上げて後ろで頭に付ける！！」

「ああなるほどね　アンタ頭いいじゃねエか　だけどよオ両手挙げちまったら鏡投げられねエぜ？」

大和は右手に鏡を持ちながら両手を挙げ強盗を小バカにするように言う。

その態度が気に食わなかったのか強盗は先程よりも強い口調で大和に命令する。

「じゃあさつさと鏡をこつちに投げる！！お前ブチ殺せたいのか！！！」

「はいはい、仰せのままに」

そう言うと大和は下手投げで強盗に鏡を投げる。だが大和は右手を下ろす間に閉じた鏡を開けるとガラスの面を上にして投じたのだ。

鏡のガラスの面に太陽の光が反射しそのまま強盗の目に突き刺さる。急に光が目に入って来たので強盗は思わず顔を背ける、同時に男子の頭に突き付けていた銃口が地面へと向いた。

その瞬間を見逃さなかった大和は走り出すと凄まじいスピードで一気に強盗との間合いを詰める。強盗が気付いた時には既に遅く、大和は左手で銃を持つ強盗の右手の手首を捻り銃を奪うとそのまま右肘で強盗の鳩尾を突く。

鳩尾を突かれた強盗は声を出す事が出来ずそのまま地面に膝を付ける。だが大和の追撃は終わらず今度は近くにあったガラス片を拾うと走れなくする為に強盗の太腿に突き刺す。

「グギャアアア！！！」

今度は声に出して痛みを訴える強盗、それを尻目に大和は人質となっていた男の子を連れて黒子の元へ戻って来た。

「ほらよ 強盗も人質も確保 事件解決」

そう言うと大和は男の子を黒子に預けると意気揚々とファミレスへと歩き始めた。しかし黒子がそれを許す筈がなく案の定、大和は黒子に呼び止められた。

「ちょっと待ってください！明らかにやり過ぎですの！」

「まだ何か文句あんのかよ あんなもんやり過ぎでも何でもねエじやねエか」

「いいえ明らかにやり過ぎですの！最後のアレは必要なかったですよー！」

「最後のつてガラスブツ刺したヤツか？また逃げられてもしたら面倒じゃねエか だから走れねエようにしたんだよ」

「何でもいいですわ 貴方には事件の関係者として支部まで来てもらいます ご同行願いますの」

黒子は大和の手を掴むと支部まで連行しようとする。

冗談じゃない、何でそんな事までしなけりやなんねエんだ。大和は黒子の手を振り解こうとするが体に力が入らない。足に力が入らず、頭もフラフラとしてきた。何だ！？と思った瞬間大和は前へと倒れ黒子に持たれ掛かってしまった。

急に背中に重みが掛かったので何事かと思い黒子は首だけを横に向けてると自分の背中に大和が倒れていた。

「ちよ、ちよつと貴方！！大丈夫ですよ！？」

「・・・大丈夫じゃねエ 腹減って死ぬウ・・・」

今にも消えそうな弱々しい声で大和は空腹を訴える。

学園都市最強の能力者も空腹という大敵には勝てなかった・・・。

レベル5 vs 自称レベル0

「いやア助かった！危うく死ぬところだったぜ！」

右手にミルクテイーの入ったコップを持ちながら頭を軽く下げているのは神鬼大和。彼は今風紀委員の第十七支部ジャッジメインにいる。

「アンタ・・・どんだけ食べるのよ」

呆れた表情で大和に呟くのは御坂美琴。

名門常盤台中学に通う学園都市の第三位の能力者だ。

美琴と同じく常盤台の制服に見に纏い大和に向かい合うように椅子に座る少女は白井黒子。

彼女はここ第十七支部に所属する風紀委員ジャッジメインだ。

その黒子の後ろでビクビクしながら大和を見つめているのは頭に色とりどりの草花を付けている少女は初春飾利。彼女も黒子と同じく第十七支部所属の風紀委員ジャッジメインだ。

大和が何故こんな所にいるのかというと先程の強盗事件の関係者として事情聴取を受ける為だ。大和としては面倒くさい事この上なかつたが抵抗すれば色々面倒な事になりそうだったので素直に従う事にしたのだ。

「では最初にお聞きしますが貴方の名前と年齢を教えてくださいな」

「神鬼大和、歳は13」

別に嘘を言う必要もないので素直に大和は答える。アレイスターのヤツ、この光景も見てんのかア？と思うと笑いが込み上げて来る。

「・・・何を笑っていますの？」

「いやいやこっちの事だ さっさと次いこうぜ」

早く終わらせたかった大和は黒子に次の質問を急がず。

「そうですね では次に参りますの 貴方は何処の中学所属なの？」

「残念でしたア オレは中学生じゃなくて高校生だったの」

恐らく年齢と外見からそう判断したのだろう。だが大和は特例ではあるが立派な高校生である。そんな事情を知らない黒子は信じる筈もなく……

「下手な嘘仰らないで下さい！」

案の定、疑われた。

「本当だったの 信じらんねエなら調べてみるよ」

大和がそう言うのと黒子は後ろにいる初春に書庫バンクでの照合を指示した。初春は近くのデスクパソコンの前に座るとカタカタとキーボードを叩き書庫バンクにアクセスし始めた。

「ありました！神鬼大和さん、確かに高校生です！」

黒子と美琴は信じられないといった表情で大和を見る。対する大和はほら見ると言わん表情をしている。

書庫バンクに載っている以上大和の言っている事は紛れもない事実だ。だがまだ黒子と美琴は納得のいかない顔をしている。

「書庫バンクに載っている以上本当の事なのでしょう。ですが年齢と合わないの何故ですか？」

「あアその事かア・・・」

ミルクティーを一口飲むと大和は面倒くさそうに説明し始める。

「色々訳あつて飛び級で高校通つてんだよ。訳は聞くなよ。説明するの面倒だから」

黒子はまだ釈然としないようだがこれ以上は聞くのも野暮なので事情聴取を再開しようとした時だった。

「え、大和さんって柵川中学の卒業生なんですか!？」

「言つてなかったか? そうだぜ。テメエは柵中の生徒だろ? その制服見て直ぐにわかったよ」

「すごい偶然ですね! びっくりしましたよ!」

先程までビクついた態度はどこやら初春は目をキラキラさせている。そんな初春とは対照的に事情聴取の再開を見事に邪魔された黒子は心なしかイライラしている様に見える。

初春は次から次へと質問を大和にぶつけていくが埒が明かないと判断した大和は無理矢理質問タイムを切り上げ、何やらドス黒いオーラを出して大和と初春は睨み付けている黒子に声を掛ける。

「悪いな。そう怒るなつての。折角のかわいい面が台無しだぜ」

突然顔を褒められたので黒子は少し赤くなっているた。そんなつもりで言った訳ではないのだが。

「ゴホン、では再開しますの 貴方の能力名とレベルの高さを教えて下さいまし」

やっぱりきたか・・・

大和は心の中で呟く。正直この質問が一番厄介なのだ。アレイスターからは自分がレベル5、それも学園都市最強であるという事はくれぐれも漏らすなど言われている。ましてや風紀委員相^{ジャッジメイン}手ならなおのことだ。余計な散策でもされたら厄介だし最悪この3人を始末しなくてはならなくなる。

「オレは能力なんざ持ってねえぜ レベル0、立派な落ちこぼれだよ」

大和は出来るだけ普通に答えた。確か書庫^{バンク}にはそう記載されていた筈だ。

黒子は視線だけ初春に指示を送ると初春は大和の証言を書庫^{バンク}のデータと照らし合わせる。

「確かに大和さんはレベル0、無能力者と記載されています」

「そうですね・・・ わかりましたの」

黒子は何かモヤモヤとしたものが残ったが無理矢理納得する事にした。そこで黒子はふとある疑問が浮かんだ。

「事情聴取はこれで終了ですの・・・ あの^{大和さん}、一つお聞きしてもよろしいのですの?」

「何だよ？答えられる範囲で頼むぜ」

「大和さんは何か武術の心得でもありますか？」

答えてもらえるかわからなかったが黒子は大和にぶつけてみた。

「あ、それも私も気になってたのよ！」

「わ、私も……」

黒子の質問に続いて美琴と初春も興味津々と言わんばかりに身を乗り出す。

「何でそう思うんだよ？」

「わたくしことう見えても風紀委員として多少は武術の心得がありますの さっきのあの動き……どう見ても素人のもではありませんでしたの 動きに全く無駄がありませんでしたし限りなく達人の動きでしたの、それに……」

「それに？」

「あの鏡を使った陽動も素人技ではありませんの あの状況で冷静にしかも正確にあそこまで出来るのは普通の人では無理ですの」

なるほどなアよく見てんじやねエか、大和は感心した。伊達に風紀委員を名乗っている訳ではないようだ。これぐらいなら話しても大丈夫だろうと思った大和は答える事にした。

「あアテメエの言う通りオレは武術をマスターしている 武術って呼べるもんは大体使えるぜ 正直そこら辺の能力者ザユよりは闘えると
思うぜ」

そこまで言って大和は余計な事言ってしまったと気付いた。美琴が何やら好戦的な目でこちらを見ていたからだ。

黒子も美琴の周りの空気の変化に気付いたのか美琴に何か言おうとしたのだがそれよりも早く美琴が大和に言う。

「アンタ腕に自信があるみたいね じゃあ私と勝負しなさい」

美琴も最初はレベル0相手に決闘を申し込むのは若干気が引けたが大和が腕に自信があると言ったので間髪入れず申し込んだのだ。

当然黒子は断わるだろうと思っていた。美琴はレベル5、レベル5相手に好き好んで闘おうとするのは同じレベル5かよっぽどのバカかのどちらかだ。

だが大和の返事は黒子が予想したものと大きく違った。

「いいぜ別に オレもレベル5相手にどれくらいやれんのか知りたかったんだよ」

あるうことか大和は美琴の決闘を受諾したのだ。レベル5相手に正面からぶつかれば最悪の場合死者が出る。レベル0が相手なら尚更だ。

「ちょっと大和さん！お姉様はレベル5、学園都市の第三位ですよ！わかってますの！？」

もちろんわかっている。自分も同じレベル5、それも学園都市最強なのだから。だが大和は第三位程度なら能力など使用せずとも勝て

る確信があつたのだ。

「わかつているっての　いい機会じゃねエかレベル0（落ちこぼれ）がレベル5（天才）相手にどこまでやれんのか、テメエらだって少しは見たいだろ？」

美琴はやる気満々だし大和も全く引くつもりはないようだ。はあと溜め息を吐くと空気は大和にビシッと指を刺しながら忠告する。

「今回は特別に許可しますの　ただし！危険と判断したら直ぐにやめてもらいますのよ！」

「あー了解了解　そこら辺の判断はテメエに任せるわ」

大和は最後の一口のミルクティーを飲み干す。ではわたくしに着いて来て下さいのと言うと黒子と美琴は先に行ってしまった。大和も後に続くこうとすると後ろからあの・・・と声が聞こえた。振り返ると初春が心配そうな顔でこちらを見ていた。

「何だよその面は　オレがまるで戦争にでも行くみてエな感じじゃねエか」

「大和さん・・・大丈夫なんですか？今からでもやめた方が・・・」
心配する初春の頭にポンと手を置くと大和は笑いながら言う。

「心配すんな、さつきも言ったろ？未来永劫オレに勝てるヤツなんざ現れやしねエよ」

場所は変わりここは風紀委員ジャッジメントの模擬対戦用の闘技場。風紀委員専用ジャッジメントの施設だが今から模擬戦（決闘）を開始しようとしている2人は風紀委員ではない。

軽くジャンプしたり手首の柔軟をするなどやる気満々の美琴に対し大和はズボンのポケットに手をつ突っ込んだまま欠伸をするなど緊張感の欠片もない。本当に今からレベル5相手と決闘するのかと聞きたくなるくらいだ。

『それでは今から開始しますの 危険と判断したら直ぐに中止して下さいな』

上の閲覧室から黒子がアナウンスする。

美琴は既にバチバチと微弱な電気を発生させていた。大和何もアクションを起こさない、それどころか閲覧室をジッと眺めているだけだった。

『それでは開始して下さい』

そのアナウンスが合図となり美琴は大和に向かって電撃を飛ばす。だが大和は躲そうとはしない。

（アイツ何で避けないの!?!）

美琴は大和の予想外の行動に疑問が浮かんだが直ぐにその答えは出る事になる。

電撃が当たるか当たらないかぐらいのギリギリの距離で大和はクル

りと体を半回転する。電撃は大和に当たる事なく大和の後ろの壁に直撃する。

美琴は啞然とした。最初は電撃の速さに体が反応出来なかったと思った。大和は反応出来なかったのではなくギリギリまで反応しなかったのだ。大和は電撃を躲すのにかかる労力を最小限にする為にあえてギリギリで躲したのだ。

美琴はレベル5としての直感でわかった。

こいつただの無能力者じゃない。

黒子の言う通りあんな事とても素人ができる代物ではない。

「何固まってるんだ？来ねエならこっちから行くぜ・・・！」

大和は走り出すと美琴との距離を詰める。聖人の力は一割程度も使っていないがそれでも十分速い。

大和が動き出した事で我を取り戻した美琴は再び電撃を放つ。大和はそれを躲すと決闘前に黒子から借りた木刀を背中から引き抜く。

美琴の横に到達すると大和は一気に木刀を振り抜いた。

（はっ、つまんねエなア 第三位も所詮この程度かよ）

大和は勝利を確信したがその確信は脆くも打ち崩される。

パリツと電気が弾く音がしたのだ。その音を聞いた瞬間、大和は木刀を途中で止め直ぐに美琴の横から離れる。

3メートル離れたところで大和は顔を上げた。

「へえーよく反応したわね あのまま打ち込んできたなら木刀諸共黒コゲにしてあげたのに」

美琴はニヤリと笑いながら言った。

「はーん、なるほどなア　最初からオレがテメエに接近すんのを狙ってた訳か」

「ええ、最初の電撃を避けたのを見て距離があるところから当てるのは難しいと思ったのよ　だからアンタから接近してもらおうようにしたのよ」

そうは言ったものの美琴は内心焦っていた。最初の電撃にしてもまさかあんな避け方をされるとは思っていなかったし大和の接近のスピードもかなり速かった。普段ならこれしきの事で焦るような美琴ではないのだが今回は何か見えない力に締め付けられている感じがするのだ。

(正面からの距離のある電撃は当たらない　それなら・・・)

今度は動きながら電撃を放つ。直線ではなく四方八方からだ。逃げられるなら逃げられなくすればいい、美琴はそう考えたのだ。こうすれば必然的に逃げる場所は無くなるし、仮に逃げ切ったとしても無傷ではすまない。もちろん威力は調整してある。直撃しても悪くて気絶する程度のものだ。

今度は美琴が勝利を確信した。

当然避けようとするだろう美琴は予想したが大和はした行動は全く別のものだった。

大和は避ける事なく少し遅れて美琴に突っ込んだのだ。

「残念でしたア　テメエがそうくるのは予想済みなんだよオ！」

大和は美琴が次に四方を固めてくるだろうとあらかじめ予想していた。だからこそ3メートルぐらいという美琴にとって遠過ぎず近過ぎない距離をとったのだ。少し遅れて移動したのは四方を固める最

初の電撃が何処から来るか見る為だ。大体の予想は出来ていたがこればかりは大和も確信が持てなかった。だから遅れて移動したのだ。完全に不意を突かれた美琴は身体のバランスを崩す。だがそれが功を奏して大和の木刀による突きは美琴の前髪を掠めるだけで済んだ。突きが外れたのを見て大和は再び美琴から距離をとった。対する美琴はまだ地面に座り込んだままだ。

「アンタ、どうして・・・」

「何で四方八方から電撃がわかつたつてかア？ 闘いつてのはよオ常に相手の二手三手先を読むのが基本だろオが」

美琴は確信した、こいつには勝てないと。

いつもならまだまだ！と言って決闘を続けるだろう。事実まだ攻め手は残っているし通り名でもある超電磁砲レールガンも使っていない。手詰まりという訳ではないのだ。だが美琴は立ち上がる事が出来なかった。自分と大和とは絶対的な差がある、実力も経験も全て。何時の間にか大和がレベル0であるという事も忘れていた。

大和はゆっくりと美琴に近づく、ニヤリと口を歪ませながら。美琴は足が竦んで動く事が出来なかった。大和は美琴の前まで来るとゆっくりと木刀を持つ右手を挙げた。

『大和さん！決闘は終了しましたの！直ぐに木刀を離して下さい！』

上で黒子が叫んでいるが大和は完全に無視する。そして挙げられた右手を一気に振り下ろした。

やられる！美琴は目をぎゅっと瞑って木刀の一撃を待った。しかしいつまで経っても木刀が美琴に当たる事はなかった。恐る恐る目を開けると振り下ろされた大和に右手に木刀はなく代わりに自分の直ぐ横に木刀が落ちていた。

大和はしゃがみ込むと美琴の頭にポンと手を置くと静かに言った。

「テメエはまだまだ強くなれる レベル5がゴールだなんて思うんじゃないぞ」

そう言い残すと大和は闘技場を後にした。

黒子と初春は下に降りて来ると真っ先に美琴の元に駆け寄った。黒子は信じられなかった。

美琴が負けた、それもレベル0に。
レベル5に勝てるのは同じレベル5だけ、これは学園都市の一種の法則の様なものだ。レベル4の黒子でさえ美琴と正面からぶつかればまず勝てない、不意を突いても恐らく敗北するだろう。レベル5というのはこの学園都市においては絶対的存在なのだ。
だが美琴はレベル0にそれも圧倒的な敗北を喫した。

「お姉様・・・大丈夫ですの？」

黒子は恐る恐る美琴の顔を覗き込みながら言う。美琴は人一倍負けず嫌いな性格だ。黒子が知る人物の中では誰よりも負けを嫌い、誰よりも諦めを知らない。その美琴が自ら敗北を認めたのだ。もしかしたら顔が涙でぐしゃぐしゃになっているかもしれない、敗北への悔しさと怒りで我を見失っているかもしれない、黒子はそう思った。だが覗き込んだ美琴の顔はそのどちらでもなく黒子の予想外のものだった。

負けたというのにその顔は清々しく本当に負けたのかと聞きたくなる程だった。しかも若干ではあるが笑っている。

「お、お姉様……?」

「み、御坂さん……?」

美琴はようやく2人に気付いたのか2人の方を向くとニコツと笑いながら言う。

「黒子、初春さん心配やけてごめんね でも大丈夫よ」

それを聞いて初春はホツとした表情をしたが黒子はポカーンといった表情をしている。

「黒子、どうしたのよ?そんな顔して」

「いえ…… お姉様が負けたというのに一つも悔しがる素振りを見せないもので……」

「ああ、なるほどね」

美琴は出口の方に顔を向けるとその理由を説明し始めた。

「もちろん悔しいわよ、だって負けたんだもん でも何か違うの自分でもよくわからないんだけどね…… 悔しいのに悔しさが湧いてこないというか…… とにかく違うのよ それに……」

そこまで言うと美琴は言葉を切った。そして清々しくこう言った。

「新しい目標もできたしね」

美琴は笑顔でそう言うと出口に向かって歩き始めた。黒子はまだよくわからないといった顔をしているが慌てて美琴の後を追った。初春もそれに続く。

出口に向かいながら美琴はある事を考えていた。大和が最後に言ったあの言葉……。美琴にはあれが自分もレベル5だと言っているように感じたのだ。

（神鬼大和……。一体何者なの？）

新しい目標と疑問の二つを抱えながら美琴は闘技場を後にするのだった。

お知らせとお願い

先日、感想で原作の設定と矛盾しているというニュアンスのご指摘を頂きました。今後は極力原作の設定（能力や魔術の仕組み等）に合わせるつもりですが進行上原作の設定を勝手に変更する事も多々あるかもしれませんご理解お願いします。

時系列については基本的には原作と全く違うものもあれば原作通りの部分もあるかと思えます。ご理解お願いします。

文章の構成がいまいちな部分が多いかと思えますが初投稿という事で暖かい目で見てください幸いです。

本作に対するご意見やご指摘、質問や改善点は感想にしてお願います。作者としてもより良い作品にしたいので遠慮なくお願いします。

最後になりましたがこんな駄作をここまで読んで下さってありがとうございます。ありがとうございます。作者としてもより良い作品にしていくように努力していきますので今後ともどうかよろしくお願いします。

垣根の友達

学園都市にそびえ立つとある高層ビルの屋上からステイルは双眼鏡で闘技場から出てきた大和を観察していた。

「禁書目録に同伴していた少年の身元を探りました・・・彼女は？」

後ろから聞こえてきた女性の声に振り返る事なくステイルは答える。

「生きているよ 誰が治療したのかはわからないけどね・・・」

女性は終始無言だったがその顔は誰も死ななかつた事に安堵しているようだ。

「それで、神裂。アレは一体何だ？」

「それですか、少年の情報は特に集まってはいません。少なくとも魔術師や異能者といった類ではない、という事になるでしょう」

「それはあの奇妙な右手のアレかい？それとも僕を殴り飛ばした方か？」

「・・・両方ともです。」

「ハッ、何だ？もしかしてアレ等がダダの普通の少年だとも言うのかい？」

ステイルは口に啜っていたタバコを吐き捨てる。

「やめてくれよ。僕はこれでも自分の魔術にそれなりの自信を持っている。それを訳のわからない力で木っ端微塵にしたヤツがダダの普通の少年？冗談としたらかなりタチが悪いよ。」

神裂は何も言えなかった。

最初に対峙した当麻もかなり特殊な右手を持っていたがそれ以外は素人。何か右手以外に特殊な力を持っている訳でも、魔術の知識がある訳でもない。普通の高校生だ。

しかし、2人目の少年、大和は違った。

3000度の炎に焼かれても何事もなかったかの様にあしらい、何やら特殊な力で魔女狩りの王を撃破し、ステイルを殴り飛ばした。それ以上に二人が驚いていたのは学園都市の人間でありながら魔術の存在を知っていた事だ。それもちよつと知っている程度のもではない。

二人が警戒しているのは当麻ではなく大和の方だった。

「神裂、あの男は本当にどこの組織の者ではないのか？」

「ええ、それは間違いないと思います。何よりあれ程の魔術師なら必ず何か情報がある筈です。」

神裂の言葉を聞くとステイルは呟く様に神裂に聞く。

「神裂・・・、君はアレが魔術師だと思うか？」

「私も同じ事を考えていました。魔女狩りの王を消したあの力・・・私にはは魔術には感じませんでした。」

「僕も同意見だよ。もしもアレが魔術なら二人とも気付く筈だ。だ

が、二人とも魔術とは感じなかった。」

「やはり彼は魔術師ではないと・・・？」

「それはまだわからないよ。単に魔術を使わなかっただけかもしれない。もしそうならばかなり異常な存在だけだね。」

この街の人間ならば魔術師ではない。本来なら何の疑いもなくそう結論づける筈だ。だが彼は魔術の存在を知っている。その事実が本来ない可能性を浮上させる。
ステイルが双眼鏡を覗くと大和がこちらをジッと見ていた、ニヤリと口元を歪ませながら。

「ッ！・・・こたりに気付いている。」

「ステイル、場所を変えましょう」

神裂がそう言うと二人はビルの屋上から移動する。

(なアくんか視線を感じると思ったら昨日のヤツか・・・)

隣に見られない女がいたが大和は気にする事なく再び歩き始めるのであった。

「ああ！？それはどういう事だ！！」

『スクール』のアジトで電話に向かって怒鳴り散らしているのはそのスクールのリーダーである垣根帝督。

『スクール』とは学園都市の暗部の一つ。上層部から様々な仕事を請け負っており、その内容は要人の護衛や機密情報の管理、さらには破壊活動や殺しといった過激なものなど多岐にわたる。

「言った通りだ。これ以上『神鬼大和』のことを調べるな」

電話越しに垣根にそう言うのは通称『電話の男』

顔も名前も知らず仕事の際に電話で内容だけを伝える事からそう呼んでいる。

「ふざけんじゃねえぞ！誰がそんな事・・・」

「これは私からではなく統括理事会からの命令だ。」

「統括理事会からだと・・・？」

統括理事会が動いたという事は学園都市の機密に触れる可能性があるからだ。それもスクールのリーダーである垣根ですら触れる事が許されない程の。

「これ以上動けば君とはいえダダでは済まなくなるぞ」

「ハッ、笑わせやがる。俺は学園都市の第二位だ。統括理事会の連中が何しようとか俺には通用しねえよ」

「そうだな、君には通用しないかもしれない。だが君の周りの人間はどうなる？」

「ああ？」

「君を始末しようとするならそれこそ第一位でも連れて来ないと無理だ。だが君の周りの人間、友人や知人、スクールの他の構成員はどうだ？学園都市の巨大な闇を相手にして勝つ事ができる者ばかりか？」

垣根は答える事が出来なかった。答えなど決まっている。否、勝てる筈がない。全員が全員と言う訳ではないだろうが大半が殺されてしまうだろう。

「統括理事会の連中だって馬鹿ではない。君と正面からぶつかる事が如何に無謀な事がぐらいわかっている。ならば君の周りから削っていくに決まっている。」

まさしくその通りだ。連中は目的のためなら手段を選ばない。それは暗部に所属している垣根もよくわかっている。関係のない人の命を奪う事など何の抵抗もないだろう。

「垣根帝督、君は確か神鬼大和とは親友の関係だったな？」

言葉が出ない垣根に『電話の男』が尋ねた。

「そつだ……。あいつは俺のかけがえのない親友の一人だ」

「……もし君がどうしても彼の事が知りたいと思うのなら今夜0時に第十七学区の操車場に来るがいい」

『電話の男』はそう言うと一方的に電話を切ってしまった。携帯を

ポケットに仕舞うと垣根はゆっくりとソファに座る。

今夜0時に第十七学区の操車場。人が寝静まつてるであろう時間に人通りの少ない場所・・・如何にも罨ですと言わん感じだ。

だが垣根は罨だろうが何だろうが何でもよかった。少しでも大和の、親友の事が知れる可能性があるならそれに賭けてみようと思ったからだ。

(最悪その場で戦闘になるかもしれねえな・・・)

学園都市の第二位である垣根相手にまともに戦闘をするなら第一位でも連れて来なければ話にならない。同じレベル5でも第三位以下とは絶対的な差があるのだ。だが相手は良くも悪くも頭の切れる統括理事会、連中も最初から垣根相手に正面からぶつかると考えていないだろう。どんな卑劣な手を使ってくるかわかったもんじやない。

(誰か人質に取るかもしれねえな・・・。そうすると流石に俺一人じゃきついな)

垣根は携帯を取り出すと誰かに電話を掛け始めた。

(あいつを巻き込むのは正直気が引けるが・・・。こうゆう時に頼りになるのはあいつしかいねえからな)

しばらくすると電話の向こうから応答があった。

「俺だ、垣根だ。今大丈夫か？」

『言われなくてもアンタだったのはわかってるよ。で、どうしたの？』

声からして女性だろう。後ろから誰かの声が聞こえる。誰かと一緒にいるのだろうか。垣根は話しを続ける。

「今誰かと一緒にいるのか？」

『今はあいつ等とファミレスにいるんだけど』

「ファミレスって事は会議中か？」

『まあそんなところ。用件は何？一応会議中だから早くして欲しいんだけど』

「お前にちいと頼みがある。電話じゃあ話せねえ内容だから今から俺もそっちに行つていいか？」

『別に構わないわよ。あんたなら大歓迎よ』

「嬉しい事言ってくれんじゃねえか。じゃあ今から向かう」

そう言うと垣根は電話を切り、玄関へと向かう。

（能力もそうだが・・・やっぱり持つべきものは友だな）

靴を履きながらニヤリと笑うと垣根はファミレスへと向かった。

垣根の自宅から目的地のファミレスまではかなり近い。歩いて5分ぐらいの距離だ。基本的に自炊をしない垣根は朝昼晩三食とも外食で済ます事が多い。今住んでいる家もファミレスに近いからという理由で選んだのだ。

目的地に到着するといつも通りに店のドアを開く。垣根の来店に気付いたウェイトレスがこちらに近づいて来た。

「いらっしやいませ・・・あつ、垣根さん！」

「よお、相変わらず元気な挨拶だな」

この常連客である垣根は店の店員全員に顔が知られている。垣根自身も店員全員の顔と名前は把握しているし客と店員の枠を越えてかなり仲のいい関係だ。店側としても売り上げに貢献してくれる大切な常連客以上の存在になっている。余談ではあるがその端正な顔立ちと第二位としてのネームバリューからこの隠れたマスコットになっている。

「あいつ等はいつもの席か？」

「はい、彼女たちならいつもの席にいますよ。垣根さんの席も用意してますので！」

「相変わらず気の利く店だなあ。サンキュー」

ウェイトレスに礼を言うと垣根は通称『垣根シート』と呼ばれている席に向かう。

『垣根シート』と呼ばれている席はファミレスには珍しい完全個室の席の事だ。暗部の会議やプライベートの約束などによく垣根が利

用しており、店側も垣根が常連客という事もあって半ば垣根専用といった感じにしている。

個室のドアの前に立つと垣根はドアを開く。中には既に4人の先客がいた。

ファミレスだというのにどこから持ち込んだのかシャケ弁を豪快に開けているのは麦野沈利、こう見えても垣根と同じレベル5で序列は第四位。その麦野の隣で缶詰め相手に絶賛格闘中なのは頭に被ったベレー帽が印象的な少女、フレンド。起きているのか寝ているのかわからない虚ろな目で垣根を見つめているピンクのジャージの少女は滝壺理后。滝壺の隣に座る金髪にピアスと如何にもチンピラらしい格好をしている少年は浜面仕上。

ファミレスという場に明らかに似つかわしくない雰囲気醸し出している4人はみな垣根が所属するスクールと同じ学園都市の暗部『アイテム』の構成員だ。

「あら、早いね垣根。もう少し掛かると思ってたんだけど」

「家がすぐそこだからな。つーか相変わらずファミレスでシャケ弁に缶詰めかよ……。迷惑な客の上ねえな」

半ば呆れながら垣根は言う。

「店の料理だつてちゃんと頼んでんだから問題ないでしょ。」

「そうそう、麦野の言う通り。結局も問題ないって訳よ！」

「そついう問題じゃねえだろ……」

この二人の持ち込みは今に始まった事ではない。これ以上は無駄と判断した垣根はとりあえずドリンクバーを頼んだ。

「で、頼みつて何？垣根」

シヤケ弁を食べる手を止めて麦野は本題へと切り出す。それに連動するかの様にフレンドも缶詰めとの格闘を中断し、窓の外を見ていた浜面も垣根の方を向く。滝壺は寝ているのだろうか完全に頭が机にひれ伏していた。滝壺がこの状態なのはいつもの事だ、それを知っている垣根は気にする事なく話を切り出す。

「単刀直入に言うと裏関連の頼みだ。それを承知で聞いてくれ」

「垣根が裏の話しを持ち込んで来るなんて珍しいな」

「結局、浜面の言う通りつて訳よ。大概は私たちが協力して貰っているのに」

「確かにあんたが私たちに協力を扇ぐだなんて珍しいわね。かなりヤバい仕事なのかしら？」

滝壺を除く三人が言う通りプライベート関連はともかく、裏の仕事に関して垣根が他人に協力を扇ぐ事は滅多にない、と言うよりも協力を扇ぐ必要がないのだ。学園都市の第二位である垣根は殆どの仕事を一人でこなしてしまふ。もちろん垣根個人ではなくスクールとして仕事を請け負っているのだが他のメンバーは準備や下調べといった仕事がメインで直接仕事を完遂しているのは垣根一人である事が殆どだ。そんな垣根がアイテムに協力してくれと言っているのだ。麦野は垣根一人では手に負えない仕事なのかと麦野は思ったのだ。

「いや、そういう訳じゃねえよ。実はな今夜0時に第十七学区の操車場である人物と会う約束してんだよ。だけど相手の名前も顔も何

にも知らねえもんだからさあ罨だつて可能性があんだよ」

「なるほどね、でもあんなならどんな罨でも関係ないんじゃない？
それにあんな相手に罨仕掛けられるのなんて第一位ぐらいでしょ？」

垣根は第三位のように学園都市の闇を知らないお子様でもなければ第七位のように脳みそまで筋肉で出来てるかもしれない様な根性バカでもない。能力のレベルの高さが頭の良さに比例する学園都市において垣根はこの街で二番目にスペックの高い頭脳の持ち主だ。その垣根を罨に嵌めるとなれば垣根以上頭の切れる者を準備する必要がある。仮に罨に嵌めたとしても垣根なら無理矢理打開してしまうだろう。

「相手はおそらく統括理事会に関係するやつなんだよ。あいつ等ならどんな汚ねえ手を使ってくるわかんねえだろ？もしかしたら人質でも取るかもしれない。そうならばさすがに俺一人じゃきついんだよ」

「つまりこういう訳か。相手がもし人質とか汚い手を使ってきたら俺たちがお前を援護する、こういう事か？」

「ああ、大まかに言えばそういう事だ」

浜面の質問に答えると垣根はメロンソーダーに手を伸ばす。フレンドと浜面は垣根の話に納得している様子だが麦野だけは下を向きながら眉をひそめていた。

「麦野のどうしたの？何か深刻な顔して」

気になったフレンドが麦野を見ながら尋ねる。フレンドに声を掛け

られた麦野は顔を上げると垣根の顔を見ながら言っ。

「垣根・・・あんたまだ話すべき事があるたる?」

「.....」

垣根は口を閉ざしたまま何も言わない。

「おい麦野、どういう事だよ?」

麦野が何を言っているのかイマイチわからない浜面は麦野に尋ねる。フレンダも浜面と同じくといった表情をしている。

「あんたたち相手が垣根だから何も思わないんだろうけど何かおかしいと思わない?」

「結局どういう訳よ?」

「考えてもみなさいよ。どうして人に会うだけでこんなに警戒しているのよ?いくら統括理事会関係の人間でもそこまでする必要ないでしょ。それに人質の可能性まで考えている、どう見ても普通じゃないわ」

麦野はそこで一旦言葉を切る。そしてまたすぐ話し始める。

「垣根、あんたには山ほど借りがあるし私だってあんたの頼みは断りたくない。でも私はアイテムのリーダーで仲間を守る義務がある。だからちゃんと全部話してくれないとあんたの頼みを受ける事は出来ない」

通常、暗部には仲間意識など不要なものと言われている。暗部に必要なのは生温い仲間意識などではなく何があっても、たとえ仲間を殺す事があっても必ず仕事を完遂する使命感が必要だと言われているが麦野はそうは思っていない。

麦野にとつて大切なのは仲間の命だ。それを守るためなら仕事なんかすぐに捨てるし学園都市と対立する覚悟だつて出来ている。もちろん垣根も麦野のと同じ考えの持ち主だ。彼もまた仕事の完遂よりも仲間の命に比重をおいている。だからこそ麦野の言った事はよくわかつている。

「・・・そうだな。やっぱり全て話さねえとダメだよな」

そう言うと垣根はゆっくりと今回の件の詳細を話し始めた。

「お前等、『学園都市の最終兵器』ファイナルウエポン つて知ってるか？」

「何よそれ？フレンジ、浜面あんた達知ってる？」

聞いた事もない名称が垣根の口から出たので麦野は二人に尋ねた。だが二人共知らない様で首を横に振った。

「ある人物を調べている中で唯一掴んだ手掛りがこれだ。これ以外は何を調べてもヒットしねえんだ」

「第二位の垣根が調べても手掛りがこれだけだったのか？」

浜面は驚いた。第二位、それも暗部ともなれば大概の事は調べられる筈だし学園都市の闇にもそれなりに深く潜れる筈だ。そんな垣根が調べても手掛りがたった一つしか出ない人物って一体誰何だ？と浜面は思う。

「その調べてる人物ってのは誰なの？裏の人間？」

気になった麦野が垣根に尋ねる。

「神鬼大和っていつてな、俺の親友なんだよ」

「あんた自分の親友の事調べて何する気よ？弱みでも握るつもりなの？」

麦野は若干引きながら垣根に尋ねるが垣根は間髪入れずにそれを否定する。

「違うに決まってるんだろ！話しは最後まで聞け！……でそいつは一応書庫にはレベル0って載ってたけど最近どうもそれが怪しく感じるんだよ」

「書庫バンクにそう載っているならレベル0だろ。わざわざ嘘載せる必要なんかないじゃないか」

「俺も最初はそう思ってたんだけどな……。今になって考えてみたらあいつがレベル0とは思えねえんだよ」

「結局、何か疑う理由でもあるの？」

「いくつがあるんだが一番気になるのはあいつの雰囲気だ。レベル5としての俺の直感だがあいつから同じレベル5の感じがするんだ。それだけじゃねえ、俺と同じ裏の人間の匂いもする。それも俺以上に深い闇の匂いかな」

「でもそれはあなたの直感でしょ？ 確証がある訳でもないし勘違いって可能性もある」

そうは言ったが麦野はあながち否定出来ない部分もある。暗部の人間というのは暗部関係の人間なら直感でわかる事も少なくないからだ。麦野も例外ではない。

「確証ならあるぜ。さっき会う約束のやつから電話があつてな、それから統括理事会直々の警告があつたみてえだ」

「……なるほどね。確かにそれはかなり臭いわね。その大和つてやつには統括理事会が動く程何か秘密があるの確かね」

統括理事会が一個人のために動く事など滅多にない。彼等が動くという事は学園都市の機密に近い事に触れる可能性があるからだ。

「……それってかなりヤバい事じゃない？」

フレンドがポツリと呟いた。隣の浜面も同感だと言わんばかりに頷く。

「それで話す事は全部だ。相手は最悪統括理事会の連中、どうなるかわからねえ。だから麦野、断わるなら別に構わねえ。俺一人でなんとかする」

麦野は直ぐには返事を返さなかった。もしかしたら統括理事会と対立する原因になりうる依頼だ、アイテムのリーダーとしても安請けは出来ないのだろう。しばらく重苦しい沈黙が続き、ようやく麦野が口を開く。

「水臭い事言ってるんじゃないわよ垣根。言ったでしょ？あんたには山ほど借りがあるって、恩を仇で返す程私たちアイテムは根性曲がってないわよ」

「・・・いいのか？最悪連中と対立するかもしれないぞ？」

「大丈夫よ。理由は言えないけど連中は私たちには手は出せないのよ」

そう言つと麦野はフレндаと浜面を見る。

「そういう訳だ垣根。是非俺たちも協力させてくれよ！」

「結局さ、垣根の頼みは断れない訳よ」

「その通りだよ、かきね」

何時の間にか起きていたのか滝壺も麦野に同意する。全員の間には確かな決意と垣根を助けたいという想いが秘められていた。

「お前等・・・ありがとよ」

垣根は少し頭を下げて礼を言った。

やっぱり何よりも大切なのは友達だ、垣根は改めてそう思うのだった。

特別編2 置き去り

柵川中学の入学式を二日後に控えた日の朝、大和はある場所に来ていた。

置き去り（チャイルドエラー）保育施設

大和はここで育ち、学園都市最強の能力者となった。

置き去り（チャイルドエラー）として育てられた大和だが本当は置き去り（チャイルドエラー）ではない。学園都市の外には自分を産み、育ててくれた両親はちゃんと存在している。大和が学園都市に来たのは四歳の時だ。生まれつき左右の瞳の色が違い、さらには聖人の力をも宿す大和を周りの人間は『化け物』と言つて彼を恐れた。だが大和の両親だけは彼を愛し、精一杯の愛情を注ぎ育てた。

だがそんな大和に転機が訪れる。偶々外に来ていた学園都市の研究者が大和の聖人の力を能力者としての才能と思い、大和に目を付けたのだ。

原石

『開発』を行なう事なく生まれつき能力を発現出来る者を学園都市ではそう呼んでいる。

研究者は大和の聖人の力を原石だと思つたのだ。

研究者は大和の両親に学園都市に大和を送り出すよう説得した。科学の頂点に君臨する学園都市なら大和の特異な能力や左右色の違う瞳の原因もわかるかもしれないと。

だが大和の両親はそれに応じる事はなかった。自分達の愛する息子をそんな得体の知れない所なんかに送り出したくはなかったのだ。

研究者は何度も何度も大和の両親を説得したが結果は何時も同じだった。

研究者は何としても大和を学園都市へと連れて行きたかった。仮に大和が原石ならば原石の研究者として確固たる地位と名声を得る事が出来る。天然のダイヤモンドに近い原石はそれだけの魅力があつ

た。

出世欲に目が眩んだ研究者は大和を誘拐した。欲に支配された研究者は善悪の区別が出来る程の理性はもうなかった。学園都市にさえ入れてしまえばもう外からは手出し出来ない、研究者の思惑通りに事は運んだかに見えた。

だがその研究者以上に大和に注目している人物がいた。学園都市統括理事会理事長アレイスター・クロウリーだ。彼は大和の聖人の力を見抜き、さらには能力者としての才能すらも見抜いていた。この時からアレイスターは大和を将来学園都市の暗部の頂点に君臨する者、自身の右腕とする事を計画していたのだ。

そのためには聖人の力を原石などと勘違いしている研究者の手から大和を引き離さなければならぬ、統括理事会の直轄として育てる必要があると考えた。

アレイスターは暗部に大和を学園都市に誘拐してきた研究者を研究所諸共始末した。目的のためなら手段を選ばない、それがアレイスターという生物なのだ。

（今思えばオレは誘拐されてここに来たんだつたよな・・・）

大和は昔を思い出しながら施設の前に立つ。今日ここに来たのは仕事とは言えば中学に入学する事になったので世話になったこの保育士に一応挨拶をしようと思ったからだ。

門をくぐるためため歩こうとしたが大和は直ぐに足を止めた。中から子供達の楽しそうな笑い声が聞こえてきたからだ。

大和は裏の人間だ、それもその頂点に君臨する。殺した人の数も何人かわからない、多分軽く三桁は越えているだろう。そんな自分が今更どんな顔をして挨拶でもしようというのか。会わせる顔などある筈がない。

（ハッ、何柄でもねエ事やってんだか。入学っていつても所詮は仕事だからじゃねエかよ）

そう思った大和は自宅に帰るため後ろを向いて歩き始めた。

「もしかして・・・大和君？」

後ろから自分の名前を呼ぶ声が聞こえたので大和は再び門の方を向く。

「やっぱり大和君だ！私の事覚えてる？」

もちろん覚えている、忘れる筈がない。大和を自分の子供の様に愛情を持って育てくれた。大和が学園都市で信用する数少ない存在、
九条 静音くじょう しずねがそこにはいた。

「すごいなあ、大和君は。飛び級で中学に進学するなんて！」

大和は門の前で偶々会った保育士、九条静音と二人で施設のとある一室にいた。自宅に帰ろうとしていた大和を半ば無理矢理に中に入れたのだ。

「それにしてもほんと久しぶりね！しばらく見ない内に随分と大きくなっただわね！」

「三年もありゃあデカくもなるっての。アンタはちっとも変わってねエなあ」

九条は大和がこの施設にいた時、大和の担当だった保育士だ。身長170センチ越えと女性としては高く、スタイルもよくモデル体型の彼女はとても保育士には見えない。九条と会うのはかれこれ三年振りだがその美は全く変わらない。寧ろさらに美人になった印象すら受ける。

「大和君今日はどうしてここに来たの？」

「明日が入学式だからな、一応挨拶だけでもしよオと思っただよ」

「なるほどね」

「先生こそ何でスーツなんざ着てんだ？何時からここはスーツ着用になったんだよ」

「ああこれね。実は私、今日でここ辞めるの」

「ああ？辞める？そいつはまた急だなア。何かあつたのかよ？」

何時もの大和ならこんな事は聞かないだろう。基本的に他人が何をしようがどうなるうが自分に害が及ばないなら気にしないのが大和だ。だがそんな大和でも恩師である九条の事はやはり気になった。

「常盤台の寮監補佐になるの。駄目もとで応募してみたら受かったやつた」

満面笑みで九条は答えた。九条の夢も確か常盤台の寮監になる事だったような気がする。理由までは知らないが。

「常盤台の寮監か……。クソ面倒くせえんじゃねエの？」

「確かに大変みたいだけどそれだけやりがいのある仕事だと私は思うの」

まっすぐな目で大和を見つめながら九条は言う。

変わらねエな……。この目も。

大和は九条の目を見て思った。自分には決して出来ない目だ。これだけ人をまっすぐに見る事など。

「……。大和君、この三年間何があったの？」

九条は突然暗い顔をして大和に尋ねる。急な質問に大和も若干狼狽える。

「あア？どういう意味だそりゃ？」

「何か大和君雰囲気が変わったし私の目から背けてるといつか逃げてる感じがするの」

大和は九条の言葉の意味が理解出来なかった。

逃げてる？オレが？どうして逃げる必要などある？

「あつごめん、気にしないで！ちょっと気になったただだから」

九条が慌てて言った。

「まったく意味わかんねエ事言っただけじゃねエよ」

出来るだけ平素を装い大和は言う。そして椅子から立ち上がると部

屋の出口に向かった。

「オレそろそろ帰るわ。挨拶しよオと思っただけどみんな忙しいみてエだしな」

そう言い残すと大和は部屋着から出て行ってしまった。

九条は大和に何か言おうとしたが何も言えなかった。部屋を出る大和の背中がまるで自分を拒絶しているかの様に見えたからだ。

「大和君・・・」

九条はただそう呟く事しか出来なかった。

自宅への帰路の途中、大和は先程九条に言われた事を思い出し出ていた。

（逃げてるいるか・・・。確かにそうかもしれねエな）

実際大和は九条から逃げていた。別に自分は暗部の人間だから表の住人である九条に関わる訳にはいかないといったたいそれた理由だからではない。単に怖いのだ、自分が九条の様な光に憧れを持つ事が。大和の様な裏の人間は一度でも表に憧れを持てばそれで終わるだ。例えその憧れを消したとしてもまた直ぐに蘇る。だからこそ大和は九条から逃げた。

(結局オレはまだまだ弱エのかもな・・・)

一人そう思う大和であった。

大和は昔を思い出しながら施設の前に立つ。今日ここに来たのは仕事とは言えば中学に入学する事になったので世話になったこの保育士に一応挨拶をしようと思ったからだ。

門をくぐるためため歩こうとしたが大和は直ぐに足を止めた。中から子供達の楽しそうな笑い声が聞こえてきたからだ。

大和は裏の人間だ、それもその頂点に君臨する。殺した人の数も何人かわからない、多分軽く三桁は越えているだろう。そんな自分が今更どんな顔をして挨拶でもしようというのか。会わせる顔などある筈がない。

(ハッ、何柄でもねエ事やってんだか。入学っていつでも所詮は仕事だからじゃねエかよ)

そう思った大和は自宅に帰るため後ろを向いて歩き始めた。

「もしかして・・・大和君？」

後ろから自分の名前を呼ぶ声が聞こえたので大和は再び門の方を向く。

「やっぱり大和君だ！私の事覚えてる？」

もちろん覚えている、忘れる筈がない。大和を自分の子供の様に愛情を持って育てくれた。大和が学園都市で信用する数少ない存在、
九条 静音くじょう しずねがそこにはいた。

「すごいなあ〜大和君は。飛び級で中学に進学するなんて！」

大和は門の前で偶々会った保育士、九条静音と二人で施設のとある一室にいた。自宅に帰ろうとしていた大和を半ば無理矢理に入れたのだ。

「それにしてもほんと久しぶりね！しばらく見ない内に随分と大きくなっただわね！」

「三年もありゃあデカくもなるっての。アンタはちつとも変わってねエなア」

九条は大和がこの施設にいた時、大和の担当だった保育士だ。身長170センチ越えと女性としては高く、スタイルもよくモデル体型の彼女はとても保育士には見えない。九条と会うのはかれこれ三年振りだがその美は全く変わらない。寧ろさらに美人になった印象すら受ける。

「大和君今日はどうしてここに来たの？」

「明日が入学式だからな、一応挨拶だけでもしよオと思っただよ」

「なるほどね」

「先生こそ何でスーツなんざ着てんだ？何時からここはスーツ着用

になったんだよ」

「ああこれね。実は私、今日でここ辞めるの」

「ああ？辞める？そいつはまた急だなア。何かあったのかよ？」

何時もの大和ならこんな事は聞かないだろう。基本的に他人が何をしようがどうなるうが自分に害が及ばないなら気にしないのが大和だ。だがそんな大和でも恩師である九条の事はやはり気になった。

「常盤台の寮監補佐になるの。駄目もとで応募してみたら受かったやつた」

満面笑みで九条は答えた。九条の夢も確か常盤台の寮監になる事だったような気がする。理由までは知らないが。

「常盤台の寮監か……。クソ面倒くせエんじゃねエの？」

「確かに大変みたいだけどそれだけやりがいのある仕事だと私は思うの」

まっすぐな目で大和を見つめながら九条は言う。

変わらねエな……。この目も。

大和は九条の目を見て思った。自分には決して出来ない目だ。これだけ人をまっすぐに見る事など。

「……。大和君、この三年間何があったの？」

九条は突然暗い顔をして大和に尋ねる。急な質問に大和も若干狼狽える。

「ああ？どういう意味だそりゃ？」

「何か大和君雰囲気が変わったし私の目から背けてるといっつか逃げてる感じがするの」

大和は九条の言葉の意味が理解出来なかった。
逃げてる？オレが？どうして逃げる必要などある？

「あつごめん、気にしないで！ちよつと気になったただだから」

九条が慌てて言った。

「つたく意味わかんねエ事言つてんじゃねエよ」

出来るだけ平素を装い大和は言う。そして椅子から立ち上がると部屋の出口に向かった。

「オレそろそろ帰るわ。挨拶しよオと思っただけどみんな忙しいみてエだしな」

そう言い残すと大和は部屋着から出て行ってしまった。

九条は大和に何か言おうとしたが何も言えなかった。部屋を出る大和の背中がまるで自分を拒絶しているかの様に見えたからだ。

「大和君・・・」

九条はただそう呟く事しか出来なかった。

自宅への帰路の途中、大和は先程九条に言われた事を思い出していた。

（逃げてるいるか……。確かにそうかもしれねえな）

実際大和は九条から逃げていた。別に自分は暗部の人間だから表の住人である九条に関わる訳にはいかないといったたいそれた理由だからではない。単に怖いのだ、自分が九条の様な光に憧れを持つ事が。大和の様な裏の人間は一度でも表に憧れを持てばそれで終わる。例えばその憧れを消したとしてもまた直ぐに蘇る。だからこそ大和は九条から逃げた。

（結局オレはまだまだ弱エのかもな……）

一人そう思う大和であった。

午前0時の対談

学園都市といえど夜は寝る時間という事は『外』と変わらない。特に人口のほとんどが学生である学園都市は『外』以上にそれが顕著に表れる。

現在の時間、午後11時55分。多くの学生は就寝しているであろう時間に人気のない操車場に一人の青年が立っていた。学園都市の第二位、『未元物質』（ダークマター）を操る垣根帝督だ。

彼はここである人物と会う約束をしている。約束の0時まで後5分と迫った垣根は服の下にある隠しマイクのスイッチを入れた。

「俺だ。聞こえてるか？」

『あー大丈夫、ちゃんと聞こえてるよ』

垣根の声に応答したのは学園都市の暗部の一つ『アイテム』のリーダー・麦野沈利。もしもの場合に備えて『アイテム』のメンバーには今垣根がいる場所から少し離れたところで待機してもらっている。

「俺が指示するまで待機しといてくれ。出来るだけ面倒事は避けた
い」

『りょくかい』

麦野からの応答を聞いた垣根は隠しマイクのスイッチを切り替えた。これでこちら側からしか音声の送信出来なくなり麦野たちの声が届く事はない。

（さてと、これで準備は完璧だ。後は野郎が現れるのを待つだけだ）

垣根は腕時計で時間を確認する。現在の時間、午後11時58分。約束の時間まで後2分だ。

そろそろかと垣根が思ったのとほぼ同時に地面の砂利を踏む音が聞こえた。

音は垣根の後ろから聞こえどんどん近いて来ている。垣根は一気に警戒心を高める。やがて音は止み、暗闇から誰かの足だけが見えた。

「うむ、約束の時間まで後1分か……。少し早く来てしまったかな」

「早くなんかねえよ。5分前行動を心掛けましょうって学校で習わなかったのか？」

「残念ながら私は君と違って学校には通っていないものでね」

「そおかよ。さっさと顔見せたらどうだ？正直かなり気持ち悪いぜ。声だけ聞こえるのって」

「そうだな、時間も来た事だ」

足しか確認出来なかった身体がどんどんと月明りに照らされ確認出来るようになってくる。

真っ黒なスーツに真っ黒なサングラスとこの暗闇に同化してしまいそうな服装の男が現れた。

「はじめまして垣根帝督。顔を会わせるのはお互い初めてかな」

「まさか『電話の男』がこんなに若いやつとは思わなかったぜ。もつとジジイみてえなやつかと思ったが」

『電話の男』は垣根の予想を遙かに上回る程若かった。年齢はおそらく二十歳前後だろうか。それよりも垣根が驚いたのは『電話の男』自らここに来た事だ。てつきり誰か代理に送るものだと思っていたが。

「それで神鬼大和の何が知りたい？」

「てめえの知ってる事全て教える。返事はイエスしか認めねえ」

「法外な注文だな。私には見返りはなしかな？」

やはりそうくるか……。駄目もど言ってみたがやはりタダでは動くつもりはないようだ。

「・・・何が望みだ？」

「そうだな、残念ながら今ところは何も無いよ。来るべき時がくれは私の命令に従う、これでどうかね？」

「いいだろう」

垣根としても断るつもりなど毛頭なかったので直ぐに返事をした。

『電話の男』はよしよしと言って口元を歪ませている。

「さて、本題に戻ろうか。君の質問に私が答えるといった形でいいかな？」

垣根もそちらの方がよかったので直ぐに承諾した。

「じゃあ最初の質問だ。神鬼大和、あいつは一体何だ？」

「彼は学園都市最強の能力者、この街の闇の頂点に君臨するアレイスターの右腕、と言えればいいのかな」

「何だと・・・!？」

垣根は信じられなかった。あの大和が学園都市最強の能力者？この街の闇の頂点に君臨している？

最初の質問で垣根は早くも混乱しそうになる。

「驚くのも無理はないさ。なにせ彼の存在は統括理事会ですら一部の者しか知り得ない最高機密だからね」

「最強つて事はレベル5か！？けどあいつはいつも能力診断はレベル0だったぞ！」

「それぐらいの事統括理事会ならば幾らでも改ざん出来るさ。彼は学園都市が総出で隠そうとしている能力者だ。能力診断はもちろん、システムスキャン書庫を含め彼の情報は全て改ざん、隠蔽されていると言っても過言ではない」

確かに今思えばそうだ。大和に関してはレベル0な筈なのに圧倒的に情報が少ない。レベル5というのも薄々勘付いてはいたがやはり面と向って言われると信じられない。

「じゃあ何故そこまでして大和の事を伏せる！最強のレベル5なら公表しても問題ないだろ！」

レベル5という存在は言わば学園都市の看板の様な役割も担ってい

る。本人はそんな気がなくともレベル5というネームバリューは至るところで利用出来るのだ。最強の能力者ならばなおのこと公表する筈なのだが。

「彼はただの能力者ではないからだ。彼はこの世界のバランス、科学と魔術のバランスを根底から覆しかねない力を持つ者だからだよ。君も魔術に関しては少しながら触れている筈だが？」

（あのチビシスターの事か？まさか魔術なんてもん本当にあるとでも言うのか？）

垣根は魔術の事など信じていない。あのチビシスターにしても頭の狂ったガキとしか認識していなかった。この話を聞くまでは。

あの時の大和の対応、垣根や当麻がポカンとしている中大和だけは冷静だった。それに魔術の存在を匂わせる発言もしていた。ならば大和は魔術師とでも言うのか。

「君は今神鬼大和が魔術師ではないかと思っっているとすがそれに關しては不明だ。本来能力者には魔術は使用できない筈なのだが彼の場合は例外なのかもしれない。はっきりしているのは彼が現時点で既に何かしらの魔術的力を保有している可能性が高いという事だ」

垣根は訳がわからなかった。親友がまさかそんなところにいるなんて予想にもしていなかったからだ。

「大和は闇の頂点に君臨してるって言ったな……。あいつはどこに所属している？」

「彼はどこにも所属などしていないよ。彼はどんな大きな仕事も全て一人でこなす。どうやら仲間などただのお荷物と考えているよう

だ

「……………」

垣根は言葉が出なかった。聞きたい事はまだまだある、だが口を開く事が出来なかった。これ以上聞けば親友が大和がどこか遠いところに行ってしまう、そう思ったからだ。

「その様子ではどうやら聞きたくなかった事まで聞いてしまったよ
うだね。これ以上は時間の無駄みたいだな」

未だ無言の垣根に背を向けると『電話の男』は暗闇に向かつて歩き始めた。垣根はただその背中を見ている事しか出来なかった。

神裂火織

垣根が『電話の男』と対談する少し前、大和は『窓のないビル』でアレイスターと会っていた。アレイスターから大和に突然の呼び出しがはいったのだ。アレイスターからの突然の呼び出しは何時もの事なのでたいして気にする事なく来たのだが……。

「おいテメエ、今何て言った？」

「どうやら統括理事会の一人が第二位に君の正体をばらすようだ」

「なんだと……!」

大和の正体は学園都市のトップシークレットに匹敵する事だ。仮にそれを他人に漏らせば確実に始末される。いや、まだ漏らすだけならまだいい、大和にとって問題なのはその相手が垣根帝督である事だ。

「テメエ!!何でソイツ止めなかったんだよ!!」

「止める必要がなかったから止めなかっただけだが……?」

「必要がねエだア!?大アリだろオが!!テメエまさかオレに帝督の野郎殺せとか言うんじゃねエだろオな!!」

基本的に学園都市の間に触れた者はそのまま引きずり込まれるか殺されるかのどちらかだ。アレイスターのお眼鏡にかからない限り大概は後者になる。

だが例外はある。大和の正体だ。大和の正体を知った者はどんなに

有能な者であつても必ず殺す、これはアレイスターと大和の絶対の掟なのだ。例えそれがレベル5であろうとも例外ではない。だがアレイスターは大和の予想に反した言葉を放つ。

「始末する必要はない。垣根帝督にはこのまま君の正体を知つてもらう」

「・・・は？」

大和は啞然とした表情で思わず言葉を零す。例外なき絶対の掟なのにアレイスターは垣根を殺す必要がないと言つたのだ。

「いや意味わかんねエよ・・・。始末しなくていいのか？」

「君は垣根帝督を始末したいのかね？」

「したい訳ねエだろ。アイツはオレの親友だぞ」

「ならばこの話は終了だ。もう帰ってくれて構わない」

随分あっさりと終わったなと大和は若干不信に思ったが何にせよ垣根を殺さずに済んだので黙って自宅へと帰って行った。

「理事長にしては随分と寛大な処分ですね」

大和とアレイスターのやり取りを傍から見ていた『案内人』がアレイスターに言う。

「貴方なら今直ぐに殺せと言つたのですが」

「フフ、寛大？それは勘違いだよ。寛大どころか彼にとっては始末するのより厳しい事を言っただつもりだよ」

「どういう事です・・・？」

「彼の正体を知った事で垣根帝督を更に深い闇に引きずり込む口実が出来た。今までは彼の存在がそれを邪魔してきたが今回ばかりは彼も手出し出来まい」

「じゃあまさか・・・」

「君の想像の通りだ。統括理事会の人間が垣根帝督に彼の正体をばらしたのは私の指示だ。そして垣根帝督に警告したのも私の指示、より神鬼大和の正体を知りたくなるように扇動したのだよ」

「・・・何故そのような事を？」

「前にも言った通りだ。使える駒はいくらあっても困る事はない、と」

『窓のないビル』から自宅に戻る大和は気分が良かった。てっきり今直ぐ垣根を殺せと言われるものだと思っていたがあのアレイスターには珍しいお咎めなしという超寛大な処分にしてくれたのだ。今日は何となくついてる気がする、少しぐらい当麻にも分けてやられてエゼ、などと思っていると何かが大和にぶつかった。

何だ？と思いぶつかったものを見ると見覚えにある銀髪に安全ピンだらけの修道服のインデックスが倒れていた。

「テメエ……何でこんなところにいんだ？確か小萌先生の家にいる筈じゃ……」

大和が最後まで言い終わる前にインデックスが彼の服を掴み大声で叫んだ。

「お願い、とーまを助けて！！！！」

インデックスはあの時その場にいた大和と垣根の顔を覚えていた。そして当麻はこの二人に全幅の信頼を寄せており、何かあったらあの二人に助けを求めると言っていた。

いきなり現れて何言ってるんだア？と思ったがインデックスの真剣な表情、なにより親友の名が出た事にタダ事ではないと思った。

（これ以上あつちには関わりたくなかったが……）

大和は自分より少し背が低いインデックスの頭に手を置いた。

（親友がピンチなら話は別だな！）

大和はインデックスの来た道に戻って行き、少し歩いたところで後ろを振り返る。

「一人で大丈夫なんだろうかな？テメエまでは面倒見きれねエぞ」

その言葉を聞きインデックスは笑みを浮かべた。

「私は一人でも大丈夫！！だからとーまをお願い！！！」

それを聞いた大和はニヤリと笑うとインデックスに宣言する。

「安心しな、オレに勝てるヤツなんざ未来永劫現れやしねエよ」

インデックスが大和に助けを求める少し前、インデックスは当麻と絹旗の三人で銭湯に向かっていた。

傷を治療した後インデックスは熱を出したのだが彼女の看病の手伝いとして当麻が呼んだ絹旗が持ってきた『どんな高熱も一発でスッキリ！！スーパークールドリンク』という名のなんとも名前の長いドリンクを飲むと三日程は寝込むだろう熱が一瞬で下がったのだ。今思えばかなり怪しい飲み物だったがあの時は混乱してそこまで頭が回らなかった。

「とーま、さいあい」

「何だよ？」

「超どうしたんですか？インデックス」

絹旗とインデックスは何となく気が合うのか直ぐに仲良くなった。

「ジャパニーズ・セントーにはコーヒー牛乳があるって、こもえが言ってた。コーヒー牛乳って何？カプチーノみたいなもの？」

「コーヒー牛乳を超知らないんですか？インデックス」

「っーかそんな豪勢なモンは銭湯にはねえ。お前の国の風呂はカプチーノ完備なのか？」

「んー・・・その辺は良くわからないかも。私、気付いた時から日本ににいたからね」

「産まれて超直ぐに日本に来たんですか？通りで日本語が超ペラペラな訳です」

だがインデックスは首を横に振り、そうじゃないと言って否定する。

「私、一年前ぐらいから記憶がなくなちゃってるの。だから向こうの事はよくわからないんだよね」

インデックスは笑いながら言った。だがその笑顔の下には恐怖や焦り、そして辛さが滲み出ていた。当麻も絹旗も記憶のない理由を聞き出したかったがこれ以上聞いてはいけない感じがしたのでふーんとだけ言った。

「それよりも早く行くんだよ！」

よほど銭湯が楽しみなのかインデックスは一人で走り出してしまった。

超待ってください！と言って絹旗もそれに続く。当麻はやれやれと思いつながら二人を微笑ましく見つめる。

その時、当麻はある違和感に気付く。

人が一人もいないのだ。時間はまだ8時で就寝に着くような時間で

はない。にもかかわらずまるでひどい田舎の農場の様な感じだった。

「ステイルが人払いの刻印^{ルーン}を刻んでるだけですよ」

当麻から10メートルぐらい先に立っていたのは片足だけ大胆に切ったジーンズに2メートル近い刀をぶら下げる魔術師、神裂火織が立っていた。

『完全聖人』

大和は当麻の元へ走っていた。聖人の力は使っていない。誰かに見られると色々面倒な事になるからだ。

（探すつていつても学園都市は広エからなア。チツ、インデックスのヤツに当麻の場所聞いとけばよかつたぜ）

だがそこで大和は魔術の気配を探知する。ステイルの人払いの刻印^{ルイン}だ。

（コイツは人払いの魔術か？なら好都合だぜ！）

魔術を展開している場所の近くに当麻がいると考えた大和は一気にそこへと向かった。

「なぜ貴方がここに。人払いの刻印^{ルイン}を刻んでいた筈です」

「無駄な努力ご苦労様。ただどの程度じゃアオレには通じねエよ」

大和はうつ伏せに倒れている当麻に近付くとその横に立つ。

「よオ当麻、随分と派手にやられてんじゃねエか」

「大和……ど、どうしてここに？」

「インデックスのヤツによオ頼まれたんだよ。オレとしちゃア魔術とはもう関わりなくなかったんだが親友がピンチとなれば話は別だな」

「インデックスと絹旗は無事なのか！！」

大和は当麻の口から絹旗という名前が出た事に驚き、絹旗がいた理由を尋ねようとした。だがそれは出来なかった。突然大和の頭上スレスレを何かがもの凄いスピードで通過したかと思うと後ろの風力発電のプロペラがバターの様に真つ二つに切られたからだ。

「……せつかちな野郎だな。少しぐれエ待てねエのか？」

大和は神裂を睨み付ける。その間に神裂は七天七天を構えながら答える。

「貴方たちの会話を待つ必要も時間も私にはありませんので」

大和はそオかよと言うと横目で当麻を見下ろす。

「当麻ア、絹旗の事は後でじっくり効かせてもらっぜ」

大和は屈み込むと当麻の首に手刀をし気絶させた。その光景を驚きの表情で見る神裂に大和は言う。

「オレの力はコイツには秘密なんですね。それにテメエも無様にやられていく様、見られたくねエだろ」

「その言い様ですと私が貴方に負けると聞こえるのですが」

神裂は大和を睨み付けながら言う。大和は少し笑みを浮かべると神裂に答えた。

「その通りだよクソ野郎。テメエはオレに負ける。何も出来ずゴミ虫みてエに捻り潰されるんだよ」

「私相手に喧嘩を売るとは・・・身の程知らずにも程がありますね」

「そりゃアオレのセリフだよボケ。それにこれはケンカじゃねエ、圧倒的な暴力だ」

二人の間に凄まじい殺気が流れる。大和はポケットに手を入れたまま、神裂は七天七刀を構えたままお互いを睨み付ける。しばらく沈黙が続き大和がようやく口を開いた。

「一つ聞かせてくれや」

「なんででしょう？」

「どうしてオレの親友に手を出した。魔術師ってのは無差別に人を攻撃する外道なのか」

「まさか、私はその少年に一つお願いをしただけですよ。インデックスをこちらに引き渡すようにと」

やっぱりアイツ絡みかよと大和は呆れた表情をする。

「で、当麻はそれを拒否った訳か。だから力付くで承諾させよう」と

したのか？」

大和は自分の中で怒りが湧き上がるのがわかった。若干声を震わせながら神裂に言った。

「そんなところです。貴方からも少年に説得してくれませんか？彼女をおとなしくこちらに渡すようにと」

その瞬間、怒りが大和の沸点を越えた。

「説得してくれか・・・ふざけんしゃねエぞゴラアアアアアア！！！！」

凄まじいスピードで大和は神裂に突進する。余りにも速さに神裂もまともに反応出来ず何とか七天七刀の鞘でガードするのが精一杯だった。だが完全には威力を殺す事が出来ず、そのまま10m程後ろに吹き飛んでしまった。

「今更説得してくれだア！！バカ言っつてんじゃねエぞゴラア！！」
ようやく着地した神裂に大和は叫ぶ。

「オレの親友に手エ出した瞬間にテメエの運命せんたくは決まっつてんだよオ！！！！」

再び大和は神裂に突進する。先程よりも更に速いスピードで。だが神裂も一流の魔術師であり聖人だ、二度同じ手は通用しない。

「七閃」

一瞬神裂の右手が何かのバグの様にブレたかと思うと轟！という風の唸りと共に凄まじいスピードで何かが大和に襲いかかる。

「そんなガラクタでなア！！勝てる訳ねエだろオ！！」

大和はその場で急ブレーキをかけると凄まじい速さの蹴りから鎌風を放つ。

大和から放たれた鎌風は襲いかける何かを叩き斬った。それは鋼のワイヤーだった。ワイヤーを斬った鎌風はそのまま神裂目掛けて飛んで行く。

一撃で七閃を看破された事に驚きを隠せなかったが神裂は鎌風をかわすと次の攻撃の手を考える。だが神裂が鎌風をかわすと予想していた大和は既に神裂の目の前に接近していた。

「!!!??」

「終わりだよオ！！クソ野郎がア！！」千鳥』（ちどり）！！」

バチバチ！と美琴顔負けの電気を帯びた大和の右手の突きが神裂に放たれた。

勝負あった。

普通なら誰でもそう思うだろう。だが大和も普通でなければ神裂もまた普通ではない。

神裂は常人を超えた反射神経で大和の千鳥を七天七刀の鞘で一瞬だけ上に払うとそのスキに横っ飛びでかわしたのだ。

大和の顔は驚きの表情に変わる。確実に勝負有りと思ったのだがあろう事かわされるとは。

だが大和以上に驚いていたのは神裂の方だった。正直言って大和の千鳥にはほとんど反応出来なかった。かわせたのも恐らく単なる幸運だろう。それ以上に聖人の自分が反応できない程のスピードで移

動する事が信じられなかった。

「テムエ・・・まさか聖人か」

神裂は今日何度目かわからない驚きの表情に染まる。本来科学サイドの人間が知る筈のない名前、『聖人』と言う名前を大和の口から聞いたからだ。

「な、なぜ貴方が聖人の事を・・・」

「コイツは驚いた！まさか学園都市でオレの粗悪品とやりあう事になるなんてなア！」

粗悪品？一体この少年は何を言っているんだ？
神裂は訳がわからなかった。

「何驚いてんだよ。ああそっか、確か聖人はテムエ等魔術サイドの所有物だったな。だが世の中には例外だってあるんだぜ」

大和は口元を歪ませながら神裂に言う。

「ま、まさか貴方も・・・」

「ご名答、オレも聖人だ。でもテムエと同じじゃねエ。オレはテムエみてエな粗悪品の聖人なんかじゃねエんだよ！」

『窓のないビル』でアレイスターと「案内人」は大和と神裂の戦闘を『滞空回線』（アンダーライン）を使って見ていた。

「やはり彼の力は素晴らしい。聖人を相手にここまで圧倒するとはその表情からはわからないがアレイスターは満足気味に賞賛する。

「よろしいのですか？ 聖人相手に戦闘などしても」

「何も問題ない。むしろ好都合だ。聖人同士の衝突など滅多に見れるものではないからね」

「そういう意味ではありませんよ」

「・・・ではどういう意味かな？」

アレイスターは『案内人』に尋ねる。

「大和君と闘ってるあの魔術師・・・確実に死にますよ」

『案内人』はハッキリと答えた。

「随分と彼を信用しているのだな」

アレイスターはからかう様に言う。

「信用も何も『ただの聖人』如きじゃ大和君に勝てる筈ないでしょ」

「確かにそうだな。彼は聖人を超えた聖人だからね……」

「『完全聖人』？」

「そうだ。オレは『完全聖人』。聖人の頂点に君臨する存在なんだよ」

『完全聖人』など聞いた事もない。神裂は初耳だった。

「知らねエのも無理ねエよ。何せ『完全聖人』は極秘の存在、テメエみてエな教会の人間が最も恐れる存在なんだからなア」

「……どういう事ですか？」

大和はニヤリと口元を歪ませると神裂に説明し始める。

「本来『聖人』、つてのはどんな存在だ」

「『聖人』は産まれながらにして神に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ者」

神裂はスラスラと答える。自分も聖人なのだから当たり前前の事だ。

「正解だ。じゃア『聖人』つてのは具体的に普通のヤツとはどう違うっ？」

「『聖人』は偶像の理論により『神の力の一端』をその身に宿す事が出来ます。結果五感をはじめとする身体機能が大幅に強化されます」

「素晴らしい解答だな。じゃア最後だ、仮に『神に似てる』じゃなく『神と同じ』聖人が現れたらどうなる」

「そんなもの現れる筈がありません！そもそも『神と同じ』など……」

そこまで言って神裂は理解した。『完全聖人』とは何なのかを。

「気付いたみてエだな。『完全聖人』とは神と同じ特徴を持つ者の事だ。普通の聖人の倍以上の力を持つ究極の存在なんだよ」

一旦言葉を切ると大和は続ける。

「『完全聖人』はまさしく神そのものだ。だから『天使の力』（テレズマ）を完全に掌握しているから100%発揮する事だつて可能だ」

「ですが貴方の身体は『人間』です！仮に全力を出す事が出来ても耐えられる筈が……！」

神裂の言う通り神と同じ特徴を持つとはいえベースとなる身体は『人間』のモノだ。全力を出せば当然膨大な負担がかかる筈だ。

「確かに死ぬリスクは普通の聖人に比べりゃアちつせエとはいえ全くないって訳じゃねエ。それに全力ばっか出してたら身体にどんど

ん負担が蓄積されちまう。そこで登場するのがオレの能力『事象選択』（オールセレクト）だ」

「オールセレクト？」

「オレの能力でなア『発生した事象に対して選択肢を持つ』事が出来るモンだ。これを使って身体にかかった負担をなかつた事にすりゃアいいだけの事だ」

神裂は呆然とした。ただでさえ扱うのが困難な力を完璧に使いこなせ、尚且つそれに伴うリスクもほぼゼロに等しい。

大和の言う通り神そのものだ。いや神すらも超えた存在なのかもしれない。

「教会が『完全聖人』を恐れる理由・・・テメエならもうわかったら」

もちろんわかつてる。教会は神を崇める存在だ。神は絶対であり人間とは違う絶対の存在、それが教会の神に対する考えだ。だがもし『完全聖人』なんてモノが世界に知れ渡ればその考えを根底から覆す事になる。宗教革命どころの騒ぎではない。教会の存在意義を破壊する事になるのだ。

「と、言う訳だ。だからサクッと終わらせてやるよ」

その瞬間、シュツと何か音が鳴ったかと思うと神裂の前にいた筈の大和の姿が消えた。

「なっ！ど、どこに！」

キヨロキヨロと周りを見回すが大和の姿はない。

「どこ見てんだア!!!」

神裂が顔を上に向けると15m程上空に大和がいた。

「ボケつとしてると潰されんぞオ!!!」

そのまま大和はロケットの様に神裂に接近する。神裂はそれを横にかわす。

ドガン!!!

凄まじい威力と音共に大和は地面に激突する。大量の砂煙の中大和は一人悠然と立つ。大和の立っている場所にはまるで隕石でも落ちたかの様にクレーターが出来ていた。

「なんとという威力なのですか・・・」

だが神裂はもう驚いてはいなかった。完全聖人の大和ならこれぐらいの事なんの造作もないのだろう。

神裂は一つわからない事があった。それは先程の電気を帯びた突きの事だ。最初は魔術かと思ったが直ぐにその可能性を捨てる。魔力は感じなかったし何より能力者に魔術は使用出来ない筈だ。

次に神裂は能力ではないかと疑った。しかしその可能性も直ぐに捨てた。学園都市に来る前に神裂達はこの街の事を少し調べたのだ。そこでわかったのは一人の能力者が二つ以上の能力は使えないという事だ。詳しくはわからないがなんでも脳が耐え切れならしい。神裂は次の可能性を考えようとしたが直ぐに思考を止める。別の事を考えながら闘える相手ではないからだ。神裂は大和に集中する。神裂もただやられっぱなしでは終わらない。

鞘から刀身を抜く。

「おいおい、まだやるのかよ。諦め悪過ぎんだろテメエ」

大和はやれやれといった表情で言う。

「私としてもここで負ける訳にはいかないですよ！」

神裂は一気に距離を詰め大和に斬りかかる。傍から見れば凄まじいスピードだが大和からすればまだまだ遅い。

「そんなスピードじゃアオレには届かねエよ！」

大和はよけるのではなく逆に神裂の懐に入り込んだ。2 mに及ぶ長さを誇る七天七刀はよけるよりも神裂の身体に使いところの方が安全だと考えたのだ。

よけると思っていた神裂は完全に不意を突かれた。大和は手に力を込めると神裂の腹部に正拳を入れる。

「ゴフツ・・・！」

腹部に強烈な一撃を受けた神裂はそのまま倒れそうになる。だが何とか踏ん張り後ろに下がり再び大和から距離を取る。

息が出来ない、それが原因か頭がフラフラする。その上目が眩む。
・・・目が眩む？

「その様子じゃア目でも眩んでるみてエだなア」

「・・・何をしたのですか！」

大和はニヤリと口元を歪ませる。

「さっきの正拳でな、テメエの身体機能を少し狂わせたんだよ。どうやら目に異常が来たみてエだな」

完全に見えない訳ではないが大和の姿を捉えられない。まるで太陽を直接見ている様だ。

「さアてここでオレから提案だア」

余程余裕があるのか大和は欠伸をしながら言う。

「提案・・・？」

「そうだ。降参です、許して下さい、って言うなら見逃してやるよ。どうだ？悪くねエだろ」

大和は提案と言っているがこれは提案などではない。事実上の警告だ。これ以上やるなら容赦しないという脅しを籠めた。神裂は目を閉じると下を向き黙り込む。

ここで彼の提案を受ければ自分は恐らく助かるだろう。目前に迫る死の恐怖からも圧倒的な力の差による絶望からも、全てから解放されるだろう。

答えは決まった。

神裂は目を開くと顔を上げ大和を見つめる。

「答えは決まったかア？」

大和はゆっくりと神裂に近付く。

「決まりました。答えは・・・これです！..！」

「ッ！！」

神裂は七天七刀を一気に抜刀して大和に斬りかかった。

真正正銘神裂の最後の剣撃、神をも両断するとすら言われている彼女の最強にして最終奥義——唯閃ゆいせんが大和を捉えた。

いくら『完全聖人』であつても直撃すればただでは済まない筈、オ事象選択イルセレクトを使われる前に勝負を着ける必要があると神裂は考えたのだがその目論見は一瞬にして破壊された。

「惜しかったなア。でもそれじゃアまだオレには届かねエよ」

唯閃が直撃した筈の大和が何事もなかったかの様に神裂の後ろに立っていたのだ。後ろを振り向いた神裂は今日一番の驚きの表情を見せる。

「ど、どうして。唯閃は確実に貴方に直撃した筈です・・・」

手応えはあつた。それに斬った感触もあつた。だが大和には傷一つない。神裂は訳がわからなかった。

「残念ながらテメエが斬つたのは幻影だ。オレの作った質量の持つ幻影。まア普通はそんなモン作れねエけどな」

勝敗は喫した。唯閃を破られた以上、神裂にはもう打つ手がなかった。仮にあつたとしても彼に届く事はないだろう。

神裂は唯閃による負担からかヘナヘナとその場に尻餅をついてしまった。大和はトドメを刺すために神裂にゆっくりと近付く。

「よく頑張ったよテメエは。久しぶりにオレもいい汗かいたぜ」

大和は神裂の目の前に立つとゆっくりと右手を挙げる。

「だから安らかに眠れ」

大和は一気に右手を振り下ろす。神裂はもうよけようとはしなかった。目をギョツと閉じた。

・・・だがいつまで経っても大和の右手が神裂を捉える事はなかった。恐る恐る目を開くと大和の右手は神裂の頭上スレスレで止まって、いや止められていた。先程まで気絶していた筈の上条当麻の右手によって。

「ッ！！当麻何時の間に・・・」

「もう辞める大和！！勝負は着いた！これ以上やる必要はないだろ！！」

大和は当麻を振り払おうと出ない。当麻の右手「『幻想殺し』（イマジンプレイカー）に触れている大和は今ただの13歳の少年だ。自分よりも腕っ節の強い当麻を振り払える筈もない。

「なんでコイツを庇う！！コイツはテメエも殺そうとしたんだぞ！！」

「だからってお前がこいつを殺していい理由にはなんねえだろうが！！」

大和は心の中で笑った。どこまでコイツはバカなんだろうか。見ず知らずの人はおろか敵にすら情をかけるとは・・・。

「あんたもあんだだ！！なんでそこまでしてインデックスを追い詰めるんだよ！！そんだけの力があれば誰だって、何だって守れるのに」

当麻は未だ大和の前で固まっている神裂に叫ぶ。

「私だって・・・私だって、好きでこんな事している訳ではありませんよ。だけど・・・こうしないと彼女は生きてはいけない、死んでしまうんですよ。彼女は私と同じ必要悪の教会ネセサリウスの同僚にして、親友なのですよ・・・」

当麻は思わず掴んでいた大和の手を離してしまった。神裂の言っている事の意味がわからなかった。大和はただ目を閉じて神裂の言葉を聞いている。

「完全記憶能力、という言葉に聞き覚えはありますか？」

神裂の問いに大和が答える。

「確か・・・見たモノ聞いたモノ全てを記憶し、忘れられねエ能力だっけ？オレも実物は見たことねエけどな」

その答えに神裂は頷く。

「彼女はその能力ちからのおかげで10万3000冊の禁書を記憶する事が出来ました。けどその能力ちからが彼女を苦しめているのです」

「どついう事だよ？」

当麻は神裂に尋ねる。

「彼女の脳の85%は禁書によって埋め尽くされています。ですから彼女は今残り15%でしか日常生活を送れないんです」

「それが何だつてんだよ。インデックスはお前と同じ必要悪の教会ネセサリウスなんだから！！だったら何でインデックスはお前等から逃げるんだよ！！何でお前等を悪い魔術師だつて呼ぶんだよ！！」

神裂の代わりに大和がその問いに答えた。

「んなモン簡単だよ当麻。アイツはコイツ等が味方だつて知らねエからだよ。考えてみる、例えば当麻がそれだけで世界を潰してしまおう力を持つてたとする。そこに誰かも知らねエヤツがイキナリ狙ってきた。だがソイツは自分が知らないだけでかつて親友、でも自分はソイツが誰なのかわからない。テメエならどう考える？『自分の力を狙う悪いヤツ』って考えねエか？」

当麻はそこで思い出した。先程インデックスが言った言葉、『一年程前からの記憶がない』という言葉を。

「だけど、あいつには完全記憶能力の力があるんだろ！？だったら何でお前等の事を知らないんだよ」

「それは・・・」コイツ等が記憶を消した。だから知らねんだよ」

神裂の上から大和が答えた。

「な、何で・・・何でそんな事したんだよ！！インデックスはお前

の親友じゃなかったのかよ!!」

当麻は思わず神裂に叫ぶ。

「そうしないと、彼女は死んでしまうからですよ」

神裂の答えに当麻は言葉を失った。神裂は今にも泣きそうな顔で続ける。

「先程も言った通り彼女は今常人の15%の脳で日常生活を送っています。普通の人の様に「記憶」していけば脳がパンクしてしまうのです」

神裂が言わんとしている事はこうだ。

人間という生き物は本来「忘れる」生き物だ。そうする事で寿命を伸ばし続けている。だがインデックスは完全記憶能力によって「忘れる」という事が出来ない。ただでさえ常人の脳よりも遥かに少ない容量しかないのに「忘れる」事が出来ないインデックスが普通の生活を送るには記憶を消去する必要がある、という事だ。

「記憶の消去はきっかり一年周期で行ないます。リミットまで後三日です。早過ぎても遅過ぎても意味がありません」

当麻も大和も何も言わない。ただ黙って神裂の言葉を聞くだけだった。

「これで私達が彼女を追う理由がわかった筈です。お願いですから彼女を黙ってこちらに渡してください。彼女を救えるの私達だけなんです」

その言葉に当麻の怒りが爆発した。

「ふざけるなよ！！私達だけ救えるだど！！記憶を消す事が本当にあいつを救う事だと思ってるのかよ！！何勝手に諦めてるんだよ！！どうして他の道を探さ・・・」

「うるっせえんだよ、ど素人が！！」

「「！？」」

感情を剥き出しにした神裂はそのまま当麻に突っ込んで行く。当麻を守るため大和は直ぐに神裂を止めようとしたが神裂は急に大和の方を向き。

「七閃！！！」

既に切られた筈のワイヤーが大和に襲いかかる。まさかまだワイヤーがあるとは思ってもいなかった大和は完全に不意を突かれた。

(チツ！これはかわしきれねエぞ・・・)

直撃を受けた大和はその凄まじい威力で後ろに吹き飛び、ビルに激突する。

「大和！！！」

砂煙で大和の安否が確認出来ない。神裂は視線を外した当麻の脇腹に容赦なく蹴りを入れる。聖人の蹴りをまともに受けた当麻はそのまま2、3m程吹き飛んでしまった。

「グツ・・・!!」

神裂は脚力だけで3m程飛び上がると七天七刀の鞘で倒れている当麻の腕を潰す。

「何も、何も知らねえくせにほざいてんじゃねえぞ!! 私だって、私だって頑張ったんですよ!!」

叫びながら神裂は七天七刀の鞘を当麻に何度も何度も振り下ろす。

「どんなに彼女と親友になろうとも・・・結局は全て忘れてしまう。私達は・・・もう耐えられませんか。これ以上・・・彼女の笑顔を見る事は出来ません・・・」

「ふ、ざけんな・・・」

ボロボロになった当麻は七天七刀を掴みながら必死に言った。

その時、神裂に向かって凄まじいスピードで衝撃波が向かってくる。その余りに速いスピードに神裂は反応出来ず胸に直撃した。

「ガア!!!」

そのまま神裂は後ろに吹き飛ばす。肋骨が何本か折れただろうか。気を失いそうな痛みが神裂を襲うが何とか踏ん張る。

衝撃波が放たれた所を見ると砂煙の中何かが二つ光っている。

赤と青の光。

それは大和の瞳の色だった。

「テメエ・・・覚悟は出来てんだろオナア？」

大和は右手だけで神裂の両手ごと七天七刀を上^にに払うと両手で握り拳を作り、それを神裂向かい構える。

「これで終わりだ。あばよ、哀れなカス」

そして大和は呟いた。

「ろくおうがん
六王銃」

その瞬間、神裂に凄まじい衝撃が走る。余りの衝撃に神裂は声すらも出せなかった。

ドサツ、と神裂はその場に倒れ込んでしまう。

口から血が零れる。痛みで立ち上がる事が出来ない。意識が飛びそうになるが執念だけで何とか意識を繋ぎとめる。

大和は神裂から興味をなくしたのか既に当麻の所へ歩いていた。

「ま、待って下さい・・・」

今にも消えそうな声で大和を呼び止める。だが聞こえていないのか、それともワザとなのか大和は無視する。

「待って下さい!!--」

「なんだよ?」

大和は当麻を肩に担ぎながら面倒くさそうに神裂の方を振り向く。

「助けて下さい・・・。私にはもうどうすればいいのか・・・」

大和は助けるつもりなど毛頭ない、適当にあしらうつもりだったの

だが神裂の必死な表情を見て足を止める。

「……明日夜9時にここに来い。ヒントぐれエはくねてやるよ」

大和はそう言い残すと当麻を担ぎ歩き始めた。

思わぬ再会（前書き）

大和の能力の全容については後々明かす予定です。

お願いがあります。vs禁書目録戦で原作通り当麻の記憶を消すか否か悩んでいます。読者の皆様の意見や希望が聞きたいので感想にて返答をお願いします。

返答がなかったり少なかった場合は筆者が独断で決定します。

思わぬ再会

当麻を肩に担ぎながら大和は小萌先生の家を目指す。先生の家は以前大和が学校の届け物をした際、一度訪れた事があるので道順は知っている。

別に自分の家で当麻を治療してもよかつたのだが小萌先生の家ならインデックスと絹旗がいるかもしれないし自分がするよりも先生がした方がいいと思つたのだ。

大和はチラリと肩に担いでいる当麻を見る。

コイツはどこまでもお人好しでバカだ。突然現れた訳のわからない少女一人のためにここまでボロボロになるまで闘おうとするのだから。とても自分には真似出来ない事だ。なぜここまでして闘うのか昔からコイツはそうだった。誰かのためにいつも闘う、自分や帝督のように何か大きな力がある訳ではない。あるといえば右手の幻想殺し（イマジンプレイカー）ぐらいだ。異能の力には絶大な効果を持つそれも二人に比べれば微々たるモノだ。そんな事を考えている間に小萌先生の家に到着した。超の付くぐらいボロい二階建ての木造アパートで外に洗濯機が出ている。どうやら風呂はないようだ。前来た時もそうだったが本当にこんな所に住んでいるのかと思う。

（さて、先生の部屋は二階だったな）

階段を登るのが面倒だったので大和は脚力だけで二階に飛び上がる。大和は小萌先生の部屋の前に辿り着くとインターホンを鳴らす。

「はいはい、今開けますよー」

中から小萌先生の声がしてガチャ、っとドアが開く。

「あれ、大和ちゃんこんな時間にどうしたのですか？」

大和が小萌先生の質問に答えようとしたが中からドタドタ誰かが走って来る。

「やまと！！とーま！！」

「大和さん！！上条さん！！」

大和の予想通り、やはりインデックスと絹旗は先生の家に行った。

「上条ちゃん？って、上条ちゃんどうしたのですか！！その怪我！！」

大和の肩に担がれた当麻に気付いた小萌先生が叫んだ。何かと喧嘩っ早い当麻が怪我をしているのはよくある事だが流石にここまでの怪我は小萌先生も初めて見る。

「いろいろあつてな。先生に悪イが訳は聞かぬエでくれ」

大和は当麻を肩から降ろすと小萌先生に頭を下げる。

「じゃ後頼むぜ小萌先生、インデックス。後絹旗、何でデメエがここにいるかは今回は不問にしてやる。代わりに当麻の世話頼むぜ」

そう言うと大和はこの場から立ち去ろうとする。

「大和ちゃんはどこに行くのですか？」

「帰るんだよ。オレがすんのはここまでだ」

そう言うと大和は部屋から出て行った。

自宅に帰りながら大和は先程の戦闘後、神裂に言った事を思い出していた。

(何で『ヒントぐれエくれてやる』とか言ったんだろオナ……。あんなヤツ等なんざほっときゃアよかったのに)

事実大和は最初はそうつもりだった。だが大和は神裂が求めた救いの手を差し出した。親友の当麻を傷付けた憎い相手の筈なのに。

(・・・言ったもんはしゃアねエ。何とかしてやるか)

そう自分に言い聞かせ大和は自宅に帰って行った。

次の日の朝、大和はいつもより少し早く目が覚めた。壁に架かっている時計を見る。現在は午前9ちょうど、神裂との約束までちょうど12時間ある。

とりあえず朝食を摂るためにファミレスにでも行こうかと思ったその時大和の携帯が鳴った。ディスプレイを見るとそこには『垣根帝督』と映っていた。

(帝督から？こんな朝から何の用だ?)

垣根が朝なら電話してくるのは珍しい。どうしたのかと思ったがとりあえず電話に出る。

「帝督か？どうしたんだよ、こんな朝っぱらから」

「・・・大和、今日の夜空いてるか？」

突然の垣根の誘いに少し驚いたが神裂と会う以外は特に何もなかったので承諾する。

「そオだな・・・11時ぐれエなら大丈夫だぜ」

「・・・そうか、わかった。じゃあ11時に第十七学区の操車場な」

そう伝えると垣根は一方的に電話を切ってしまった。大和は違和感を感じた。いつも垣根が電話してくる時はニコニコしているのが電話越しにでもわかるぐらい明るい声で話してくる。だがさっきのはその真逆、沈んだ顔が電話越しにでもわかるぐらい暗い声だった。

（帝督のヤツ何かあったのか？やけに暗エ声だったな・・・）

この時大和はある事を完全に忘れていた。それは垣根が自分の秘密を知ってしまった事。

その頃、神裂とステイルとはあるビルの屋上から小萌先生のアパー

トを監視していた。昨日の戦闘で当麻がインデックスを連れて逃げ出さないようにするためだ。

「まさか僕ばかりか君までやられるとはね……。正直かなり驚いたよ」

神裂を見る事なく双眼鏡を覗きながらスタイルは言う。

「私も驚きですよ。まさか学園都市にあれ程の猛者がいるとは……」

「『完全聖人』か……。天使の力を完璧テレスマに操る人間。学園都市もとんでもないモノを飼っているね」

実際にその力を目の当たりにした二人だからこそわかる。アレは最早人間の域を超えている、教会の人間がこんな事言うのはどうかと思っただがもし『神』というのが本当に存在するならアレは限りなくソレに近いモノだろう。

「ところで神裂、君は本当に今夜彼と会うのかい？」

神裂から大和との約束の事を聞いていたスタイルは神裂に尋ねる。

「もちろん会うつもりです。ようやく見つけた手掛かりです。会わない理由がありません」

「だが畏かもしれないんだぞ。僕と君を二人まとめて始末するため……」

スタイルは今まで何度となく経験している。インデックスを助ける

ためだと言ってくる輩は最後には必ず自分達を裏切る。だから今回も警戒しているのだ。もちろん神裂も同じ気持ちの筈だ。

「・・・確かに貴方の言う通り畏かもしれません。ですが今は、例え畏であつても少しでも彼女を救える可能性があるなら・・・私はそれに賭けてみたい」

そう言った神裂の表情は強い決意と想いが秘められていた。

「ステイル、貴方は残ってくれても構いませんよ。私一人で行きますから」

神裂がそう言うとステイルはやれやれといった表情で言った。

「僕だけ除け者にする気かい？僕だって気持ちは君と同じだよ」

大和は今すぐ後悔していた。彼が今いるのは朝食を摂るために来店したファミレスのとある一席。大和の隣と正面には前の強盗事件で知り合った御坂美琴と初春飾利、その隣には彼女の同級生だろうか初春と同じ柵中の制服を着た少女が座っている。なぜ彼女達がいるのかと言うとそれは少し前に遡る・・・。

垣根との電話が終わった後、大和は直ぐに服を着替えファミレスに向かった。いつもなら近道として利用している路地裏に直行するのだがなぜか今日に限って普通の道を通っていた。しばらくして大和

が交差点で信号待ちをしていると後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

振り返るな、無視しろ

直感でそう判断した大和は振り返る事なく聞こえていないフリをする。だが声の主が大和に気付いたようで大和の名前を呼んでいる。なおも大和は無視をする。声の主は聞こえていないと思ったのか更に大きな声で大和を呼ぶ。だが大和は無視し続ける。声の主もようやく自分が無視されていると気付いたのか「無視すんなやゴラアアア！！」と怒声を放った。これ以上無視すれば次は怒声と共に電撃が飛んで来ると思った大和は面倒くさそうに後ろを振り返る。振り返った先にはキツとこちらを睨みながら走って来る御坂美琴とその後ろからトコトコと着いて来る初春飾利と見知らぬ少女がいた。

「ちよつとアンタ！何で無視すんのよ！」

大和に辿り着くなり怒声を浴びせる美琴。大和はうんざりとした表情で面倒くさそうに答えた。

「ああ？だつてテメエと絡むと碌な事ねエだろオが」

「碌な事つて、まだ会うの二回目じゃない！」

「前のだけで十分だつての。また勝負しろとか言われたらたまんねエからな」

「なっ！アンタは私がそんな戦闘狂にでも見えるつての！？」

「当麻のヤツに会った時に電撃ブチかましてんだろ。立派な戦闘狂だろオが」

ガヤガヤと口喧嘩をしている間に初春達が二人に追い付いた。

「大和さん！お久しぶりです！あの事件以来ですね！」

目をキラキラさせながら初春は大和に言った。

「別に久しぶりって程でもねエだろ……。ん？初春、後ろにいるヤツはテメエの同級生か？」

大和は視線だけで初春の後ろにいる少女を指す。いきなり大和に見られた（ほとんど睨んだ）少女は初春の後ろに隠れる様に縮こまる。

「佐天さん！『あの』大和さんですよ。以前私が話した……」

それを聞いた瞬間、佐天と呼ばれた少女は初春の背中から出て来た。

「あ、あなたが大和さんですか……？」

何か神様でも見たかのような表情で少女は大和に尋ねた。一体あの花瓶はコイツに何吹き込んだんだと思ったがとりあえず少女に返事をする。

「ああそうだけど……。オレは大和、神鬼大和だ」

大和の返事を聞いた瞬間、少女はいきなり大和の右手を両手でガシツと握手すると初春同様に目をキラキラさせながら興奮気味に自己紹介し始める。

「私、佐天涙子、っていいいます！！初春の親友してます！！」

心底どうでもいい情報を教えられた大和はとりあえずふーんだけ言
って頷いた。

「大和さんって柵中の卒業生なんですよね！すごいなあ飛び級で卒
業だなんて」

「そんないいもんじゃねエよ。周りから白い目で見られるだけだぜ
？」

「それですごいですよ！それにレベル0なのに強盗捕まえたり、御
坂さん倒したりしたんですよ？私と同じレベル0とは思えないで
すよ！」

余計な事ペラペラと喋りやがって、つという意味を込めて初春を睨
みつけたが初春はどこ吹く風と言わんばかりに佐天の方を向いてい
た。

「随分とレベル0ってところを強調するな」

「いえ、私も同じレベル0なんですすごいなあと思って・・・」

大和が怒ったと思ったのか佐天は慌てて大和に言った。すると先程
とは打って変わって真剣な表情で佐天が大和に尋ねた。

「大和さんは能力に憧れとかはありますか？」

憧れもなにも大和はレベル5、それも学園都市最強の。イマイチ佐
天の質問の答えがわからなかったがもし自分に能力がなかったらと
想像して答えた。

「別にねエな。んなもん一度たりとも抱いた記憶はねエ」

「どうしてですか？学園都市に来たからには能力が欲しくないんですか？」

「別にいらねエだろ」

大和ははつきりと答えた。レベル5の自分が言ったところで全く説得力がないが……。そんな事は知らない佐天は驚いた顔をしている。

「別に能力だけが全てじゃねエだろ。能力なんざなくたってこの街で生きていける。能力が全てだなんて上の連中が勝手にほざいてるだけだろ」

更に大和は続ける。

「大事なのは今自分が何が出来るか、って事だろ。自分にしか出来ねエ事を精一杯やる。それが一番大事な事だと思うけどなア」

似合わねエなアと思ったが佐天の心には深く響いたようでまた明るい笑顔に戻ると、そうですよね！と言った。

「ところで大和さんは何してるんですか？」

初春が大和に尋ねる。

「ファミレス行くんだよ。朝飯がまだだからな」

答えてから大和はしまったといった表情をする。美琴はともかく、

初春と佐天なら必ず着いて行くと言ったからだ。

「私達も一緒にいいですか！」

案の定、佐天が食らいついた。即効で拒否するつもりだったが佐天のキラキラした目と満更でもない美琴と初春の表情を見ると断るうにも断れなかった。

「・・・勝手にしろ」

「やったー！！」

大和の承諾を聞くと佐天は意気揚々と交差点を渡り始めた。初春も慌ててそれに続く。大和も溜息を吐くと交差点を渡ろうとしたがちよつとアンタと美琴に呼び止められた。

「なんだよ」

「実は佐天さんの事だね・・・」

美琴はいつになく真剣な表情をする。

「アイツがどオカしたのかよ？」

「アンタ『幻想御手』（レベルアップ）って知ってる？」

「いや、知らねエな。何だよそれ？」

美琴が言うには何でもその幻想御手レベルアップとやらは音楽のようなモノで、それを聴くだけで能力のレベルが上がるモノらしい。

「ふーん、でその幻想御手レベルアップが佐天と何か関係あんのか？」

「実は佐天さん……幻想御手レベルアップの副作用で昨日まで昏睡状態だったの。事件自体は昨日解決したんだけどね」

「おいおい……それ大丈夫なのかよ。昨日目エ覚めたばかりなのに外出歩いて」

「身体の方は大丈夫みたい。だけど……心理的に佐天さんが立ち直っているかはわからない。今日だってリフレッシュを兼ねての外出なの」

さっきの佐天の質問の意図がようやくわかった。恐らく佐天は能力というモノに強い憧れを持っている。だから幻想御手レベルアップとかいう如何にも胡散臭いモノまで使って能力を手に入れようとしたのだろう。先程の質問は同じレベル0として大和の意見が聞きたかったのだろう。

「何でオレにそんな事話したんだ？んな事普通は黙っとくもんだろオが」

大和と佐天は今日が初対面だ。普通ならそんな人物に話すような内容ではない。

「私にもわからないわ。でも……アンタになら話してもいい気がしたの」

そう言うと美琴は佐天達の後を追う。

アンタになら話してもいい気がした、か……。

大和は美琴の後に続きながら美琴に言われた事について考えていた。
(何勘違いしてるか知らねエけどよオ・・・オレはテメエが思ってるようなヤツじゃねエよ)

自分はこの街の闇の頂点に君臨する者・・・美琴達が思っているような人間ではない。

大和はそう自分に言い聞かせた。

そして今に至る。世間話に花を咲かせる三人とは対照的に大和はうんざりとした表情で外を眺めている。
帰りたい。

これが今の大和の心情だった。すると大和はふとある事が気になった。

「おい美琴、その幻想御手事件レヘルアップとやらはどう解決したんだ？」

まさかそれをここで聞いてくるとは思ってたなかった美琴は飲んでいた水を盛大に吹き溢すと大和を睨む。

「何で今聞くのよ！佐天さんだって・・・」

「いいんですよ。御坂さん」

美琴の言葉に重なるように佐天が言う。

「私だっていつまでもそれから逃げていたらダメだから・・・。それに私も眠っている間何があったのか気になります！」

大和は正直事件の事などどうでもよかった。後で暗部の権限を使え

ばいくらでも調べられるからだ。この場に幻想御手レベルアップバーの事を持ち出したのは佐天が自分のした事とちゃんと向き合っているか確かめるためだ。少し荒療治かとは思ったがこの方法が一番いいと判断したのだ。

「わかったわ。話すわよ。佐天さんが眠った後・・・」

美琴は事件について話し始めた。

佐天は真剣な表情で聞いているが大和は聞いているフリをして適当に聞き流す。だがしばらくして大和は美琴の言ったある人物の名前に反応した。

「おい、今何て言った」

「えっ？幻想御手レベルアップバーを造ったのは木山春生きやまはるみで・・・」

「木山だと・・・」

大和は驚いた表情をした。さっぱり意味のわからない三人はキョトンとした顔で大和を見る。

「大和さん、木山先生の事知ってるんですか？」

初春が気になって尋ねるが大和は直ぐに否定した。

「いや・・・何でもねエ」

美琴は首を傾げたがまた続きを話し始めた。

美琴の話聞いていていつのまにか時間はお昼を迎えていた。

大和はある事を確かめるために席を立つ。

「あれ？大和さんどこ行くんですか？」

佐天が大和に尋ねる。

「ちょっと用事あるんだよ。悪イけど先に帰るわ」

大和はポケットなら財布を出すと中から一万円札を取り出し伝票に挟んだ。

「四人分の支払いとテメエ等の昼飯代だ。その様子だとまだここに
いるつもりだろ？釣りはいらねエから好きなもん頼みな」

そう言うと大和は席から立ち去ろうとするが初春に呼び止められた。

「大和さん、連絡先教えてもらってもいいですか？」

初春が携帯を構えて大和の返答を待っている。佐天も美琴も同じように携帯を構えていた。

大和は携帯を取り出すと赤外線で初春に自分の連絡先を送る。後の二人には初春から送るように頼むと今度こそ大和はファミレスから出て行った。

大和が今いるのは警備員アンチスキルの留置場の前だ。ここは学園都市の中でも
重犯罪を犯した者ばかりが収監されている第四留置場で呼ばれてい

る所だ。大和はここである人物と面会する予定となっている。中に入ると大和は『面会希望者受付』と書かれている看板を見つけ受付に話しかける。

「予約した神鬼大和だ」

「お待ちしておりました、神鬼大和さん。直ぐに案内します」

受付は立ち上がると大和に着いて来るよう言う。大和は受付の後に続いた。

「それにしても驚きました。まさか学生でしたとは」

しばらく歩くと受付が大和に話しかける。

「バカにしてんのか」

「いえとんでもない。統括理事会の調査団の代表と聞いていたものですからもつとご年配の方が来るものだと思っていました」

大和は今回、統括理事会の調査団の代表という偽名を使っている。そうでもしなければ面会希望など出来ないからだ。

「今回はやはり『あの事件』の事で・・・？」

「ああ『アレ』に関しては上層部もかなり問題視してるいる。見方を変えりゃアかなり大規模なサイバーテロだからな」

「見方を変えればそうですね。こちらです」

大和が案内されたのは第六面会室、中にはポツリと小さな椅子が置かれていた。いかにもドラマとかに出てきそうな面会室だなど大和は思った。

「それでは少しお待ち下さい。直ぐに係りの者が収監者をお連れします」

そう言い残して受付は部屋から出て行った。受付が部屋から出たのを確認すると大和はキョロキョロと中を確認する。

（確認出来る監視カメラは全部で四つか。だが・・・）

大和は一度目を閉じるとゆっくり開く。大和は千里眼を発動する。なぜ大和が千里眼が使えるのかはここでは伏せておくが。

千里眼で再び部屋を見回すと大和の予想通り見えないように配置された五つの隠しカメラに二つのキャパシティーダウンが確認出来た。

（流石に第四留置場ともなると監視レベルが段違いだな。まさかキャパシティーダウンまで用意してやがるとは）

大和は千里眼を解くと部屋全体にある力を行使する。

（これで準備は完了だ。後はヤツが来るのを待つだけだな）

何かの準備が完了した大和はドツツと椅子に座った。しばらくして大和のお待ちかねの人物が部屋の長机に設置されて透明の壁の向こうに現れた。

「面会希望者がいるとは聞いていたが・・・まさか子供だったとは」

「……久しぶりだなア先生」

「久しぶり？はて……私と君はどこかで会った事があるのか？」
壁の向こうの人物はうーんと唸った。

「先生エ……オレの事覚えていねエのか？」

「覚えていないも何も私と君は会うのは初めてだと思っが……」

「それはこの眼を見ても言えるかア？」

大和は壁に自分の顔を少し近付けた。昼間だと言っのに部屋は少し暗い。そのせいか大和の左右色の違う瞳はかなり目立った。

大和の顔、いや正確なら彼の眼を見て収監者は椅子から転げ落ちた。

「思い出してくれたみてエだなア……」

「な、なぜ君が……なぜ君がここにいるんだ……？」

椅子から転げ落ちた収監者はまるで化け物でも見たかのような目で大和を見る。

「オレがくれてやった命は無駄にはしてねエみてエだなア。木山春生先生エ」

大和はニヤリと歪んだ笑みを浮かべながら木山を見下ろした。

『シーズン』（前書き）

今回はアポリオンさんのオリキャラ、岩見祥吾が登場します！

『シーズン』

大和は椅子に踏ん反りながら床に転げ落ちている木山を見下ろす。

「相変わらずアンタは無茶するヤツだな。統括理事会の連中に直接抗議したかと思えば次は幻想御手レベルアップか……。ただのバカなんだか命知らずなんだかわかんねエよ」

「どうして私がここにいるとわかった……。？」

「美琴のヤツによオテメエが警備員アンチスキルに捕まったって聞いたんでな、あれだけの事やらかせば当然ここにブチ込まれてると思っただよ」

美琴という名前が大和の口から出た事に木山は表情を更に険悪なものにする。

「そう怖エ面すんなよ。美琴にオレの事は知られちゃいねエよ」

「当たり前だ……。君の正体を知った時の彼女の反応が見ものだな」

大和ははあーと溜息を点いた。

「そんなにオレの事が気に食わねエか？まだあん時の事怒ってんのか？」

「当たり前だ！あれだけの事をしておいて何も感じないのか！」

木山は声を荒上げる。

「落ち着けつての。いい大人が怒鳴るなつて。みつともねエぜ」

一回り年下の大和に指摘されたのが悔しいのか木山は顔をしかめた。

「しゃアねエだろ。オレだって好き好んでやった訳じゃねエ。仕事だったんだよ」

「仕事だと！君は仕事の為なら子供でも手に掛けるのか！」

木山はまた声を荒上げた。今度は大和は溜息を吐くのではなく鋭い目で木山を睨み付ける。

「何バカみてエに吠えてんだア？テメエもオレと同じだろオガ」

「私が君と同じだと・・・？」

「同じだろオガ。目的を果たす為なら手段を選ばない、テメエもそうやって関係のねエヤツ等を巻き込んだんじゃねエのかア？」

その言葉に木山はたじろぐ。だが大和は更に追い討ちを掛ける様に続ける。

「それとも何かア？殺しさえしなけりや何でも許されんのか？随分と都合の良い話もあつたもんだな」

木山は何も言い返せなかった。大和の言う通り目的の為に関係のない人を巻き込んだのは紛れもない事実だ。

「だからテメエにオレを弾教する資格なんざねエんだよ。所詮オレもテメエも同じ人間、目的の為なら手段を選ばない最悪のクソ野郎なんだよ」

木山はただ黙って大和の言葉を聞いているだけだった。その表情は完全に沈みきっている。

「私には・・・あの子達を助ける資格もないという事なのか・・・」

「・・・いや、そりゃアまた別の話だ。逆にアイツ等はテメエにしか助ける資格はねエ」

木山はえっ？つと言って顔を上げる。大和は椅子から立ち上がる。

「幻想御手レベルアップを作った目的は美琴のヤツから聞いた。今日ここに来たのはその為だ」

「ど、どういう事だ？」

大和は自分と木山を遮る透明の壁に手を触れると静かに言った。

「つまりこういう事だ」

その瞬間、透明の壁はまるでテレポートでもした様にパツと消えてしまった。

驚きの表情を見せる木山の手を大和は掴む。

「流石に正面突破はキツいからな。テレポートで外に出んぞ」

演算を始める大和に木山は声を掛けた。

「き、君はいつたい・・・何者なんだ？」

「ただの普通の高校生だ」

全ての物事には必ず「表」と「裏」が存在する。学園都市も例外ではなく決して表沙汰には出来ない「裏」の部分というものが存在する。そういつた「裏」の部分を一手に引き受け「表」の世界を守る為に活動している小組織、俗に「暗部」と呼ばれている組織だ。

現在学園都市には五つの暗部組織が確認されている。

垣根がリーダーを務める「スクール」、麦野や浜面が所属する「アイテム」、そして「グループ」「ブロック」「メンバー」の計五つだ。組織としての活動方針は各々で異なるが結果としては「表」の世界を守る事に直結している。

だが学園都市にはもう一つ、統括理事会の一部の人間しかその存在を知らないと言われている暗部組織が存在する。学園都市の闇の最深部に君臨するその組織の名は「シーズン」、またの名を「最暗部」。

『シーズン』の活動方針は大きく分けて三つある。一つ目は学園都市の『憂い』を払う事、二つ目は機密情報の管理、隠蔽など、そして三つ目は他の暗部組織の監視、暴走した際の鎮圧。

『シーズン』は『ブロック』と同様にアレイスターの直属だが信頼度の高さは『ブロック』を遙かに上回る。

話は変わり、ここは第三学区にある高級ホテル最上階のプライベートルーム。一泊数十万円する超高級な一室に四人の男女がいた。彼等はみな『シーズン』の構成員でこの一室は彼等が隠れ家として貸し切っているのだ。

「大和のヤツ・・・また面倒な事しやがって」

ダボダボの黒いシャツにジーパンとこの一室に余りにも不釣り合いな格好している少年がこの場にはいない五人の構成員の大和の愚痴を漏らす。

「今度は何をしでかしたんですか？」

全身を高そうな衣服に身を包んだ少女が少年に尋ねる。

「第四留置場から女を一人脱獄させたらしいぜ。しかもそいつはあの木山春生らしい」

少年の代わりに科学者だろうか、白衣を着た青年が答える。

「・・・大和さんって結構無茶なさる方なんですな」

「甘えぜ慈雨。脱獄なんざアイツからみりゃあまだまだマシな方だ」

ジーパンの少年、柎夜野透しゅやのしゅあはうんざりとした表情をしながら言う。

「そうなんですか？」

「柘夜野の言う通りだ。大和のやる事は大概俺達の予想の斜め上を
ブチ抜く。脱獄程度何の造作もないだろう」

白衣の青年、岩見祥吾は言う。

「まあ新入りのオマエはまだ大和の事よく知らねえだろうからな。
そのうちわかってくるぜ」

柘夜野の言葉に神野慈雨は頷いた。

「そろそろ『元締め』から仕事の話がくるわよ。大和の事はまた後
よ」

胸元が大きく開いた妖艶な格好をしている女性、『シーズン』のリ
ーダー小野寺朱雀は手をパンパンと叩きながら言う。

「仕事かあゝ、つか今回は何の仕事だよ？珍しくオレに下調べの注
文がなかったからな」

柘夜野の『シーズン』における役割は主に情報収集だ。『裏社会一』
とも言われる幅広いパイプを持つ柘夜野の情報収集力は仕事の完遂
率トップを誇る『シーズン』になくはならない要素だ。

「私も知らないわ。招集が掛かったのも突然だしね」

「今回のような緊急招集はよく事なんですか？」

「そう何度も緊急事態があつてたまるか」

慈雨の問いに祥吾は答える。

とその時、プライベートルームの巨大な液晶モニターの電源が一人で起動した。画面には大きく『バツ』が映し出されている。

『はい！みんなあゝ！集まつてるかなあゝ？』

高級感漂う雰囲気をブチ壊す甘ったるい声がプライベートルームに響く。この甘ったるい声の主は『シーズン』の事実上の上司である通称『元締め』だ。事実上と言つたのは彼等は他の暗部とは違い明確な直轄を持たない為だ。条件とギャラ次第で殺しから護衛、破壊活動とほぼ何でも引き受ける『シーズン』への依頼は全てこの『元締め』を通じて構成員に伝えられる。もちろん内容が学園都市への反逆らしき仕事なら依頼人ごと抹殺するのだが。ギャラを貰つてから・・・。

「大和は来てないわよ」

朱雀は大和の不在を知らせる。

『また大和ちゃんは来てないの！？あの子は一番のお気に入りなのに・・・』

本気で残念がつている沈んだ声で『元締め』は言う。

「オマエに気に入られたら来たくもなくなる訳だ」

『ちよつと透ちゃん！それ、どつという意味かしら！？』

薄い笑みを浮かべながら暴言を吐く柊夜野に『元締め』は若干本気で怒鳴り付ける。

「茶番はいい。そのままの意味だーで、内容は？」

『茶番、って・・・相変わらず毒舌なのね祥吾ちゃんは・・・。じやあお仕事の話するわよ』

『元締め』の言葉にプライベートルームの空気が一気に引き締まる。

『今回のお仕事は大和ちゃんに関係する内容なのよ』

大和の名が出た事に全員に若干の驚きが走る。

「まさか大和のヤツを殺せと言っくんじゃねえだろうな？」

『そんな事ある訳ないでしょ！大和ちゃんを殺すなんてあり得ないわ！』

「じゃあ何なんだ？」

『言い方が不味かったわね……。関係するじゃなくて正しくは関係しなかった、かしら？』

「はつきり言え」

祥吾がイライラしながら言う。

『みんなは木山春生って女知ってる？』

「先日の幻想御手事件レベルアップの犯人でしたよね？確か大和さんが脱獄させた」

『あら？みんなその事知ってるの？なら話が早いわね。実はその木山春生って女、前々から結構統括理事会とかにちよっかい出していたらしくてね。今回の事件で堪忍袋の緒が切れたみたい』

「木山の始末ぐらい召集掛けるまでもないだろうが」

祥吾は画面を睨みながら呟く。すると『元締め』は言う。

『違うわ。あなた達にやってもらうのはその逆、木山春生の保護よ』

「どづいつ事かしら？」

朱雀は『元締め』に尋ねる。

『統括理事会の中には彼女の事を高く評価する者もいてね、殺すには惜しい人材みたい。十中八九彼女を闇に引きずり込むと思うけど。あなた達の仕事は彼女を狙うヤツ等から彼女を守る事』

「木山を狙ってるのはどこのヤツ等かしら？」

『アイテムよ』

「『アイテム』って確か第四位がいるところか？」

柊夜野が念のため確認を取る。

『ええ、学園都市の第四位、「原子崩し」（メルトダウン）のこ
と麦野沈理がリーダーしてる組織よ』

「いいのか？オレ達が相手となるとレベル5が一人消える事になん
ぜ？」

『殺したらダメよ』

「えっ？殺さないんですか？」

慈雨は思はず聞き返す。

通常暗部の仕事において生かして帰すという事はほとんどない。特
に『シーズン』ともなればまずあり得ない事だ。

『依頼人からそう指示されたのよ。やっぱりレベル5は大事みたい』

慈雨達はどうも納得いかない表情を浮かべていたがこれ以上言っ
ても仕方ないので無理矢理納得する。

『お仕事の話はこれでおしまい！大和ちゃんにもちゃんと伝えてね
！じゃ成功祈ってるわ！』

『元締め』がそう言うと液晶モニターの電源が落ちる。それを確認すると朱雀はゆっくりと立ち上がる。

「各々意見があるでしょうけどギヤラもかなり良いし黙ってやるりましよ。それに・・・レベル5がいる暗部相手とやり合えるなんて滅多にない機会よ」

それを聞いて残りの構成員もゆっくりと立ち上がる。

「さて、どうしますこれから。とりあえず大和さんに知らせますか？」

「いや、知らせる必要はねえ。『アイテム』如きアイツの手を借りるまでもねえよ」

「終夜野の言う通りだ。俺達だけでも十分お釣りが来る程度の相手だからな」

どうやら二人には大和を頼る気は全くない様だ。慈雨は朱雀をチラツと見るがどうやら彼女もその気である様だ。まあ慈雨も大和を頼る気は全くないが。

「どうする朱雀？相手から出向いてくれるのを待つのか？」

祥吾は朱雀に今後の方針を確認する。

「いや、待つのは面倒よ。こっちから出向いた方が早いし『アイテム』にも脅威になる筈よ。それにアイツ等はあー見えて仕事が早いからね」

そう言つて朱雀はクルリと柊夜野の方を向き視線だけで指示を送る。それを受け取つた柊夜野はコクンと頷くとゆっくりと目を閉じる。

「検索対象は『原子崩し』でいいんだな？」

「一応『アイテム』全員で頼むわ。もしかしたらバラバラに行動してるかもしれないしね」

柊夜野は了解と言つて目をゆっくりと開く。目を開いた柊夜野の瞳は血で染められたかの様に赤く変色していた。

「見つけたぜ、『原子崩し』（メルトダウン）はここから15km程離れた所にいる。ラッキーな事にメンバー全員と一緒にだ」

それを聞くと朱雀はニヤリと口元を歪ませた。

『アイテム』の四人はワゴン車の中にいた。上司である『電話の女』から突然の招集が掛かったからだ。

「ターゲットが逃げ出した？」

麦野は思わず聞き返す。

「結局、それってどういう訳よ？」

麦野に続いてフレンドが『電話の女』に尋ねる。

『私だって知らないわよ！さっき依頼人から知らされてビックリしたわよ！』

逆ギレの様に怒鳴りる『電話の女』に麦野は若干イラっとする。

「どうやって逃げ出したんだよ？あの女がブチ込まれてたのは第四留置場だろ」

乱暴な口調で麦野は『電話の女』に尋ねる。

『だから知らない、っての！知ってたらとつくに言ってるわよ！』

麦野が何か言おうとした時、突然運転席から悲鳴が聞こえた。何事かと思ひ浜面が引き戸を開け確認する。

「おいおい・・・何だよ、これ・・・」

運転席に座っていた下部組織の二人の首はキレイに切断されていた。首を切断された胴体から留まる事なく血が噴き出しており運転席は血で真っ赤に染まっていた。

「はまづら、どうしたの・・・？」

後ろからヒョコつと顔を出した滝壺は運転席の惨劇を見て凍り付いた。あまりに残酷な光景に顔から冷汗が流れている。

浜面が滝壺の顔を覆おうとした時、ふとワゴン車の前方に誰かがこちらを見て立っているのが見えた。

黒ビジネススーツを身に纏い左目に白い眼帯をしているその男はまっすぐとこちらを見ている。問題だったのはその男が引き裂く様な笑みを浮かべている事、そして右手に血で染まった西洋刀を握っていた事だ。

アレは、やばい

直感でそう思った浜面は後ろにいる麦野とフレンダに叫んだ。

「お前等、早くクルマから降りろ！！」

浜面が叫んだのと同時にビジネススーツの男は西洋刀を上に掲げると勢い良く振り下ろした。

信じられない事に振り下ろされた西洋刀は刀身がワゴン車まで伸びていきそのまま縦半分に叩き斬った。

半分に切断されたワゴン車はバチバチと火花を散らすと爆発する。麦野とフレンダは何とか無傷で脱出したが滝壺を庇った浜面は無傷とはいかず爆発で飛び散ったワゴン車の破片が背中に直撃する。

「おおー、かっこいいねえ。依頼じゃなかったら殺してるな」

ビジネススーツの男、『シーズン』の構成員の一人岩見祥吾は軽く拍手をしながら言う。

「はまづら！！しっかりして！！はまづら！！」

滝壺が必死に叫びながら浜面の身体を揺するが返事はない。

「殺すなって言われてるし、一応手加減してるぜ」

それを聞いて少し安心したのか安堵の表情を浮かべる滝壺。そして祥吾の顔を見上げるとキツと睨み付ける。

「どうしてもはまづらを傷付けた？どうしてこんな事するの？」

「蚊やハエを殺すのに『イライラした』以外の理由があるのか？『アイテム』の滝壺理后」

自分の所属する組織の名が出た事に滝壺は警戒心を強める。とその時滝壺の後方から青白いビームの様な物が祥吾に襲いかかる。かなりのスピードだったが祥吾は難なくそれを躲す。

「自分の能力も制御出来ないんじゃない手段選んでる余裕はないわな」

余裕の笑みを浮かべながら祥吾は言う。視線の先には鬼の形相で睨んでいる麦野と手に爆弾を持つフレンチがいた。

「私を第四位（レベル5）と知って襲ったア随分と命知らずクソ野郎みてエだなア」

麦野の手が淡く発光し始める。

「依頼だからな。お互い様だろう？」

祥吾は西洋刀を構える。だがその構えにはまだどこか余裕を感じる。

「ふざけやがって・・・！テメエはここでブチコロシ確定だコラ」

「殺生禁止ってかなり疲れない？」

その瞬間、麦野の手から原子崩し（メルトダウン）が放たれる。祥吾は横に躲し反撃に移ろうとするがそこにフレンドが爆弾を投げ付ける。

だが爆弾は祥吾に当たることなく空中で爆散した。突然横から飛んで来た白いビームの様な物に貫かれたからだ。

「残念ですけどあなたの相手はこの私ですよ」

フレンドと麦野は声のした方を振り向く。そこには身体の周りに八面の立方体を二つ展開している神野慈雨が薄い笑みを浮かべていた。

「この担当は俺一人だった筈だけど？」

「朱雀さんに言われたんですよ。レベル5相手にやり合える機会なんてそうないから、って」

（まあ、面倒事が減っていいか）

祥吾は心の中で朱雀に少し感謝する。

「了解ーーーじゃ代わりに俺は爆弾娘の相手するわ」

麦野は祥吾に向かって原子崩し（メルトダウン）を放つが慈雨がそれを防ぐ。

「邪魔してんじゃねエぞ小娘が！テメエからオブジェに変えてやるオカア！」

「あなたの相手は私ですよ。せめて三分は保って下さいね」

「小便是済ませたか？死神にお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする心の準備はOK？」

「・・・これって結構ヤバイ感じ？」

『アイテム』と『シーズン』 学園都市の暗部組織同士の闘いが始まった。

麦野沈利 vs 神野慈雨

柊夜野と朱雀はビルの屋上から戦闘の様子を観察していた。

「始まったみたいだな」

胡坐をかきながら膝に肘をついてる柊夜野が呟いた。

するとそう遠くない所から爆発音が聞こえた。それと共に青白い光が一瞬だった。だが確かに光ったのも確認する。

「慈雨のヤツ、派手にやってやがるな。少しぐらい自重、ってもんじゃないのかねえ」

「あの能力で自重しろ、って言うのは無理があるわよ。まあ私も言えた義理じゃないけどね」

柊夜野は横目で朱雀を見ながら言う。

「オマエや慈雨のヤツを見てると本当にオレ達は暗部なのか、って思う時があるぜ」

「どつという意味かしら」

「暗部ってのはもう少し隠密に行動する、ってイメージがあるからな。オマエにしる慈雨にしる持っている能力は隠密からかけ離れたもんだ。傍から見ればオレ達は暗部ってより戦争屋だぜ」

柊夜野の言葉に朱雀は確かにね、と言って頷いた。

柊夜野は再び戦闘に目を向けると溜息を吐く。

「にしてもヤル気のでねえ仕事だな。適当に痛めつけるだけならオレ達じゃなくてもよかつただろ……」

「相手は一応レベル5よ。依頼主も念には念をいれた、ってところでしょ」

まあ知らないけど、と朱雀は付け足した。

「結局大和のヤツには知らせてねえのか？」

「知らせる必要ないでしょ。大和をぶつける程の相手じゃないしね」

まあ確かにな、と柊夜野は心の中で呟いた。大和は曲者揃いの『シリーズン』においても群を抜く存在だ。第四位ごときを相手にするにはかなり役不足だ。

「さて、アイツ等は何分保つやら」

ニヤリと口元を歪ませながら柊夜野は言った。

爆発による煙の中で二人の能力者がお互いを睨み合っていた。

一人は学園都市の第四位で『アイテム』のリーダーである麦野沈利、もう一人は『シリーズン』の構成員の神野慈雨だ。麦野の手は淡く発光しており、慈雨の周囲には4つの正八面体がフワフワと滞空して

いる。

「一体何者だ、テメエら」

重苦しい沈黙を破ったのは麦野だった。

「名乗る必要がありますか？」

慈雨は表情一つ崩す事なく答える。

「さつさと答えるクソガキが。風通しの良い死体にしてやるオカ！」

泣く子も黙るであろう麦野の形相にも慈雨は全く動じない。やれやれ、と溜息を吐くと慈雨は言った。

「いずれわかる事ですから特別に教えてあげますよ。私達はあなた達の同業者ですよ麦野沈利さん」

「同業者だと・・・！」

「はい。私の所属する組織は『シーズン』通称『暗部を見張る暗部』理事長さんからは『最暗部』と呼ばれています」

「暗部組織のリーダーとして麦野は他の組織の事は大体は把握している。だが『シーズン』という名は聞いた事もないしましてや『暗部を見張る暗部』など信じられなかった。」

「あなたが知らないのは当然ですよ。何せ私達の事は統括理事会ですら一部の人が知らない存在。あなた達ごときが知る筈もあり

ません」

慈雨はスラスラと秘密事項を暴露する。殺さずに済ませるならどのみち自分達の素性はバレると思ったからだ。

（私達の行動が統括理事会に睨まれたのか！？いや、そんな筈はねエ！上の連中から警告なんて一度もー！）

「心配しないで下さいな。あなたが統括理事会に睨まれた訳ではありませんので」

麦野の考えを見切ったかの様に慈雨は言った。

「詳細は言えませんが私たちの仕事はあなた達の妨害をする事。ですから殺しはしませんよ。半殺しにはなるかもしれませんがね」

今更とは思ったが一応木山の事は伏せておく。

「小娘が……！！黙って聞いてりゃあ調子に乗りやがって……！！」

完全に上から目線の慈雨に激しい怒りを覚える麦野。対照的に慈雨は涼しい顔をしている。そしてサラリと言い放つ。

「せめて三分は保って下さいよ。オバさん」

ブチッ

その一言が麦野の怒りを殺意に飛翔させた。

「調子に乗ってんじゃねエぞ……！！クソガキがアアアああッ……！！」

激しい殺意と怒りを露わにしながら原子崩しを放つ。すると慈雨の周囲に浮かんでいた正八面体のプリズムから青白い光線が発射され原子崩しを防いだ。

「なっ！！」

驚愕の表情と共に麦野は目を見張る。

（私の原子崩しを防いだだと！？有り得ねえ！！そんな芸当第一位や垣根でもねえ限り出来る筈が！！）

慈雨は四つのプリズムを横一線に並べる。そしてプリズムから青白い光線が麦野に目掛けて放たれる。

麦野は素早く光線を躲すと再び原子崩しを放つ。だがやはりプリズムからの光線に完全に防がれる。

（何なんだよ！！あの能力は！！私の原子崩しを完全に防ぐ能力なんて聞いた事ねえぞ！！）

麦野の考えとは他所に慈雨は余裕の表情を浮かべている。

「その感じじゃあ私の能力の事が気になるみたいですね」

慈雨はプリズムの一つに触れる。

慈雨の言葉を無視して麦野は打開策を考える。

（あの光線・・・見た感じじゃあ私の原子崩しに近い能力みたいねならば・・・！）

麦野は懐から何やら板の様な物を取り出す。麦野が取り出したのは
拡散支援半導体シリコンバーンと呼ばれる物で性質上原子崩しの連射出来ないとい
う弱点を補う為の道具だ。

麦野は拡散支援半導体シリコンバーンを二枚投げるとそれに向かって原子崩しを放
つ。放たれた二本の白い光は拡散支援半導体シリコンバーンに直撃し四方八方に拡
散する。

「なるほど、手数で攻める気ですか。良い考えですね」

ですが、と慈雨は付け加えて、

「その程度じゃ私の『使徒砲撃』（ラミエル）は超えられません」

バラバラに浮かんでいた四つのプリズムが一つに合体する。そして
先程とは比べ物にならない極太の光線が放たれた。光線は原子崩し
を飲み込み麦野に襲いかかる。

（まずい！！！）

麦野はロケットの様に原子崩しを噴射させ慈雨の光線から逃れる。
だが光線によって起こった爆風は躲し切れず8 m程吹き飛ばされた
麦野は壁に背中を強打した。

「じつ、ぱあ・・・!?」

内臓を全て吐き出しそうになる程の凄まじい痛みが麦野を襲う。

一瞬気を失いそうになるが直ぐに意識を覚醒させた。青白い光線が
再び襲って来たからだ。

「チツイイイ！！！」

この距離であるスピードを躲すのは無理と判断した麦野は原子崩しを放ち防ごうとする。

「なっ！！！！」

麦野の表情に驚愕の色が浮かんだ。なぜなら光線が蛇の様にしなり原子崩しを躲したからだ。細い光線は麦野の左肩を貫いた。

「ぐ、あああッ！！！」

左肩に空いた風穴を押さえながら麦野は思わず叫んだ。煙の中から慈雨が出て来て痛みで地面にひれ伏す麦野を見ると満足そうに微笑む。

「顔が傷物にならなかっただけ感謝して下さいね」

麦野の能力はその危険性の高さから冷静に細かい照準をする事が絶対条件だ。だが痛みで冷静さを失っている今の麦野に細かい照準を定める余力はない。事実上の慈雨の圧勝だった。

「第四位もこの程度ですか。つまらないですね」

慈雨は麦野を見下しながら言う。勝者の余裕なのか展開しているリズムは一つだけだった。

「何でトドメを刺さねエんだ・・・！！！」

麦野は慈雨を凝視しながら叫ぶ。

「言ったでしょ？殺さない、って。それに今のあなたに殺す価値なんてありませんから」

そう言っつて慈雨をクルリと麦野に背を向け歩き出す。

「次会う時はもう少し強くなってきて下さいね」

慈雨は吐き捨てた。そしてプリズムが全て消える。

「油断してんじゃねエぞ！！クソガキがアアアああッ！！！」

勢い良く立ち上がると麦野は痛みには耐えながら原子崩しを放つ。正面からダメなら後ろから不意を突けばいい。その為に痛みを耐えながら下手な演技をしたのだ。真正正銘最後の一撃。

あの様子では能力は使えないと踏んでいた慈雨は完全に不意を突かれた。

ドゴン！！と爆発が起こる。

麦野は今度こそ本当に地に膝を着いた。

（ハアハア……一か八かだったけど上手くいったわね。にしても……）

麦野は押さえている左肩の風穴をチラリと見る。

（あのガキ……一体なんだったんだ。あんな能力見た事も聞いた事も……）

麦野の思考はそこで途切れた。青白い光線が麦野の身体の至る所を掠めたからだ。

「不意打ちとはやってくれましたね・・・」

乱暴に煙を払いながら慈雨が姿を見せる。先程とは打って変わり、怒りの表情が浮かんでいた。

「正直危なかったですよ。プリズムを最大数展開しなければあの世行きでした」

慈雨は原子崩しが直撃する瞬間にプリズムを六つ展開させ盾の様に配置したのだ。だが流石に無傷とはいかなかったのか足や手に擦り傷や切り傷がみえる。

「殺さないと言いましたがあれ取り消します。あなたはここで殺す、仕事なんて知ったこっちゃない」

言葉こそ丁寧だが表情は怒りで染められている。今の慈雨には仕事の事など頭がない、あるのは目の前の麦野^{メイノ}を叩き潰す事だけだ。慈雨は狙いを麦野の心臓と頭部に定める。プリズムが淡く発光し始めた。

「最期に言い残す事がありますか？」

慈雨の言葉に麦野は目を閉じると直ぐに開いて言い放った。

「くたばれ、クソ野郎」

慈雨はしばし無言だった。

「くたばるのは貴様だ、ゴミクズが・・・!!」

最後の最後に本性を見せ光線を放った。
麦野はギョツと目を瞑った。今の彼女にはそれぐらいの事しか出来なかった。

だが、青白い光線が麦野を捉える事はなかった。天使を彷彿させる白き翼が麦野の盾となったからだ。

「ギリギリセーフ、ってところか？なあ麦野」

麦野はこの声を知っている。同じレベル5であり同じ暗部の人間、そして誰よりも頼りになる存在、

「助けに来てやったぜ、麦野」

学園都市の第二位、垣根帝督がそこにはいた。

神野慈雨 VS 垣根帝督

麦野は驚いていた。なぜ垣根がこの場にいるかわからなかったからだ。

学園都市の第二位はニコツと微笑むと麦野に手を差し出した。

「大丈夫か？麦野」

「か、垣根。どうして・・・」

麦野は垣根の手を取りながら尋ねた。

「滝壺から連絡あったんだよ。訳のわかんねえヤツ等に襲われた、つてな。で、駆け付けてみたらお前がやられてたのが目に入ったんだよ」

麦野は滝壺に心から感謝した。垣根が来てくれなかったら今頃・・・。

「さてと・・・」

垣根は視線を麦野から慈雨に向けると静かに言った。

「随分と俺のダチを可愛がってくれたみてえだな」

垣根の顔には明確な怒りと敵意が浮かんでいた。

「どうして『スクール』のあなたが『アイテム』の彼女を助けるんですか？」

「ダチがダチ助けんのは当然だろ。んな事もわかんねえのか」

「ダチ、ですか。理解出来ませんね。同じ組織の中ならともかく別の組織の者と馴れ合うなど」

慈雨は鼻で笑いながら言った。

「テメエみたいなカスに理解出来るなんざ思っちゃいねえよ。世間知らずクソガキが」

「世間知らず、ですか・・・」

何が可笑しかったのか慈雨はクスクスと笑い始めた。その態度が気に食わない垣根は更に慈雨を睨み付ける。

「何が可笑的い・・・？」

「世間知らずはあなた達の方ですよ。たかだか『スクール』のリーダー務めているぐらいでこの街の闇を知った様な顔は辞めて欲しいですね」

「どついつ意味だ・・・？」

「自分で考えて下さい」

慈雨は光線を放つのと同時に言った。プリズムから放たれた殺人光線は垣根目掛けて一直線に飛んで行く。光線は垣根に直撃したが彼の体に傷はない。傷一つない。

「中々の威力だな。なるほど麦野が負けたのも無理ねえ」

だが、と垣根は付け加えて、

「その程度じゃ俺には届かねえ」

垣根の背中には天使を彷彿させる六枚の白い翼が羽ばたいていた。

「全くもって似合いませんね、メルヘン野郎」

「心配するな。自覚はある」

岩見祥吾はフレンドを見下ろしていた。地面に倒れ込んでいるフレンドはボロボロになっていた。それでも祥吾を睨む目には確かな力が宿っている。

「やっぱりちょっとやりすぎたかな？」

祥吾のビジネススーツは少しの乱れもなく額には汗一つかいていない。その事からいかにこの戦闘が圧倒的だったのかが伺える。

対照的にフレンドは着ている服はボロボロで体のあちこちに切り傷が出来ていた。いつも被っているベレー帽はズタズタに引き裂かれて祥吾の後ろに無残に捨てられている。

「あ、あんだ。一体何者なのよ……！」

「わかるまで何度でも言つてやる。『死神』だ」
祥吾は右手に握っている西洋刀をフレンドに向ける。刀を使うには明らかに遠過ぎる距離な筈だがフレンドは勢い良く立ち上がり。それと同時に西洋刀の刀身がフレンド目掛けて伸びた。フレンドは横つ飛び何とか直撃を躲すが音速以上のスピードで迫ってくる刃先を完全には躲せず左足を掠めた。

「ウグツ・・・！」

フレンドは踏ん張り切れずまた地面に倒れた。

「あ、まずったな。跡が残らなければいいが・・・いざとなれば冥土帰し（へウゝンキャンセラー）がいるし、そこらへんは問題ないか」

祥吾は西洋刀をフリフリと振りながら言った。

祥吾の能力は『距離変換』（ロードコントロール）というもので視覚的・感覚的・物理的に距離を変換出来る能力だ。

西洋刀が伸びるのは刀の『届く距離』を変換している為だ。

刀の伸縮するスピードは音速の三倍以上、つまり人間の目では到底反応出来ない速さ。にも関わらずフレンドが未だに生きているのは彼女の身体能力が高い訳ではなく単に祥吾が遊んでいるだけなのだ。先程の攻撃もギリギリ彼女に当たるか当たらないかのスピードで調整していた。

「さつきから爆弾ばかりで、なんで能力を使わないんだ？暗部に配備されたくらいなら、それ相応のやつがあるんだろ？」

「……………」

悔しいが何も言い返せない。事実フレンドは『アイテム』の中では一番弱い。それなりに戦果こそ残しているものの麦野や浜面に比べれば大した事はない。

「……………なさいよ！」

フレンドが何か言ったが声が小さくて祥吾は上手く聞き取れなかった。

「ん？」

「さつきと殺しなさいよ！！あんたなら私ぐらいサクッと殺せるでしょ！！！」

それを聞いて祥吾は西洋刀をフレンドに向ける。先程の倍以上のスピードで伸びて来た刀身はあっという間にフレンドの脇腹を貫いき、そのまま壁に突き刺さる。

「ああああアアアアああッ！！！！！」

凄まじい痛み到我慢出来ず断末魔を上げるフレンド。祥吾は冷たい目でそれを見つめながら言った。

「正直、可愛い子は殺したくないんだ。それにさつき言ったように殺すな、って言われている。たがらこれはただの時間稼ぎ」

祥吾はフレンドに狙いを定めながら言った。
音速を超えるスピードで刀身が伸びて行く。ドスッ!!と肉を貫く
感触を感じた。

「ほっ」

だが祥吾が貫いたのはフレンドではなかった。

「……やるじゃない」

フレンドの代わりに浜面が祥吾の西洋刀に貫かれていた。

「ゴフツ……!!」

口から血を吐きながら浜面は祥吾を睨み付ける。目にはまだ光が灯
っていた。

「ギリギリセーフだったな。でもどうして庇ったんだ?」

祥吾は気を失っているフレンドを指差しながら尋ねる。

「……仲間だからだ」

絞り出す様に浜面は答えた。

「仲間か……。いい台詞だ、感動的だな。嫌いじゃない」

祥吾は吐き捨てる様に言った。

「仲間の為なら盾になる事も躊躇しない!これが、俺達『アイテム』」

だ・・・！」

そう言つて浜面の体から力が抜ける。気を失つたか死んだかのどちらかだろう。大した興味がない祥吾は西洋刀を引き抜き鞘に戻すとクルリと背を向ける。

「暗部にもお前等みたいのがいてちよつと安心した」

慈雨は垣根に向かつて光線は発射する。だが垣根の翼によってそれは完全に防がれる。先程からずっとこのパターンが繰り返されていた。

「しつげえな、テメエは」

垣根は半ば呆れた様にした。先程から垣根は一切攻撃はしていない。ずっと防御に回っている。

「何度も言わせんな。テメエの能力じゃ俺の未元物質ダークマターは貫けねえんだよ」

垣根は始めて攻撃に打つて出る。翼を大きく振るい突風を発生させる。突風に飲み込まれた慈雨は15m程吹き飛ばされた。

「ーーーーッ！」

慈雨はプリズムから光線を噴射させ上手く地面に着地する。

「器用な事すんじゃねえか」

垣根は余裕の笑みを浮かべながら賞賛する。明らかに気持ちが籠っていない賞賛を。

「だがこれ以上やられると鬱陶しい事この上ねえ。だからさっさと終わらせてやるよ」

垣根は六枚の翼を羽ばたかせ宙に舞う。そして超スピードで慈雨に接近する。

慈雨はプリズムから光線を放ち垣根に対抗するが垣根はヒョイヒョイと器用に躲す。

「一発食らつとけ」

垣根の右ストレートは綺麗に慈雨の顔面を捉えた。美しいフォームから放たれた右ストレートをモロに受けた慈雨はそのまま後方に吹き飛ばされた。

ガン！！と壁に強打した慈雨は思わず顔を押しさえた。

「当麻直伝『男女平等ストレート』だ。中々気持ちいいもんだな、コレ」

女性の顔を殴る事に若干の抵抗はあったがいざ殴ってみれば案外気持ちいいものだ。

顔を殴られた慈雨はキツと垣根を睨み付ける。

「女性の顔を殴るなんて・・・最低ですね、あなた」

「それに関しては自覚はねえな」

慈雨はプリズムから再び光線を放とうとする。しかしそれよりも早く垣根の翼から白い光が放たれ慈雨に襲いかかった。

「ー！ー！ー！」

慈雨は演算を中断に横に躲す。垣根の放った光はビルの壁を紙を貫くかの様に突き抜けた。

「驚いたか？これが俺の未元物質の力だ」

ポケットに手をつ込み余裕な態度で言う。

「今のは太陽光を強い貫通力のある別の光に変えたもんだ。今日はいい感じに太陽が出てるからな」

「太陽光を変える・・・？」

「俺の能力はこの世に存在しない物質を作り出す事、それが未元物質だ。未元物質はあらゆる物理現象をも超越する物質だ。さっきは『太陽光に貫通力を持たせ反射する』物質を作り出しただけだ」

聞けば聞く程益々意味がわからなくなる能力、それが未元物質なのだ。学園都市の第二位は慈雨にとって別格の存在だった。

「ここは異物の混ざり合った空間。テメエの知る空間じゃねえんだよ。万が一にもテメエに勝機はねえ」

そう言つて垣根は再び太陽光の殺人光線を放つ。数は恐らく30本はある。

慈雨は六つのプリズムを一つに合体させる。流石にあれ全部を防ぐ事は出来ない。ならばまとめて薙ぎ払おうと考えたのだ。

「無駄だぜ」

垣根は翼を大きく振るいまた突風を放つ。この突風ではまともに狙いが定められない。発射のタイミングを逃した慈雨の肩と脇腹を殺人光線が貫いた。

「グアアアアアアアツ!!!!!!」

慈雨は余りの激痛にのたうち回る。

「思い知ったか？クソガキが」

慈雨は能力を行使しようとするが痛みで上手く演算が出来ない。そうしている間に垣根は慈雨に接近すると思いつ切り慈雨に蹴りをお見舞いする。

「グアツ!!」

蹴り飛ばされた慈雨はそのまま地面に倒れ込んでしまふ。追い討ちを掛ける様に垣根は慈雨の肩を踏み付けた。

「さて、テメエに聞きたい事がある。正直に答える。さもないとこのまま肩の砕いてやるからな」

垣根は踏み付ける力を少し強くする。慈雨の顔が苦痛に歪んだ。

それを見て垣根は質問を始めた。

「『シーズン』、ってのは何だ？」

「自分で調べなーীগアアアアアアッ！！！！」

垣根は慈雨が答え終える前に踏み付ける力を強める。ミシミシと慈雨の肩が砕かれそうになる。

「もう一度聞く。『シーズン』、ってのは何だ？」

「テメエが知る必要はねエ事だ。帝督」

後方からひどく聞き覚えのある声が聞こえた。ハッ、として垣根は後ろを振り返る。

「今思い出したぜ。テメエ確かオレの本性知ったんだよなア。ったく、何でもかんでも知りたがるなつつうの」

学園都市最強の能力者、神鬼大和が引き裂く様な笑みを浮かべながら言った。

友情の崩壊

「や、大和さん。どうして……ここに？」

垣根に踏まれている慈雨が絞り出す様に尋ねた。

「あア？オレがここにいちやアマズいのか？」

反骨心の塊の様な少年、大和の返答は的外れのものだった。

「そ、そういう意味ではありません……。あなたには仕事の事は伝えられていない筈……」

「わかつてるっての、冗談だ、冗談だ。ちよいと『滞空回線』（ア
ンダーライン）を覗いただけだ」

さらりと、とんでもない事を言い放つ大和は「つか、と付け加え、

「こんな面白れエ事オレだけ除け者かよ。薄情な野郎共だな」

大和はヤレヤレといった表情をする。

「……別に除け者にした訳ではありません。ただ大和さんの力を借りるまでもないと思つての事です」

「今はそれ言つても全く説得力ねエけどな」

大和は小馬鹿にした笑みを浮かべる。慈雨が何やらガーガー、と文句を言っているが大和は完全無視を決め込む。

垣根は大和がいる事が信じられないのか、あるいは信じたくないのかひどく驚いた表情をしている。

「なんて面してんだア、帝督。化け物でも見たような面すんのやめてくんねエかな？」

大和は薄い笑みを浮かべながら言った。

「大和、な、なんでお前が・・・」

「テメエの下敷きになってるそのボロ雑巾の仕事仲間だからだ。つまりオレも暗部の人間って訳」

大和はあっさりと言った。

「暗部・・・？お前が・・・？嘘だろ・・・」

親友が暗部の人間だったのがショックだったのか、垣根は半ば放心状態に近く尋ねた。

「んな事、嘘ついてどうなる。だからそのボロ雑巾返してくんねエかな？」

大和は少し睨み付けながら言った。誰かに睨まれるのは慣れていない垣根も親友に睨み付けられるのは慣れていないのか、若干狼狽えている様にも見えた。

「・・・ダメだ」

予想に反して、垣根の返答は拒否だった。

「・・・あア？」

大和は少し驚きながら聞き返す。

「こいつは麦野達を傷付けた・・・。だから許す訳にはいかねえ。それに聞いてえ事だつてー」

垣根の言葉がそこで途切れる。大和が目にも留まらぬスピードで垣根の顔を殴り付けたからだ。強烈な一撃をもらった垣根はそのまま5m程吹き飛ばされる。

「垣根エ・・・勘違いしてんじゃねエよ。オレが返せ、つつたら黙つて返すんだよ。テメエに解答権なんざ最初からねエんだよ」

大和は吹き飛んだ垣根を見下ろす。親友を見る目とは思えない、冷たい目で。

「や、大和・・・？」

垣根は殴られた頬を押さえながら大和を見る。信じられなかった。今まで喧嘩で大和に殴られた事はある。だが今のまた別の感じがした。まるで目の前の障害を取り除くかのように何の躊躇もなく殴った。自分が暗部の仕事でするように。

「ホラ立てよ、もう終わりかア？学園都市の第二位も大した事ねエなア・・・」

垣根はプライドの高い男だ。だから当然、大和の言葉を聞き流せる筈もなく、

「大和オオオオオオツ！！！！！！」

翼を羽ばたかせ垣根は超スピードで大和に接近する。

「そつだ、そつこなくつちやなア！！そつじゃなきや面白くねエ！！」

大和も垣根に劣らないスピードで接近した。

ガンツ！と車と車が正面衝突した様な音が響く。凄まじい突風が二人の周りで発生した。

垣根と大和は突風の中、お互いの手を繋ぎ押し合っていた。

「なんだア、そんなもんか！！テメエの力はその程度じゃねエだろ！！」

大和は徐々に垣根を後方へ押しやり始めた。

（なんだ、この力！？俺が押し負けるだ！？）

六枚の翼を全力で羽ばたかせているのにも関わらずまるで敵わない。垣根の顔に驚きと同時に焦りの色が浮かぶ。

「ほらよッ！！」

押し勝った大和は垣根の吹き飛ばす。垣根はそのままビルに突っ込んだ。翼でガードしたので怪我はなかったがやはり押し負けた事が信じられなかった。

（クッ、どうなってやがる！？明らかに人間技じゃねエぞ！！）

垣根は大和が何かしらの身体強化系の能力を使っているのではないかと考えたが、すぐに否定する。身体強化系の能力程度で垣根の未元物質に押し勝てる筈がない。それこそレベル5でもない限り。

（アイツが何の能力使ってるのかは知らねえが・・・）

垣根はゆっくりと立ち上がる。

（俺の未元物質ダークマターに常識は通用しねえ）

翼を飛ばたかせ、ビルの屋根を突き破る。豪快に現れた垣根を見て大和は思わず笑いが漏れた。

「テメエの悪人面に翼それは合わねエぜ」

いつもなら「心配するな。自覚はある」と言い返していただろう。お決まりの台詞、お決まりのパターンだ。だが今の垣根にはそんな余裕はなかった。

「うるせえんだよオオオオオツ！！！！このクソ野郎がアアアアアアア！！！」

垣根は大和に羽を飛ばす。弾丸の如きスピードで襲いかかる羽を大和は華麗に躲した。

「大和！！なんでだよ！！なんでお前が暗部なんかにいるんだ！！」
羽を飛ばしながら垣根は叫ぶ。親友として大和と当麻だけには学園都市の闇なんかには関わって欲しくなかった。自分と同じ場所にだ

けはいて欲しくなかった。

「オレの事、統括理事会の野郎から聞いたんじゃねエのか！！ならわかるだろ！！」

大和は人間離れした脚力で飛び上がり、垣根に接近する。

「オレはテメエよりも前にこの街の闇を知った。オレ達が見ている世界は全て幻想だとな！！」

大和は垣根の頬を殴りつける。ガードの遅れた垣根はモロに入り、地面に落下する。

「なんでだよ！！なんで俺と当麻に黙ってたんだ！！俺達の友情はそんなちっせえもんだったのかよ！！」

空中で体勢を立て直した垣根が叫ぶ。せめて一言、自分達に伝えて欲しかった。垣根にとって、大和と当麻は始めての親友だった。だからこそ、伝えて欲しかったのだ。

「親友ねエ・・・」

地面に着地した大和は垣根を見上げる。そして、言った。

「オレとテメエ等の友情なんざ・・・ただのまやかし物だ」

垣根は大和の言葉の意味が理解出来なかった。

「三年前、オレはアレイスターからある仕事を請けた。『将来、レベル5となるであろう垣根帝督、右手に特異な力を宿す上条当麻の

垣根は叫ぶ、必死に、顔を真つ赤にしながら。

大和は素直に嬉しかった。学園都市に来る前から化け物と蔑まれ、学園都市に来てからも何も変わらなかった。ましてや友達等いる筈もない。そんな自分をここまで想ってくれる、大切に思ってくれる人がここにいるのだから。こんな化け物を『親友』と言ってくれる人が。

だが大和は、

「汚エ手でオレに触れんじゃねエよ」

胸倉を掴む垣根の手を掴むと、聖人の力で捻りあげる。そしてそのまま腕の骨を折ってしまった。

「グ、グアアアアアアアツ！！！！」

腕を押さえながら悶絶する垣根の頭を大和は地面に叩き伏せた。

「勝手にペラペラとほざいてんじゃねエよ。虫唾が走る」

グリグリと垣根の頭を地面に押し付ける大和。その表情はどこか悲しみに暮れていた。

「友情なんざ所詮、こんなもんさ。簡単に壊れ、崩れ、裏切られ、なくなる。そして最後には憎しみに変わるだけだ」

大和は手を離すと垣根の腹に蹴りを入れる。そのまま垣根は5m程吹き飛び、ビルに突っ込んだ。

「さよならだ、帝督。次オレに楯突いたら・・・殺してやるからな」

そう言つて大和は気絶している慈雨を担ぎ上げるとその場を後にした。

吹き飛ばされた垣根はゆつくりと顔を上げた。激突による衝撃は翼でガードしたが大和の蹴りのダメージが大きく、立ち上がる事が出来ない。

すでに大和と慈雨の姿はなく、残されたのは垣根とこちらに駆け寄つて来る麦野の二人だけだった。

「ちくしょう・・・ちくしょオオオオオオオッ！！！！！！」

垣根の叫びが、戦場だった場所に虚しく響いた。

「どつという事が説明してくれないかしら？」

朱雀は顔を若干しかめながら大和に尋ねる。

「見ての通りだ。説明なんざねエ」

面倒くさそうに大和は答えた。慈雨をソファーに放り投げるとドカッ、と椅子に座る。

現在、『シーズン』の構成員は全員隠れ家である第三学区の高級ホテルの最上階にあるプライベートルームにいた。『シーズン』は他の暗部とは違い、仕事の後は必ず隠れ家に集合し報告し合うという

独特の決まりがあるのだ。

「答えにまるでなっていないぞ、大和」

祥吾は若干大和を睨み付けながら言った。

「何が聞きてエんだよ。はっきり言えや」

「なんでオマエがアソコにいた？オマエに仕事の事は伝えていねエ筈だが」

「『滞空回線』（アンダーライン）をちよいと覗いただけだ。別に大した事じゃねエよ」

「いやかなりヤバくね？」

祥吾のツツコミを無視して大和は朱雀に尋ねた。

「なんで第二位相手に慈雨を闘わせた？オレが来なかったら死んでたぞ」

大和はもう帝督とは呼ばなかった。

「垣根帝督の乱入は完全に予想外だったのよ」

「オレが来たのは不幸中の幸い、ってか？随分と呑気なリーダー様だな。全く頼りになりやしねエ」

「あなたが人を頼る必要なんてないでしょ、大和。何でも一人でやっつけてしまうあなたが」

朱雀は若干、皮肉を込めて言った。

「いけすかねエ女だ。まア最初からテメエ等なんざ頼る気なんてねエけどな。足でまといになるなら別だが」

その言葉に祥吾がピクツと反応する。

「もう一度言ってみろ……。潰すぞ、八工が」

祥吾は鋭い眼差しで大和を睨み付ける。

「あア？テメエ、誰に口聞いてんだア？早死にしてエのかア？」

大和も同じく睨み付ける。

「二人とも、やめなさい。みっともないわよ」

このままでは本当に戦闘をやりかねないので朱雀はパンパン！と手を叩きながら言った。

「くだらん。俺は帰らしてもらおう」

ソファーから立ち上がると祥吾はそのまま部屋から出て行ってしまった。

「オレも帰るぜ。テメエ等と違って、オレは暇じゃねエからな」

最後まで高飛車な態度を変える事なく、大和も部屋を出る。残ったのは朱雀、柊夜野、慈雨の三人だけだった。

「あの二人・・・もう少し仲良く出来ないのかしら」

溜息を吐きながら、朱雀は言った。祥吾と大和はいつもあんな感じだ。顔を合わす度にお互いに喧嘩腰になる。協力し合う気など全くない。

「無理だぜ、朱雀。アイツ等は水と油みてエなモンだからな。死んでも仲良くなんかしねエよ」

「同じ仕事仲間とは思えないわね」

「そもそもアノ二人に仲間意識なんか皆無だからな。オレ達の事も道具としか思ってたねエだろうぜ」

「・・・悲しくなるわね」

朱雀は頭を抱えながら言った。暗部に馴れ合いや仲間意識などは不要というのはわかってはいる。それを考慮に入れてもあの二人の態度は目に余るものがあった。

「まあいいわ。仕事を完璧にこなしてくれるなら良しとしましょう」

朱雀は無理矢理納得させる。

「今回の仕事は完遂した、って事でいいのかよ？」

「いろいろ予想外の事はあったけど、一応は成功でしょう。『アイテム』の連中はしばらくは動けないでしょうしね」

それを聞いて柊夜野はゆっくりと立ち上がる。

「んじゃあオレも帰るわ。お疲れさん。また何かあったら呼んでくれや」

「わかったわ。お疲れ様」

柊夜野が部屋を出ると朱雀は立ち上がった。

「さてと、慈雨を病院に連れて行くかな」

下部組織にその旨を伝えると朱雀も部屋を後にするのだった。

こうして『アイテム』と『シーズン』、そして『スクール』の垣根帝督の抗争は幕を閉じた。学園都市の第二位と第四位が敗北したというニュースは直ぐに学園都市中に噂として広まる事になった……。

『ジョーカー』（前書き）

今回は想像屋さんとあしゅきさんのキャラが登場します！

『ジョーカー』

「『アイテム』と『スクール』が崩壊しただと・・・？」

昼間だというのにカーテンを閉め切った薄暗い部屋で少年が呟いた。

「大袈裟だ、影虎。崩壊した訳ではない。『アイテム』は滝壺理后を除いて、『スクール』は垣根帝督が重傷を負っただけだ」

帽子を深々と被った少女が訂正する。帽子のせいで全く表情が確認出来ない。

「いや、それって、事実上の壊滅ですよね・・・」

まるで日の光から逃げる様な全身黒の服に身を包んだ少年が呟いた。

「確かに常闇の言う通りだ。暗部組織でのリーダーの敗北はそれだけで壊滅に限りなく近い事だ。『アイテム』に関しては滝壺以外が全滅となると再起はかなり厳しいな」

白いシャツにフード付きの緑のコートと全く季節に合わない格好の少年、桜小路影虎が補足した。

「どこのバカの仕業だ？一日で暗部組織を二つ潰すなんてそうそう出来る事じゃないぞ」

口調と服装が全く女らしくない桜小路椿が尋ねる。

「えーと、確か・・・『シーズン』だったと思います」

なよなよしながら黒服の少年、常闇直人が答えた。

「『シーズン』だと……！奴ら何が目的で……」

『シーズン』の名が出た事に椿は若干驚いた。

「流石に、そこまではわかりませんでした。何せ『シーズン』は他の暗部とは格が違いますから。僕たちでも把握できない部分が多くあります」

常闇は淡々と説明する。

「どうするんだ、影虎。このまま不問といくのか？」

「いや、それは駄目だ。何もしなかったら統括理事会のクソ共に何言われるかわかったものじゃない」

影虎はゆっくりと立ち上がると言った。

「アレイスターの所に向かう。ヤツなら今回の件も把握している筈だ」

そう言って影虎は部屋から退室しようとするが後ろを振り向くと言った。

「椿、お前は家に帰ってる。直人、俺が戻るまでの間椿を頼むぞ」

常闇は、わかりました、と返事をし椿もコクンと頷いた。それを確認し影虎は部屋から出て行く。

「さて、椿さん。帰りましようか」

「そうだな」

常闇と椿は影虎の家に向かうのであった。

影虎は『窓のないビル』の前にいた。いつ見ても気味の悪い所だ、とつくづく思う。

影虎はコートのポケットから仕事用の携帯を取り出すとどこかに電話を掛け始めた。

「俺だ、影虎だ。アレイスターに会いたい。中に入れる」

電話の相手はこのビルの『案内人』、テレポーターではない彼は一々『案内人』に協力してもらわなければな中に入る事は出来ないのだ。

「要件だと？お前に話す必要があるのか？」

影虎は『案内人』に食ってかかる。

「話せないなら中には入れない？・・・わかった、話せばいいんだろ。今回来たのは『シーズン』の件だ。お前もすでに知ってるだろうっ。」

影虎が尋ねると返事の代わりに目の前の空間に歪みができた。どうやら中に入れという事らしい。

影虎が空間の歪みを超えると歪みは一人で消えてしまった。中に入ると目の前には目的の人物であるアレイスターがいた。

「私に何の要件かな？桜小路影虎」

表情を全く変える事なくアレイスターは影虎に尋ねる。

「言わずともわかるだろう。余計な質問はするな」

「先程の戦闘の事か」

「わかつているなら説明しろ。あれはどういう事だ？なぜ『シーズン』は『アイテム』を襲撃した」

「それを調べるのが君達『ジョーカー』の仕事ではないのか？」

「お前に言われずともわかつている。だが今回は別だ。『シーズン』の連中を取り締まる権限は俺達にはない」

アレイスターは黙って聞いてるだけだった。痺れを切らした影虎はアレイスターに食ってかかる。

「そんなに大事か？『シーズン』が・・・いや、神鬼大和が」

大和の存在がアレイスターにとって、どれ程大事な存在なのかは影虎も良く知っていた。

実際に大和はそれだけの価値のある人間だ。影虎も大和には一目置

ている。好き嫌いは別として。

「大事な存在だよ、彼は。何せ学園都市の未来は彼に懸かっていると言っても過言ではないからな」

「随分とご執心だな。ヤツの何がそこまで重要なんだ？」

「君が知る必要はない。彼はすでに君には理解出来ぬ領域にいる存在だ」

影虎は一瞬、頭が沸騰しかけたが直ぐに冷静さを取り戻す。

「アレイスター、過度な期待は失望を生むだけだぞ」

「君が気にする必要もない。彼は期待通りに働いてくれている」

アレイスターはそう言って、視線を影虎から『滞空回線』（アンダーライン）へと移した。画面には病院のベッドで横になっている垣根帝督が映っている。

「どうする気だ。第二位と第四位が敗北した事など、直ぐに学園都市中に広まるぞ」

レベル5が敗北、それも一日に二人も、となるとその座を狙う馬鹿な輩が何をしでかすかわかったものじゃない。仮に暴動でも起こればかなりの事態になる。

だがアレイスターは、

「問題ない。あの二人の敗北も予定通りだ」

「なんだと・・・？」

「むしろ好都合だ。おかげでプランの大幅な短縮が出来た。本当に彼は良くやってくれる」

「一体こいつはどこまでの事態を把握しているのか。レベル5の敗北すらも自分の有利に持って行くとは。」

「・・・そうか。なら話は以上だ。俺は帰らせてもらおう。邪魔したな、アレイスター」

影虎はアレイスターに背を向けると「案内人」の作った空間の歪みに入って行った。

影虎が消えたのを確認して「案内人」が口を開く。

「飼い犬に噛まれる気分はどうですか、理事長」

「案内人」はからかう様に言った。

「・・・いまいち意味がわからないが・・・」

「とぼけないで下さいよ。彼が邪魔なんですよ？自ら『ジョーカー』のリーダーに任命した彼が」

アレイスターは押し黙る。それを肯定とみた「案内人」は更に続ける。

「確かに彼は邪魔ですよ。理事長のプランをあからさまに妨害し、大和君にも明確な敵意を持っている。理事長の命令にも一切耳を傾けない。厄介ですよね」

「いつになく饒舌だな」

アレキスターは表情を変える事なく言った。

「人間、って気分が高揚するといつも以上に饒舌になるんですよ、理事長」

「……何かあったのかね？」

「ええ、あの影虎のクソ野郎の面見てしまったんですよ！ですから今、最悪に気分が高揚してるんですよ！！」

『案内人』が声を荒上げて言った。普段の冷静さからは考えられない怒りの表情をしている。

「憎いか？彼が、君の大切な人を奪った彼が」

答えがわかりきった質問をアレキスターはあえてする。

「憎いですよ。憎くて憎くて仕方ないですよ！『ジョーカー』のリーダーじゃなければとっくに殺してますよ」

『案内人』は手をプルプルと震わせながら言った。

少し時間を遡り、現在は午後8時50分。
神裂とステイルは大和との約束の場所に来ていた。

「ステイル、人払いの刻印ルインの方は――」

「問題ないよ。ここから半径3kmは誰も近付けない。準備は万端さ」

神裂の言葉の上からステイルが言った。

「3kmですか……。やはりまだ警戒してるのですね」

「当たり前だ。僕からしたら何も警戒しない君の方が異常に見えるよ。日本には『昨日の敵は今日の友』、って言葉があるようだけど僕には到底理解出来ないね」

ステイルは吐き捨てる様に言った。

「私も全く警戒していない訳ではありません。ただ、あなたと比べて薄いだけです」

「どつちでもいいよ。それよりそろそろ時間だ。ヤツは本当に来るんだろっね」

「彼は来ますよ、必ず」

神裂ははっきりと言いつつた。

「……随分とヤツを信用しているみたいだね」

「信用している訳ではありません。ただ、可能性に縋っているだけです」

神裂の言葉に何も返す事なく、ステイルは懐から懐中時計を取り出して時間を確認する。

時計の針は午後9時ちょうどを指していた。

「時間だ」

ステイルがそう言った瞬間、神裂がピクツと反応した。近くに人の気配を感じたのだ。本来感じる事ない人の気配。人払いの刻印ルンの中で感じた気配は紛れもなく彼のものだった。

「そんなに焦らなくてもいいぜ。魔術師さんよオ」

漆黒の夜に、大和の音が響いた。

傷痕

「警戒し過ぎだぜ、不良神父。取って喰ったりしねエから少しは信用しろよ」

右手にルーンの札を持つステイルを見て、大和は冷笑を浮かべる。

「警戒するな、って方が無理だと思うよ。君の事を信用するなんて残念ながら死んでも出来そうにないよ」

「あーそうかよ。ったく、これから人にも聞く態度とは思えねエな」

大和はヤレヤレ、といった表情をすると視線をステイルから神裂に移す。

「よオ、『ただの』聖人さん。怪我の具合はどオよ？」

体の所々に見える包帯を見て、大和はニヤリと笑みを浮かべた。

「おかげさまでだいぶ良くなりましたよ。まだ若干痛みはありますが」

聖人の治癒力をもってもまだ痛みが引かない程の攻撃、神裂は改めて大和の力の強大さを実感する。

「あれだけの怪我をたった一日で良くなりました、とはな。流石は聖人様だな」

「完全聖人であるあなたに言われても実感が湧きませんよ」

大和は何も言わず、ククツと笑みを浮かべた。

「お喋りはその辺にしてそろそろ本題に入ってくるないかな。僕達は君と違って暇じゃないんだ」

イライラを隠す様に、タバコを噴かせながらステイルが言った。

「そう慌てるなよ。それに、オレだって暇じゃねエんだよ」

そう言つて大和は壁にもたれ掛かる。

そしてスウー、と息を吸うと話し始める。

「さて、まず最初に聞くがあの子ンチクリンの脳の85%は魔導書の知識で埋まつてるって言ったなア。その85%、って数値は誰が出した？」

「私達の上司である最大主教アークビショップですが・・・それが何か？」

「その85%、って数値の根拠は何だよ？テメエ等の上司は脳医学のセンサーでもしてんのかア」

ステイルと神裂は訳のわからないといった表情をしている。

「どうやらテメエ等は魔術以外の知識はクソ以下みてエだな。しよ
うがねエからオレが記憶について教授してやるよ」

大和は溜息を吐くと説明し始める。

「記憶つてのはいくつかの種類に別れてんだよ。例えば、言葉や知識を司る『意味記憶』、運動の慣れを司る『手続記憶』、思い出を司る『エピソード記憶』って感じにな」

一呼吸を吐いて大和は続ける。

「今言つたみてエに記憶には様々な種類があんだよ。種類が違うからこそ別々に保管しているんだよ」

「何が言いたい？」

「つまりだ、いくら魔導書の知識を記憶したところで脳がフツ飛ぶ事なんざあり得ねエんだよ。だいたい人間の脳、つてのは140年分の記憶が出来るんだよ」

大和はきっぱりと言い切った。

「つまり僕達は今まで『上の連中』の口車に踊らされていただけなのかい・・・？」

湧き上がる怒りと悔しさを必死に押さえながらステイルは声を震わせながら尋ねた。

「理解が早くて助かるぜ、不良神父。テメエ等ほとんどもねエ間抜けだった、って事だ」

それを聞いた瞬間、ステイルは呆然とした表情をし、神裂は力なく地面に膝を着いた。

「しっかりしろよ、ここからが本番だつてのによオ」

神裂が立ち上がるのを確認して大和は続けた。

「記憶を消さねエとあのチンチクリンは死ぬ、ってのは事実なんだからオナ？」

「・・・あの子の記憶を消す直前に発作を起こす。記憶を消せば落ち着くのだが」

「つまり脳には何の異常もねエ、だが記憶は消す必要はある。ここから導き出される答えは・・・テメエ等もわかるだろ？」

神裂は悔しそうに答えた。

「上層部の連中があの子の身体に何かしらの仕掛けを施した。あの子が反逆を起こさない様に、あの子をコントロールする為に・・・」

神裂は身体をプルプルと震わせながら言った。ステイルの表情も怒りに満ちている。

「オレがやるのはここまでだ。後は自分達で何とかしな」

そう言って大和は立ち去ろうとするが、

「待ってください」

と、神裂に止められる。

「実はもう一つだけ聞きたい事があります」

大和は振り返る事なく、神裂の言葉に耳を傾ける。

「昨日、私と闘った時にあなたは様々な力を使っていました」

「だから何だよ？」

「ここに来る前に『能力者』について少し調べました。それによると能力は一人につきしか持てない、という事がわかりました」

大和は何も言わない。

「ならば、あなたの存在はこの街では有り得ない筈です。あなたはステイルに自分の能力の事を明かしました。ですが、私との戦闘では全く別の能力を使用していましたね。あれはどういう事ですか？」

「何でそんな事を聞く？ 科学と魔術は交わる言葉ないものじゃねエのか？」

「これは私の興味で聞いているだけです。私達を救ってくれたあなたの事をもっとよく知りたいという興味だけです」

「オレはテメエの事なんざ全く興味ねエんだが・・・？」

「わかっています。これは私の自分自勝手なものです」

神裂は純粹に大和の事をもっとよく知りたかったのだ。自分達に救いの手を差し伸べ、過ちを正してくれた大和キロの事を。この気持ちはどこから来るのかは神裂自身もまだ知らなかった。

「自分勝手な興味ねエ……。本当に迷惑な事この上ねエぜ」

大和はだが、と付け加えて、

「少しだけテメエに興味が湧いて来たぜ。こんなクソ野郎の事を知りたがるテメエに、誰かの為に必死に闘うテメエにな」

そう言つて大和は神裂とステイルの方に振り向く。

「特別に教えてやるよ。オレの力、オレの正体をなア」

大和はゆっくりと説明し始めた。

場所は変わり、ここは学園都市一の名医である冥土帰し（ヘヴンキヤンセラー）の病院。

『手術中』のランプが点灯している部屋の前の椅子に麦野、滝壺、垣根は座っていた。滝壺以外は皆身体に包帯を巻いており、痛々しい姿をしている。

現在中で手術を受けているのは浜面で、一足早く治療の終えたフレンドは病室で安静にしている。

「はまづら……」

下を向きながら必死に浜面の無事を祈る滝壺。それを見て『アイテム』のリーダーとしての役割を果たせなかった麦野、来るのが遅か

った垣根は締め付けられるような思いをする。

「心配するな滝壺。あのカエルが手術してんだ、浜面は絶対助かるよ」

垣根は何とか滝壺を励まそうとするが、滝壺は生返事を返すだけだった。

と、その時『手術中』のランプが消え、中から冥土帰し（ヘヴンキヤンセラー）と担架に寝かされた浜面が出てくる。麻酔がまだ効いているのだろっ、浜面は眠っている。

「先生！はまづらは・・・？」

滝壺が真っ先に冥土帰し（ヘヴンキヤンセラー）に尋ねる。冥土帰し（ヘヴンキヤンセラー）はニッコリ、と笑うと滝壺に言った。

「大丈夫だよ。手術は無事に成功した、もう心配いらないよ」

余程浜面の事が心配だったのだろっ、冥土帰し（ヘヴンキヤンセラー）の言葉を聞いて滝壺はその場に泣き崩れる。

「ありがとう、先生。本当にありがとう・・・」

涙で顔をグシャグシャにしながら滝壺は礼を言う。

冥土帰し（ヘヴンキヤンセラー）は滝壺の頭を撫でると優しく言った。

「礼には及ばないよ。それより彼の所にいってあげなさい。次期に目を覚ますと思うからね」

それを聞いて滝壺は浜面の病室に駆け出す。麦野もそれに続いた。

「君は行かないのかい？垣根帝督」

冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）は不思議そうに垣根に尋ねた。

「下手な芝居してんじゃねえよ」

まるで答えになっていない返答をする垣根。冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）は何の事かわからない、といった表情をする。

「とぼけんじゃねえよ。作り笑いしてるのバレバレなんだよ。麦野は騙せても、俺には通用しねえよ」

同じ暗部のリーダーでも垣根と麦野では人の心情を見切る力は垣根の方が上だ。麦野よりも多く、人間の腹黒さを見て来たからか。

「君には敵わないね……。流石は学園都市の第二位、つたくとこるかな」

冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）を空を見つめながら呟いた。

「……少し場所を変えようか」

そう言って冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）は歩き始める。垣根も黙ってそれに続いた。

二人が来たのは病院の屋上。冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）はタバコを取り出すと先端に火をつける。

冥土歸し（ヘヴンキャンセラー）の口から甘ったるい匂いのする白い煙が吐き出された。

「以外だな、あんたも吸うんだな」

垣根は無言でタバコを吸う冥土歸し（ヘヴンキャンセラー）に軽口を飛ばす。

「医者って仕事は色々ストレスと溜まる仕事だね」

「ストレスか、あんたには無縁の言葉だと思ってたけどな」

「僕だって人間だよ。ストレスぐらい溜まるさ。まあ患者を見るとある程度は吹き飛ぶんだけどね」

冥土歸し（ヘヴンキャンセラー）はまだ半分ぐらいしか吸っていないタバコを携帯灰皿にしまおうと垣根の方に振り返る。

「浜面君の命に別状はないのは事実だよ、そこは信用してくれないかな」

真っ直ぐな目で垣根を見つめながら冥土歸し（ヘヴンキャンセラー）は言った。

「……じゃあ、あの作り笑いの意味は何だ」

若干冥土歸し（ヘヴンキャンセラー）をにらみながら垣根は尋ねた。冥土歸し（ヘヴンキャンセラー）は表情を暗くするとはっきりと言った。

「結果だけを言うとね、彼はもう一生自力で走る事も歩く事も立つ事も出来ないだろう」

垣根は言葉を失った。

「多分何か刃物の様な物が彼の脊髄に損傷を与えていた。多分今の彼の下半身にはもう感覚すらもないと思う」

「・・・それは本当なのか」

垣根は微かな希望を持って冥土歸し（ヘヴンキャンセラー）に尋ねた。

「僕が患者に関して嘘を言うと思ってるのかい？」

希望はあっけなく潰れた。

冥土歸し（ヘヴンキャンセラー）の表情は、患者を全快に出来なかった悔しさで満ち溢れていた。

「ちくしょうが・・・」

また助けられなかった。垣根はこの時、改めて自分の無力さを思い知った。結局、自分のこの力、学園都市の第二位の力は誰も救う事は出来ない。出来るのは何かを壊す事だけ。

「ちくしょおがああああ！！！！」

屋上に垣根の叫びが虚しく響いた。

（君達は一体何度、僕に無力さを思い知らせるつもりだい？『シー

ズン』よ)

冥土歸し(ヘヴンキャンセラー)はただ拳を強く握るだけだった。

祥吾は科学者だ。それも学園都市No.1とも称される程の天才科学者。主席で長点上幾を卒業し、AIM拡散力場に関する論文で史上最年少で博士号を獲得するなど限りなく完璧に近い人生を謳歌していた。いや、している様に見えた。

彼には一部の人間しか知らない悲惨な過去があつた。誰もが羨む様な彼の人生はあの日から続いているのだ。煌びやかな飾りの下に潜む、押さえきれない程の憎しみと殺意に満ちた人生が。

祥吾はハッ、と目を覚ました。祥吾が今いるのは彼が通つているとある研究所の彼の自室。若干二十歳で祥吾はこの研究所のトップを務めている。

『シーズン』の集会を終えた彼は現在進行中の研究のレポートをまとめようと自室に籠っていたのだが、どうやら眠ってしまつてらしい。

(チツ、またあの夢か……。何で今更になつて……)

祥吾は机にあつたコーヒーを一口啜ると先程までの悪夢を無理矢理振り払う。淹れてから時間の経っていたコーヒーはすっかり冷めてしまつていた。

(不味いな……)

冷めたコーヒーの不味さをたっぷりと味わった祥吾は机の引き出しから何かを取り出した。

それは写真だった。写っているのはまだ十代の頃の祥吾、そしてその隣にはポブカットの髪型にピンクのジャージを着た少女。二人共、満面の笑みでカメラに向かっていた。

（俺でもこんな風に笑えたんだな・・・）

祥吾はそう遠くない自分の過去を思い出す。

今の自分はこの写真の様に笑えるだろうか？答えは否だ。祥吾の人生に満面の笑みという言葉は死んだのだ。人生で二度、彼は笑うという事を忘れてしまった。

（これを見てるとつくづく思い知るぜ。お前はもう俺の事を忘れてるんだよな・・・滝壺・・・）

『アイテム』の目の前に現れた祥吾を見る滝壺のあの目は、明らかに敵意が秘められていた。それを見て祥吾は改めて認識したのだ、もう彼女は俺の事など覚えていない。彼女の頭の中には俺は存在しないという事を。

（間違い、ってのはいつも終わってから気付くもんだな・・・滝壺）

祥吾の頬には、何時の間にか一筋の涙が流れていた。

『desperatio666』

「まず始めに言っとくが、オウルセレクト事象選択はオレの本当の力じゃねエ」

神裂とステイルは意味がわからないといった表情をする。大和は無視して続けた。

「正確に言えばオウルセレクト事象選択はオレの本当の力の副産物みてエなもんだ」

「副産物……ですか？」

「そうだ。ところで神裂、オレは完全聖人だと言ったが完全聖人とは何だっけ？」

大和はわかりきった質問を神裂に尋ねた。

神裂は直ぐに答える。

「完全聖人は私の様な聖人とは違い神の身体的特徴をそのまま備える者です……ってあなたが私に言ったではありませんか！」

神裂は若干イラッとして言った。

「まアそオ怒るな。じゃア次だ。神の身体的特徴をそのまま備える、って言ったが何の神の特徴を備えてると思う？」

神裂は言葉に詰まる。

確かにそれは気になる。一体大和は何の神をモデルとした完全聖人なのか。

「テメエ等は全知全能の神って知っているか？」

大和は二人に尋ねた。

「僕達の間では全知全能の神はゼウスだと認識している。もっともそんな神が存在するならの話だけどね」

ステイルがスラスラと答える。流石に神父なだけな事あって神学に
関しては詳しいようだ。

「で、それがどうかしたのかい？」

「思い出してみる。オレと神裂との戦闘を。オレは一体どんな闘い
方をしていた？」

「君は僕達をからかってー」

そこでステイルは気付いた。大和が一体何を言わんとしているかを。
神裂もどうやら気付いた様で、信じられないといった表情をしてい
る。

「まさか、あなたの聖人のモデルは・・・」

大和はニヤリと笑みを浮かべ、はっきりと言った。

「そうだ。オレの聖人のモデルは全知全能の神であるゼウス。オレ
が能力以外の力を扱えるのはその力があるからこそだ」

「・・・だがそれと君の事象選択オールドセレクトと一体何の関係がある？」

「オウルセレクト事象選択は『全知』の力を否定した結果産まれた能力だ。オレは常に全知全能の『全知』の力を拒絶している。結果がわかってるなら事象を選択する必要はねエからな」

とんでもない事をスラスラと言つてのける大和。神裂とステイルは理解が追い付かない。

「『全知全能』（ゼウス）はオレの切り札だ。切り札、つてのは最後まで取つて置くもんだからなア。最初ハナから見せてたら意味がねエ」
そこでステイルはある事の気付いた。

「ちよつと待て。じゃあ君は最初からあの子の事を知る手段がありながら僕達に何も言わなかつたつて事かい・・・？」

ステイルは声を震わせながら尋ねた。

『全知全能』（ゼウス）の力があればインデックスの事は勿論の事、自分や神裂のしてきた事が過ちだつたと知る事が出来た筈なのだ。

「その通りだ。その気になりゃアそれぐれエの事なんざ直ぐにわかつたぜ」

「何故黙つていた。僕達はいい、何故あの子に真実を伝えなかつた」
ステイルの声には明らかな怒りが秘められていた。
だが、大和はそんな事は完全に無視して言い放つた。

「初めから結果がわかつてるなんざ面白くも何ともねエだろ？それにオレはあのチンチクリンを助ける気なんざこれっぽっちもねエからな」

そこでステイルは我慢の限界を超えた。返事の変わりに大和に向かって炎剣を飛ばす。

「・・・やはり君はここで殺す」

凄まじい殺意を身に纏いながらステイルは吐き捨てる様に言った。

「ステイルツ！！止めなさい！！彼はあの子を救うのに必要な存在なのですよ！！」

神裂がステイルを必死に制止しようとするが、ステイルはきっぱりと言い切った。

「必要ないさ。原因はわかった、後は僕達だけでもやれる」

ステイルがそう言ったのと同時に、轟！と燃え盛る炎の中から大和が現れる。

「熱っちいなア」

本当にそうなのかわからない程、大和は自然に言った。

「そしてムカついた。余程早死にしてエラしいなア」

大和は童顔に似合わない物騒な発言をすると、首をコキコキと鳴らしながらステイルに接近する。

「ついでだ、神裂。もう一つ面白エもん見せてやるよ」

そう言うと大和は静かに目を閉じた。
そして再び開かれた目にはある変化があった。大和の両目の瞳は何
時の間にか赤一色に染まっていた。
そして大和は決定的な一言を呟いた。

「desperatio666」

その言葉を口にした途端、大和の雰囲気ガラリと変わった。変わ
ったのは雰囲気だけではなく、彼の周囲に暗闇の中ですらもはつき
りと識別出来る程のドス黒い『何か』が発生した。

「な、なんだと……!!」

「そんな……まさか……」

ステイルと神裂の表情にら驚愕の色が浮かんでいた。何故なら大和
が口にした言葉は紛れもなく『魔法名』だったからだ。

「言っのを忘れてたが……」

そんな二人を余所に大和は静かに言った。

「オレは能力者でもあり魔術師でもある。順序が逆になっちまった
なア」

不敵な笑みを浮かべながら、大和はステイルに接近する。

「オレの魔法名の意味は『示されし選択は全て絶望に向かう』だ。
せいぜい足掻いてみせるんだな」

大和はステイルに向かって指を向ける。それに従うかの様に、大和の周囲で鵜ねっていた『何か』がステイルに襲いかかった。ステイルは『何か』に向かって炎剣を飛ばすが炎剣はドス黒い『何か』に吸収されてしまった。

「ッ！！」

ステイルは反射的に横っ飛びでそれを躲す。

「中々良い動きしてんじゃねエか」

余裕の笑みを浮かべながら大和は言う。対照的にステイルの表情には焦りの色が浮かんでいた。

（何だ、あのドス黒いのは・・・）

自分の放った炎剣をいとも簡単に飲み込んだ『あれ』の正体をステイルはまだ掴みきれていなかった。戦闘において最も重要な事は、まず相手の力量を測り、相手の力の正体を見抜く事だとステイルは思っている。この場合、ステイルは大和の力量まではわかっている。だが、あのドス黒い物の正体はまだわかっていない。

（まずいね・・・。こっちの手の内は全部筒抜けだったのに、ヤツにはまだ隠し玉があったとはね・・・）

大和とステイルの戦闘力は圧倒的という次元を超える程の差がある。ステイルの限りなく小さい、ただ一つの勝機は大和の力を見抜き、その裏を突く事だったのだがその目論みは完全に潰えた。

「何追い詰められた面してんだア？喧嘩売ってきたのはテメエの方だぜ？」

「クッ！」

「安心しな、殺しはしねエよ。ただ……一発ぐれエは貰ってもら
うぜ」

そう言うと大和は右手をステイルに向ける。

「『引き寄せよ（トラエ）』」

まるでその言葉に従う様にステイルの体が一人で大和に向かって
飛んで行く。

「なにっ！！」

飛んで行く先には大和が握り拳を構えている。

「終わりだよ！！ 不慮神父！！」

大和の拳は完璧にステイルの顔面を捉え、そのままステイルは10
m程後ろに吹き飛んだ。

「うーん、鼻が折れちまったかもなア。まアお得意のルーンで何と
かするんだな」

意識が飛んでしまっているステイルに大和は告げた。

大和がステイルを殴り付けた事以外、何が起きたか理解出来ない神
裂は目を点にしている。

「何て情けねエ面してんだ。そんなにオレの魔術が珍しかったのかア？」

「何故あなたが魔術を……。能力者に魔術は使えない筈では……」

「オレをそこら辺の能力者サコと一緒にすんじゃないよ。オレに『普通』って言葉は当てはまらないんだよオ」

そう言つて大和は神裂から背を向ける。

「一つだけ教えて下さい。何故あなたはそれだけの力を持ちながら世界に敵意を向けるのですか……？」

「あア？」

「始めてあなたと顔を合わせた時も、今もそうでした。あなたの目は常に誰かに敵意を向けている様に思います。何故ですか？限りなく無敵に近いあなたが何故……」

大和は押し黙った、そして静かに目を閉じる。10秒程経って、再び目が開かれた時には彼の周りに渦巻いていた禍々しいまでの敵意はなくなっていた。

「……憎いんだよ、自分が。この神鬼大和ハケモノがな」

大和は静かに語り出した。

「自分が、憎い……？」

「オレは二つ大切な物を失った。一つ目は家族だ。お袋も親父も妹も弟も、全てな。二つ目は・・・親友だ。オレには親友がいた。掛け替えのねエ存在だった。だがそいつはオレの事を知り過ぎてしまった。だからもう、関わる事は許されねエ」

神裂は静かに大和の言葉を聞いていた。絞り出す様に語る、大和の言葉を。

「最初は神様、つてのを恨んだ。これは神様の悪戯だ、つてバカみてエに信じた。だが、ある日気付いちまったんだよオ」

大和は自虐の笑みを浮かべながら言った。

「神様の責じゃねエ、全部オレが、オレのこの力が蒔いた種だ、つてなア」

神裂は何も言わなかった。言えなかった。

大和の表情は神裂の反論を許さない程、悲しく歪んでいたからだ。

「オールセレクト事象選択も完全聖人の力も、結局は他人を不幸にする事にしか使えない。オレのこの力が誰かを不幸にする。オレは無敵なんかじゃねエ、周りに誰も、何も残らないからそオ見えるだけだ」

大和は空を見つめながら言った。

「昔、ある野郎に言われたんだよ。『強大な力が向かう所は破壊しかない。まさしく君がそれだ』つてな。全くその通りだと思つよ。現にオレは壊す事しか出来ない。何かを守る事でも敵を潰なきゃア何も守れやしねエ」

そう言った大和の表情はとても悲しそうだった。普段の彼を知る者なら到底考えられない様な表情をしていた。

「あのチンチクリンの事、しっかり守ってやれよ」

そう言って大和は文字通り消えた。比喻ではなく本当に消えたのだ。

（神鬼大和・・・一体あなたはどれだけの闇を・・・抱えているのですか・・・）

残された神裂はただそう思う事しか出来なかった。

『案内人』（前書き）

今回からasutaさんの永松 大王が登場します！

『案内人』

神裂達と別れた大和は『窓のないビル』に来ていた。アレイスターにとある頼みを聞き入れさす為にだ。

「イギリス清教の最大主教アイクビショップと話したいたと？」

突然の大和の依頼をアレイスターは復唱する。表情に一切の変化は見当たらないが、どこか驚いている様にも見えた。

「そオだ、テメエならそれぐらいの事朝飯前だろ？」

「出来ない事はないが、何故だ？」

「一々理由を言わねエといけねエのかア？ 偶にはオレの頼みも黙って聞き入れるよ」

大和は若干イライラしながら言い返した。

「相手はイギリス清教のトップだ。察しの良い君ならこれだけ言えば理解出来ると思うが」

「面倒くせエ野郎だ」

大和は溜息を吐くと、理由を話し始める。

「気に食わねエんだよ、あのクソ野郎が。人様の気分を散々害しやがったあのクソ野郎がな。あいつが送り込んで来た魔術師サキトモのおかげでオレの気分は最悪なんだよ。少しぐれエ文句でも言わねエと気が

済まねエんだよ」

大和は淡々と理由を述べる。

「だからヤツと話をさせる。テメエに拒否権はねエから勘違いすんじゃないねエぞ」

「拒否権はなしか・・・随分と横暴な頼み方だな」

「今更何言ってやがる。テメエとオレは利害関係でしか結ばれてねエだろオが」

「私にメリットがあるとは思えないがな。寧ろデメリットしかない様にも感じるが？」

アレイスターがそう言うのと大和はニヤリと口元を歪ませる。

「その為にオレがいるんだろ？ 学園都市最強のこのオレが」

アレイスターも大和と同じ様に口元を歪ませながら言った。

「違くないな」

その言葉は交渉成立を意味していた。

「君の携帯に彼女への連絡先を登録した。だが、相手はイギリス清教のトップ。くれぐれも扱いには気を付けてたまえ」

「一々うっせエんだよ、クソ野郎が」

最後の最後まで暴言を吐き捨てて、大和は消えた。
一人残されたアレイスターは笑みを浮かべる。

「再び彼に振り回されるといい、イギリス清教よ」

『窓のないビル』から出た大和は人通りの少ない場所に来ていた。
大和はポケットから仕事用の携帯を取り出すと番号を確認する。

「アークヒショツブ最大主教・・・これだな」

大和は登録されている番号にさっそく電話を掛け始める。

『私の番号に直接掛けたるとは・・・誰でありけるか？』

しばらくして意味不明な日本語が電話の向こうから聞こえた。

「よオ、久しぶりだなアークヒショツブ最大主教。相変わらず意味不明な日本語みてエで安心したぜ」

『・・・誰だ？』

アークヒショツブ最大主教の声が先程とは打って変わって警戒の色が含まれた物になる。

「おいおい、忘れたのかア？ このオレを？ 一年前、テメェんと

この魔術師15人程虐殺したこのオレを？」

電話の向こうから最大主教アイクヒショツブの息を飲む声が聞こえた。

『貴様・・・何用得私に連絡してきた！！』

怒りを隠す事なく最大主教アイクヒショツブは怒鳴り付けた。

「素が出てんぞ、素が。その様子じゃアちゃん覚えてくれてたみてエだなア」

電話越しでも表情がわかるぐらいに、大和はバカにした様に言った。

『忘れる訳がなかるう！！ あれだけの事をしておいてよくも抜け抜けと！！』

「その割にはオレの声だけじゃ思い出せなかつたよなア」

『黙れっ！！！！』

「まあいいや。本題入るぜ、テメエんとこの魔術師が随分と暴れたみてエんだけど知ってるかア？」

最大主教アイクヒショツブは何も返さなかった。それを肯定と判断した大和は更に続ける。

「それだけなら問題はねエんだが・・・生憎そいつ等はオレの気分を不快にしちまつただけだよオ、どオ責任取ってくれんだア？」

『責任だと・・・！！』

「そつだ、責任だ。本当ならオレを不快にした瞬間、死刑決定なんだが事情があつて特別に生かしておいている。だがこのままじゃオレが泣き寝入りしたつう構図だ。それだけは絶対エ認められねエ」
だから、と大和は付け加えて、

「上司たるテメエに責任に取つて貰オカと思つてなア」

大和の提案を最大主教は、
アークビショップ

『上司の尻拭いをするのは部下という言葉を知っているか？オウルセレ事象選
択、完全聖人』

冷笑を浮かべながら一蹴した。

「・・・そつか、なら仕方ねエなア。こつちも強硬手段に出るしか
ねエなア」

『強硬手段・・・だと？』

大和はニヤリと笑うと言つた。

「テメエは何にもわかつてねエ。自分の置かれている状況をまるで
理解していねエ」

『どついつ事よ？』

「いいか？テメエの大事な禁書目録は今学園都市にいる。それがど
ういう事かわかるかア？」

『フン、禁書目録風情で私が承諾するとても？随分と舐められたものね』

「勇ましいな。だが残念だ、本当に残念だよ」

『・・・何を言っている？』

大和はククツ、と笑みを浮かべながら言った。

「禁書目録がもし、頭ん中の禁書を使ってイギリス清教に反乱を起こしたらどオなるかなア」

アイクヒシヨツテ
最大主教は一瞬、目を見開いたが直ぐに大和へ反論する。

『残念だけど、禁書目録には魔力という物は保有していないのよ完全聖人。浅はかな考えだったわね』

それを聞いて大和は勝ち誇った様に言った。

「浅はかなのはテメエだ。忘れたのか？ オレの能力、オイルセレクト 事象選択を」

最大主教はそこで気付いた。大和が何を言わんとしているのかを。

『まさか貴様・・・』

「テメエの予想通りだ。オイルセレクト 事象選択で『魔力を持っていない』って事象を『魔力を持っている』つつ事象に変換すればいい。大変だろオナア、何せ10万3000冊の禁書を頭ん中に叩き込んでる野郎だ。そんなヤツに反乱でも起こされたひとたまりもねェんじゃねエ

の？」

『嘘だな……。貴様にそんな事出来る筈がない。貴様の能力は他人には直接使用出来ない筈だ』

(やっぱりそう来たか。だが……)

「おいおい、何時の話してんだア？ 一年もありゃアそれぐれエ出来るつつうの！ バカじゃねエの、テメエ」

『っ！！』

最大主教アークヒショツは何も言い返せなかった。

(確かにヤツの能力を見たのは一年も前の事。この一年間で何かしらの成長があってもおかしくない……。もしヤツの言う事が本当なら……！)

だがそこで最大主教アークヒショツはある事を思い出す。

(いや、禁書目録には『アレ』がある例え反乱を起こそうとも『アレ』がある限りー)

「あー、一つ言い忘れたわア」

最大主教アークヒショツの思考の上に重ねる様に言った。

「禁書目録の仕方のタネはとっくにバレてるぜ。何考えてんのか知らねエが止めとけ。骨折リ損になんのがオチだ」

今度こそ最大主教は完全に詰まれた。

（こいつ……！ 『アレ』の事まで！ 一体こいつどこまで知っている！？）

（バアーカ！ 知る訳ねエだろ！ 禁書目録に何か仕方をしてんのはわかってるが正体まで知る訳ねエだろ！）

最大主教の考えの裏で大和は罵倒する。

（ついでに能力の事も真つ赤な嘘だ。ここで重要なのはこのアホに『もしかしたら』って考えを持たせる事だ。不安は人間の冷静さを著しく低下させるからなア。今頃頭ん中ではクルクルといろんな事が回転してんだろ）

大和はニヤリと笑みを浮かべる。

（さて、どうくるクソ野郎。もう詰んでんだろオ？）

しばらく沈黙が続いたが最大主教が観念した様に口を開く。

『……何が望みだ？』

（間抜け過ぎんぜこいつ！ ここまでアホだと最早哀れみすら感じるぜ！）

と、そんな気持ちは口出す筈もなく、

「流石は最大主教様。物分りが良くて助かるよ」

適当に当たり障りのない発言をした。

『余計な事はいい！ 何が望みだ！ 私の命か？ それともイギリス清教そのものか？ さっさと言わんか！』

「テメエの命もイギリス清教もいらねエよ。んなもん貰ったところで何もなんねエだろ」

大和は一呼吸置くと望みの物を最大主教に告げた。
アークビショップ

「オレが欲しいのはテメエ等が保管してる『Fatum』つつう禁書だ」

大和の要望に最大主教は言葉^{アークビショップ}を失った。あろう事か禁書を寄こせ、と言われたのだ。

『ふざけるな！！ 貴様・・・一体何が目的でそんな物！！』

大和は大きな溜息を吐くと言い放つ。

「テメエが知る必要はねエよ」

『黙れ！！ 貴様あの禁書が一体どの様な物かわかっているのか！！』

「当たり前だろオが。だから寄こせと言っただよ」

大和は面倒くさそうに答える。

『既に世界をその手に収める事が出来る程の力を持つ貴様が・・・』

これ以上一体何を望む!!」

アイクビシヨツブ 最大主教は理解出来なかった。その気になれば世界など簡単に滅ぼす事が出来る者がこれ以上何を望んでいるというのか。

「テメエの言う通り、オレには既に世界を手取るぐれエの力は持っている。だが、そんなオレにもまだ一つだけ手に出来ないもんがあるんだよ」

『なんだと・・・?』

大和は一瞬目を閉じたかと思うと直ぐに見開き、笑みを浮かべながら言った。

「『運命』だよ、アイクビシヨツブ 最大主教。オレにはまだ『運命』を操る力を持っていねエんだよ」

アイクビシヨツブ 最大主教はまた言葉を失った。この男は『運命』つまり『時』すらも自分の物にしようと言うのか。

「どんな偉大な指導者共も、時の流れ、運命には逆らえなかった。だがオレは違う。『Fatum』さえあればオレは完全になれる」

大和は淡々と自分の野望を述べる。アイクビシヨツブ 最大主教は何も言い返せなかった。

「オレはこのクソツタレな自分の『運命』をゼロにする。この忌々しい自分の『運命』に逆らいたいんだよ」

『それで「Fatum」と言う訳か・・・』

「理解が早くて助かるよ。だからそれを寄せ。禁書の一つぐれエテメエならこつちに送れんだろ？」

大和は勝ちを確信した。このアホは必ず承するだろう、そして具体的な話を切り出してくるだろう、と大和は確信していた。

『悪いが断る』

最大主教アイクヒシヨツテの返答は大和の予想とは真逆のものだった。

「断る、だと？」

『残念だが貴様にアレを渡す訳にはいかない。あの禁書は真正銘世界を滅ぼす力だ。そんな危険な物を貴様なんかに渡す訳にはいかない』

「……どうやら想像以上に可哀想な頭してやがんな。禁書目録に反乱を起こされてもいいのかア？」

最大主教アイクヒシヨツテはフツ、と鼻で笑うと一蹴する。

『禁書目録風情が反乱を起こしたところで何も意味はなきけるのよ、坊や』

そこで大和の頭の中で何かが切れた。

「オーケー、つまりあれだな？ 世界の為なら自分達は滅んでも構わない、つつう事だな？」

『ほざけクソガキが。世界も私達も滅ぶ気はサラサラない』

「・・・なるほど、よほど早死にしてエらしいなア」

『言いたい事はそれだけか？ では、さようなら坊や』

そこで電話は一方的に切られた。

壊れてしまいかねない力で大和は携帯を握り締める。

「面白エ、面白エじゃねエか。このオレに喧嘩売るつたアいい度胸してんじゃねエか」

大和は狂った様な笑みを浮かべながら学園都市の夜に消えて行った。

垣根帝督は真つ黒な路地裏にいた。その表情は敵意で満ち溢れ、いかにも近付くなというオーラをガンガンに醸し出している。

（確かあのクソ野郎はこの辺りで、って言ったな。どこにいやがんだ！）

イライラを微塵も隠そうとせず、垣根はキョロキョロと辺りを見回す。

垣根がここに来たのはある情報屋と会う為だ。その情報屋は落ち合う場所をこの路地裏と指定してきたのだが約束の時間を過ぎても一向に姿を現さない。

垣根の中でイライラが段々と殺意へと変化していく。

と、その時、轟！ と音が鳴ったかと思うと突然大量の水が垣根に襲いかかってきた。

垣根はポケットに手をつ突っ込んだまま翼を発現させると、難なく大量の水を防ぐ。

「冷てえなあ」

服をビシヨビシヨにされた垣根は後方を睨み付けながら言う。

「そして最高にムカついた。余程愉快な死体になりてえとみえる」

垣根は翼から月の光を反射させ作った殺人光線を後方に向けて放つ。恐ろしいまでの熱量を持つ光線は周囲の壁をグニャグニャに溶かし、地面に直撃する。

「ひどいなあ。ちょっとした遊び心じゃないか」

地面の溶解により発生した白い煙の中から少年の声が聞こえる。

「ボクじゃなかった確実に死んでたよ。お気に入りの服が少し焦げちゃったよ」

「殺してやるつもりだったんだが・・・まだ生きてんのか。全く盛って残念だ」

垣根は本気で残念がりながら言い放つ。

「本末転倒だよ、垣根帝督。ボクに死なれて困るのは君の方じゃないかな？」

少年はクスクスと笑いながら言った。

「勘違いしてんじゃねえぞ。てめえなんざ数多くある手段の一つにしか過ぎねえんだよ。つけあがってんじゃねえぞ」

垣根は翼を展開したまま言った。その行動から垣根がいかに関心しているかが伺える。

「まあいいや。ボクとしてもここで君とやり合うつもりは微塵もないからね。ここは仲良くいこうよ、学園都市の第二位の垣根帝督」

煙の中から現れたのは学園都市屈指の名門校である長点上幾のブレザーに身に纏い、どこか人懐こい印象を受ける少年だった。だが印象とは裏腹に異常なまでの狂気を感じる。

「いつ見てもクソみてえ面だな。社会の為にもさっさとくだばる事をお勧めするよ」

「人の人相を悪く言うのは良くないなあ。君の悪人面こそ、社会にとって迷惑だよ」

垣根は頭が沸騰しかけたが直ぐに冷静さを取り戻す。

「んな事はいい。電話で話した事をさっさと教えろ」

「君は本当に自分勝手だね。まあボクも負けてないけどね」

すると、突然水が発生し少年は椅子の様にその水の上に座った。

垣根は何も言わない。

「確か『シーズン』の事だったね。君もモノ好きだなあ、あんな連中の事を知りたがるなんて」

何が可笑しいのか、少年はクスクスと笑みを浮かべながら言った。

「てめえには関係ねえ事だ。余計な事ほざいてんじゃねえよ」

垣根は吐き捨てる様に言った。

「で、彼等の何が知りたいのかな？ 君はボクのいい顧客だからね、話せる事は何でも話すよ」

ニコツと子供らしい笑みを浮かべながら少年は言った。周りを覆う凄まじい狂気さえなければどこにでもいる普通の少年に見えただろう。

「まずはやつ等の正式な人数と構成員の名前だ」

垣根はとりあえず最初の質問を少年にぶつけた。

「『シーズン』は全員で五人で構成されている組織だね。所属しているのはリーダーの『小野寺 朱雀』を筆頭に『柊夜野 透』、『神野 慈雨』、『岩見 祥吾』」

そして、と少年は付け足して、

「『神鬼 大和』の五人だよ」

大和の名が出た事に垣根は一瞬、動揺したが直ぐに冷静さを取り戻

した。

「それぞれの詳しい略歴は」

「残念だけど、それはボクでもわからないよ。なにせ『シーズン』は暗部の中でも規格外の機密レベルだからね。構成員に関する詳しい略歴はほとんど消去されてるよ」

「じゃあやつ等の活動方針は何だ？ どうして学園都市はそこまでしてやつ等の存在を隠す？」

「それは彼等『シーズン』が他の暗部を監視する暗部だからだよ」

「暗部を監視する暗部だと・・・？」

垣根は思わず少年に聞き返した。

「『シーズン』の他の暗部との一番の違いは暗部でありながら風紀ジャッジメント委員や警備員をも上回る、強い権限を持っている事。つまり彼等は不正ではなく合法的にも君達暗部を監視し、抹殺する事が許可されているんだよ。もちろん、彼等は風紀委員とか何かと協力する気は全くないと思うけどね」

そして、と少年は付け足して、

「構成員の何人かは科学とは真逆の世界、つまりオカルト魔術との強い繋がりを持っている。『シーズン』という存在は最早学園都市だけでは収まり切れないんだよ」

垣根は少年の言っている事が全く理解出来なかった。

もし、この少年の言っている事が全て真実ならば大和は既に自分とは別次元の存在にいる、という事になる。

「……どうすればやつ等と接触出来る？」

少年は呆れた様な表情をして言い放つ。

「止めておいた方がいいよ。彼等に近付こうとした者はみんな例外なく殺されてる。第二位の君でもタダでは済まないよ」

そんな事、百も承知だ。初めから何のリスクもなしに『シーズン』に、大和に近付こうなど思っていない。

何としてでも親友を、大和を学園都市の闇の底から救い出す。垣根の覚悟はどんな物よりも固かった。

「余計な心配してんじゃねえよ。知ってるなら知ってる、知らねえなら知らねえってはっきり言いやがれ」

垣根の言葉を聞いて少年は心底呆れた様な表情をして言った。

「……第三学区の一番高いホテルの屋上のプライベートルーム。そこが『シーズン』の隠れ家の一つさ。本気で死ぬ覚悟あれば行くといいさ」

それを聞いて垣根は少年に背を向けると言い放つ。

「余計なお世話だ。クソ野郎が」

礼の代わりに暴言を吐き捨てた垣根は翼を羽ばたかせ、どこかに飛んで行ってしまった。

垣根の姿が消えたのを確認して少年は誰もいない筈の後方に向かって声を掛ける。

「こんな感じいいですか？ 『案内人』さん。いや、九条 静音さん」

少年の声に応えるかの様に姿を現した女性はかつて置き去り（チャイルドエラー）の保育所で大和の担当だった、彼の恩師、九条 静音だった。

「にしても君は本当に面白いよ。垣根帝督を消す為にワザワザこんな手の混んだ事するなんてさあ。面白いけど理解は出来ないよ」

「あなたが理解する必要はありませんよ、自称『情報屋』の永松ながまつ大王君」

永松は九条に背を向けたまま尋ねる。

「そんなに彼の事が大事かい？ 神鬼 大和の事が」

「当たり前です。大和君はこの街の切り札ですからね」

九条は当然の様に答えた。

だがその表情には何か別の思い入れがあるかの様にも感じる。

「本当にそれだけなのかな？」

「……言っている事の意味がよくわかりませんが」

「隠す必要はないよ。僕は知ってるよ、彼が君の血の繋がっていない義弟で唯一の家ぞー」

永松の言葉はそこで途絶えた。何故なら九条が彼の首を凄まじい力で締め上げたからだ。

「おしゃべりが過ぎますよ！！ 永松 大王！！ 『口は災いの素』
って言葉知らないんですか！！」

目が全く笑っていない笑顔で九条は永松に怒鳴る。

「そうだね、少し喋り過ぎたかな？ 不快させたなら謝るよ、九条
静音」

苦しそうに声を出しながらも笑顔で永松は詫びを入れた。
それを聞いて九条は永松の首を手から離す。

「だけど大丈夫なのかい？ こんな事、アレイスターに知られたら
君だって危ないんじゃないかな？」

ゲホツゲホツ、と咳込みながら永松は尋ねた。

「理事長も既に知っている筈です。それでも何の妨害もないという
事は問題なし、という事ですよ」

九条はキツパリと言い切った。

「なら、いいんだけどね。君のせいで僕もアレイスターに睨まれる
のはゴメンだからね」

「心配はいりませんよ。理事長もあなたには手出し出来ませんからね」

「……君のその言葉、とりあえず信用しておくよ」

「とりあえずとは言わず、信用してください」

九条は明らかな作り笑いで永松に言った。

「ねえ一つ聞かせてくれないかな？」

「なんです？」

九条は面倒くさそうに聞き返した。

「垣根帝督の相手は一体誰にさせるつもりなのかな？」

「……何故そんな事聞くんですか？」

永松はニコツと笑みを浮かべながら答える。

「だって気になるでしょ？ 学園都市の第二位の最期の相手だよ？
どんな無様な醜態晒すか気になるでしょ？」

「その言い振りだと第二位が死ぬ事が前提に聞こえますね」

「その為に僕に『シーズン』の情報を伝えさせたんだろ？」

九条はその通りだと言わんばかりにフツ、と笑みを浮かべた。

「彼は腐っても学園都市の第二位です。ですからその序列には似合わない無様で、惨めで、情けなくて、圧倒的で、哀れで、醜くて、可哀想な死に様を用意しましたよ。彼の相手にはそれに相応しいのを用意しました・・・」

そして九条は静かに告げた。

「『シーズン』のリーダーである小野寺 朱雀をね。」

垣根の死へのカウントダウンは少しづつだが、確実に近付いていた。

新しい可能性（前書き）

名前だけですがこなたさんの綾季とライエが登場します！

新しい可能性

「あのホテルか・・・」

垣根 帝督は第三学区にいた。地上ではなく上空に。翼を羽ばたかせながら目標であるホテルの屋上のプライベートルームの位置を確認していたのだ。

(位置は確認した。さて、どうやって入る?)

垣根は一瞬、考えるが直ぐに答えを決めた。

(真っ正面から突っ込む!)

垣根はホテルに向かって一気にスピードを上げる。ドカーン!と凄まじい爆音と共に垣根は文字通り、真っ正面から突っ込んだ。異変に気付いた他の客がドタドタと逃げ出す音が聞こえるが垣根は気にも留めない。

「さてと、何から片付けるか・・・」

垣根はキョロキョロと部屋の中を見回す。

見たところ普通のプライベートルームの様に見えるが、

(まあ『スクール』の隠れ家もこんな感じだからな。気にする必要はねえ)

垣根が適当に部屋を物色しようとしたその時だった、バゴーン! と部屋の入口が盛大に吹き飛ばされ、ドアが垣根に向

かつて飛んで来る。

垣根は翼を発現させ、ドアをバラバラに切断する。

「全く……『案内人』から侵入者が来るって知らせが入ったから来てみたら、まさかあなただったとはね……垣根 帝督」

入口の向こうから女性の声が聞こえた。

「ああ？ てめえ何者だ？」

垣根は翼を発生させたまま威嚇する。

「それは私の台詞だけど……まあいいわ。私の名前は小野寺 朱雀。あなたが求めていた『シーズン』のリーダーよ」

垣根は返事をする事なく代わりに未元物質の羽を飛ばす。だが垣根の飛ばした羽は朱雀の前で砂に変わる。

(なにつー!!)

垣根の表情は驚愕の色に染められる。未元物質はこの世に存在しない物質だ。それを砂に変える事など出来る筈がないのだ。だが現に未元物質は砂に変わった。垣根は理解出来なかった。

「酷いわね。いきなりレディに向かって攻撃だなんて」

朱雀は余裕の笑みを浮かべながら言った。

「レディ、だあ？ 笑わせんな。暗部の野郎が何ほざいてやがる」

垣根は翼を展開したまま吐き捨てる様に言った。

「失礼な子ね。少しばかりお仕置きが必要かしら？ 坊や」

朱雀の言葉が垣根の逆鱗に触れたのか、垣根はこめかみをピクピクと動かしながら言う。

「流石に今のは温厚な垣根さんもカチーンときちまったぞ。よほど愉快的死体になりてえとみえる」

翼を少しづつ羽ばたかせながら垣根は言い放った。

「威勢はいいわね。でも、何分保つかしら？」

垣根の怒りはそこで沸点を超えた。

「オーケー、オーケー。てめえはここで殺してやるよっ！！」

垣根は翼から先程よりも数倍の羽を朱雀に放つ。

無数の羽が四方八方から朱雀に襲いかかるが朱雀は逃げる素振りすら見せない。

「気の早い子ね。せつかちな子は嫌われるわよ」

朱雀がそう言ったのと同時に、彼女の周りから何やらキラキラと銀と青に輝く粒子の様な物が発生する。

(何だありゃ？ 粒子か？)

非常に綺麗な輝きを放っているが、どこか得体の知れない異様を感

じる。

だが垣根の思考はそこで止まった、いや止められた。何故なら彼の放った羽は朱雀の周りに発生している粒子に触れた途端、砂に変わったからだ。

「あなたラッキーよ。『裏の序列』（ブラックリスト）のレベル5の能力を見られるなんて」

レベル5という言葉に垣根は敏感に反応した。

「レベル5だと・・・!？」

自分と同じレベル5は音信不通の第六位を含め、全員顔と名前、能力は把握している。その中に小野寺 朱雀という名前もあの様な能力もなかった筈だ。と言うより、未元物質を砂ダークマターに変える能力など聞いた事もない。

それにもう一つわからなかったのは朱雀が言ったあの言葉、

「『裏の序列』（ブラックリスト）」

垣根も一暗部組織のリーダーだ。それだけに扱える機密レベルも決して低くはない。だが『裏の序列』（ブラックリスト）という言葉など聞いた事は一度もない。

「その様子じゃわからない事だからみたいね。何がわからないのかしら？ 私の能力？ それとも『裏の序列』（ブラックリスト）かな？」

「情けねえが何一つとしてわからねえよ」

垣根は素直に答えた。

「まあそうでしょうね。『表の序列』（レギュラーメンバー）の第二位程度のあなたが知る筈もないわね」

垣根は無駄だとわかりながらも羽を飛ばしながら尋ねる。

「教える。てめえの能力は何だ？ 『裏の序列』（ブラックリスト）ってのは何だ？」

「欲張りさんね。強欲はその身を滅ぼすわよ？」

羽を砂に変えながら朱雀は言い放つ。

「俺は欲しい物は全てに手に入れる。何時だってそうやって生きてきた。これからもな」

「ふーん。じゃあ今あなたが欲しい物は何かしら？」

「生憎今はそんな物はねえな。だが、取り返したいものならある」

垣根は少しづつ翼を羽ばたかせながら言った。

「それは・・・何かしら？」

朱雀は垣根に尋ねた。

「それは・・・てめえ等に奪われた、俺の親友だっ！！！」

垣根は翼から凄まじい突風を発生させる。どういつ原理で未元物質ダイクマター

に対抗しているかは未だに理解出来ないが、形のない物、つまり気体による攻撃ならあの粒子の影響は受けないと垣根は考えたのだ。唸りをあげながら突風は朱雀に襲いかかる。

「なるほどね。固体ではなく気体ならば砂に変える事は出来ないと判断した訳ね。だけど・・・」

次の瞬間、垣根の表情は今日何度目かわからない驚愕の色に染められる。垣根の放った突風は朱雀の3m程近くに接近した途端、パタリと止んでしまったのだ。

「私の分解物質ナノマシンにその常識は通らないわよ」

朱雀は引き裂く様な笑みを浮かべながら言い放った。

「人の台詞パクってんじゃねえぞ!!!」

自分の決め台詞？ を真似された垣根は怒りを露わにしながら突風を放つ。だが先程と同じ様に朱雀に当たる前に途絶えてしまう。

「どうなってんだよお!!! てめえの能力は!!!」

常識がまるで通じない能力を前に垣根は徐々に冷静さを失っていく。

「理解しようとしなない方がいいわよ。私の能力はそんなヤワじゃないから」

「つけ上がってんじゃねえぞ!!! クソ野郎が!!!」

垣根は月の光を利用した殺人光線を放つ。

「堪え性のない子ね。少し痛い目をみなきゃわからないのかしら？」
朱雀は目にも止まらぬスピードで垣根に接近すると、拳を握った。
垣根は翼でその拳をガードしようとするが朱雀の拳は意図も簡単に翼を砂に変え、垣根の顔面を捉えた。

「ガアッ!」

女性の力とは思えない威力の一撃を貰った垣根は鼻を押さえながら後退りする。

「鼻血が出てるわよ、坊や」

明らかかな上から目線で朱雀は言った。

「くそつたれがあああああ!」

垣根は愚かにも正面から突っ込む。
朱雀はヒラリと横にいなすと垣根の鳩尾に膝蹴りを入れた。

「『表の序列』（レギュラーメンバー）のレベル5って皆短気なのかしら？ 少し落ち着きなさい」

崩れ落ちる垣根に朱雀は静かに言った。

戦闘開始から僅か10分程しか経っていないが垣根は理解した。圧倒的過ぎると。純粋な戦闘力の差も勝る事ながら経験、構え、その全てが垣根を遥かに凌駕している。

「これで少しは理解したかしら？」

自分の足元で伸びている垣根に朱雀は静かに尋ねた。

「あなた触れようとしている闇はとてつもなく深いものだ。その程度じゃ触れる事はおるか近付く事すら出来ない事を」

垣根は何も言わない。垣根の返答を待たず、朱雀は続けた。

「ネズミは例外なく抹殺、つてのが『シーズン』（わたしたち）の掟だけど今日だけは許してあげるわ。これに懲りたら、もう私達には近付かない事ね」

そう言い残して朱雀は垣根に背を向けた。

その瞬間、先程まで何の反応もなかった垣根が勢い良く立ち上がった。

「余計なお世話なんだよっ！！！ クソ野郎がああああっ！！！」

垣根は翼を展開する。

が、それよりも早く垣根の胸を何かが貫いた。

「なっ、にい・・・？」

垣根は恐る恐る自分の胸を見る。明らかにリーチのおかしい日本刀が垣根の胸を貫き、壁に突き刺さっていた。

「随分甘くなつたな」

垣根の後ろから現れたのは『シーズンの死神』岩見 祥吾だった。

「あら、祥吾。何の真似かしら？」

「死は誰でも平等に付き纏ってるって事だ。それよりも珍しいな」
祥吾は垣根を顎で指しながら尋ねた。

「気まぐれ、かしら？」

朱雀は祥吾に顔を向ける事なく答えた。

「へえ、なるほどな。付き合う気はないぞ」

「付き合ってもらうつもりはないわ。自分の蒔いた種ぐらい自分で摘めるしね」

朱雀はようやく祥吾の方を振り向いた。

「ま、そりゃそうか」

「フフ、あなたにもそういった感情が持てるのね。いや、違うわね。そういった感情しか持てないのかしら？」

その瞬間、祥吾は腰から西洋刀を引き抜くと朱雀に目掛けて伸ばした。明らかにリーチがおかしい刃先は朱雀の顔スレスレを通過して壁に突き刺さる。

「ほっとけ」

鋭い目で朱雀を睨み付けながら祥吾は警告する。朱雀は祥吾とは対照的に柔らかい笑みを浮かべながら返した。

「やめときなさい。あなたじゃ私には勝てない。自分の身の丈もわからないのかしら」

非常に静かに放たれた言葉だったが、そこには明確な警告の趣旨が含まれていた。

「おお、こわいこわい」

祥吾も馬鹿ではない。今の實力ではこの女には勝てない。よくて相打ちになるかならないかだ。それだけこの女の能力は圧倒的過ぎるのだ。

湧き上がる殺意を無理矢理押し殺し、祥吾は西洋刀と日本刀を鞘に戻す。

ドサツ、と音を立てて垣根が地面に崩れ落ちた。

「コイツはどうする？ 冥土帰しのところに運んどこうか？」

垣根を見下ろしながら祥吾は尋ねた。

「ほつときなさい。その傷じゃ直ぐに死ぬわ」

朱雀は垣根には見向きもせず言い放つ。

「大和の奴・・・どんな顔するだろうな？」

「少しぐらいは泣くんじやないかしら？」 『元』親友が死んじやつたんだから」

まあどうでもいいけどね、と朱雀は付け加えた。

「あいつの相手は正直骨が折れるんだが？」

「大丈夫よ。対大和君の策はちゃんとあるから」

「ほう」

初耳だった。学園都市最強の能力者でもある大和は紛れもなく『シーズン』のエースだ。だが協調性の欠片もない彼はいつ爆発するかわからない爆弾でもある。

爆発防止の為の何かしらの策はあるのかと気になってはいたが、まさか本当にあるとは。

「実はね、『シーズン』にはあなたも知らない隠し球とも呼べる存在がいるの。もっともあの二人には全く自覚はないけどね」

「隠し球ねえ」

「そう。私が知る限り、この世界で唯一大和君の全ての能力を無効に出来る存在。大和君にとって親友以上より重い絶対的な存在よ」

「そんな奴がいるなんてな。全くもってびっくりだ」

「私も詳しくは知らないわ。アレイスターがかなり気に掛けてるってのは確からしいわよ」

「そりゃ、お気に毒に」

事実、アレイスターのお眼鏡に掛かった者はろくでもない末路を辿っている。自分達の様に。一番の被害者は他でもない大和だろう。アレイスターの右腕という最悪最低な肩書を持った彼は二度と目の見る事はないだろう。

それだけ大和の闇はとてつもなく深かった。

薄れゆく意識の中、垣根はこれまでの人生を振り返っていた。

思えば学園都市に来てからはいつも隣には大和と当麻がいた。楽しい思い出にも、悲しい思い出にも、辛い思い出にも、いつも隣には二人がいてくれた。

だが、今はもういない。当麻はいても、もう大和は隣にはいないのだ。次にいなくなるのは自分。垣根は自分に明確な死が迫ってきているのを感じていた。

俺は死ぬのか……。情けねえな、結局親友一人取り返せなかった。……悔いだらけの人生だったな。

『君はそれでいいのかね垣根帝督』

垣根の意識に聞いたこともない声が響いた。

『君は素直じゃないと聞いていたが、どうやら自分の死に対しては

驚く程素直の様だ』

・・・誰だ？

『名乗る程でもない。だが、名前がないというのは話の進行上いささか不便なのでね。ここはエイワスと名乗っておこう』

そのエイワス様が俺に何の用だ？ あの世界から迎えにでも来たのか？

『それは私が天使だと言いたいのかね？ 確かに私は天使に近い存在だが君の思い描く様なメルヘンチックな物ではないよ』

どうでもいい。用があるならさっさと見え。俺には時間がねえんだよ。

『では単刀直入に言おう。垣根帝督、君は生きたいかね？』

・・・はあ？

『このまま時が経てば君は確実に死ぬ。流石の私も死人を蘇生させる事は出来ない。だが、君は幸いにもまだ生きている。君が生きたいと望むなら、その命私が繋ぎとめようではないか』

要するに助けてやるという事だろう。だが垣根には何故か生きたいという感情が微塵も生まれなかった。

余計なお世話だクソ野郎。このまま死なせてくれよ。

『これは興味深い。人間という生き物は「生」の執着が深いものだと思っていたが・・・君の様な人間もいたとは』

エイワスは自分は人間ではありませんと言わんばかりに語り始めた。
・・・それは生前に何かやり残した事がある野郎だけだ。全部が全部そんな綺麗なヤツじゃねえよ。

『なるほど。では、君は何もやり残した事はない、という事かな？
残念ながら私にはそうは見えないが』

・・・何が言いたい？

『神鬼大和。彼を取り戻したいのだから？ この街の深い闇から』

・・・もう無理だ。あいつは、大和は俺には到底近付けねえ所にいる。触れる事はおるか近づく事すら出来ねえ所にな。

『確かに、今の君では到底彼には近付けない』

しかし、エイワスは付け加えて、

『まるで手が無いという訳ではないぞ垣根帝督』

・・・なに？

『この世界に「絶対」という事はないよ垣根帝督。だからこそ、人間は運命に足掻く事が出来る』

垣根は何も言わずエイワスの言葉に耳を傾けた。

『もし君が運命に足掻く気がまだあるのなら、私が可能性の光を灯

してみせよう。神鬼大和を取り戻す可能性の光をな』

エイワスの言葉を受け、垣根は諦めかけていた自分を戒めた。自分はいつだって絶対に諦めなかった。例えどんなに小さな可能性でも、諦める事なくそれに懸けてきた。

自分で決めた生き方を自分で否定しそうになった。

垣根の答えは直ぐに決まった。

俺は足掻く。このくそつたれ運命に、この街の闇に足掻いてみせる。

『決まりだな』

その瞬間、垣根の周りの景色が光に包まれた。

しばらくして垣根は目を覚ました。ゆっくりと起き上がり、自分の胸の辺りをさすってみる。

(傷がねえ……。どうなってんだ)

『君の傷は私が完治させた。生き返った気分はどうだね垣根帝督』

垣根の疑問に答えるかの様に、エイワスの声が頭の中で響いた。

『これから君と私はパートナーだ。携帯に私の連絡先を登録してある。必要な時は是非使ってくれたまえ』

「パートナーだあ？　いつからそんな仲良しこよしな関係になった？」

『君の親友はアレイスターのパートナーとも呼んでも過言ではない存在だ。我々もそれに対抗しようと思ってるね』

対抗

垣根はその言葉が引つかかった。このエイワスはアレイスターとはどのような関係なのだろうか。エイワスの口から放たれる言葉だけでは敵なのか、それでも味方なのかは判断出来ない。

『私は読心術が使える。余計な事は考えない事を勧めるよ垣根帝督。私とアレイスターの関係はいずれわかる事だ』

垣根の考えを見透かしたかの様にエイワスは言った。いや、実際に見透かしたのだろう。

『さて、本題に入ろうか垣根帝督。君にはまずある人物に接触してもらおう』

「どうしてそんな事するんだ？」

『その者達は神鬼大和の全ての能力に正面から対抗出来る唯一の存在だからだ。少なくともこの街においてはだが』

信じられなかった。あの大和の能力相手に正面からぶつかる事が出来るなど。

実際に身をもって経験したからこそわかる。大和の能力は余りにも強大過ぎる。もはや人間の域を軽く超えてしまっている程だ。

『信じられないかと思うが、実際に存在するのだよ。もっとも本人達にその様な自覚はないだろうが』

「つまり、そいつと接触しろって事か。接触してどうするつもりだ？」

『懐柔する。懐柔して君の同志とするのだ』

「仲間にする、って事か？ どうしてそんな事・・・」

『神鬼大和に対抗する事は同時に彼の所属する「シーズン」と対抗するという事になる。志し共にする者は多い方がいいだろう？』

「一理あるな・・・」

垣根は素直に納得した。

「で、そいつの名前は？」

『そいつ、ではなくそいつ等だ。君が接触する人物は二人だ』

「そいつ』等』の名前は？」

『竜守綾季とライエという名だ』

大和の守りたいもの

『案内人』改め九条静音はひどく焦っていた。

『シーズン』のリーダーである小野寺朱雀に殺される予定だった垣根帝督がまだ生きていたからだ。

(何故だ、何故やつはまだ生きている!?)

朱雀が垣根に敗北する可能性は限りなくゼロに近い。ならば、考えられる可能性は二つある。

一つ目は朱雀がわざと垣根を殺さなかった為、二つ目は誰かが垣根を朱雀から助けた為だ。

だが二つ目は正直考えにくい。九条が思い付く限り朱雀に敵うのは大和か『ジョーカー』の面々ぐらいだ。それだけ朱雀の力はスバ抜けて高いのだ。

(やっぱり朱雀がわざと生かしたのか? いや、でも何の為に?)

『随分と焦ってるね』『九条静音さん』

九条の思考を邪魔するかの様に子供らしい陽気な声が響いた。

『その様子じゃあどうやら垣根帝督の暗殺は失敗したみたいだね』

「なっ!?!? 何故あんたが知ってる!?!?」

『僕に隠し事は出来ないよ』『君のやるうとしてる事ぐらい僕にはお見通しな』

学ランをビシツと決め込んだ少年はうつすらと微笑みながら言った。

「あなた・・・一体何を知ってる」

『全てさ』 『何故君が彼に死んで欲しいと思っっているか』 『何故彼がまだ生きているのか』 『僕には全てわかる』

少年は大袈裟に両手を広げながら言った。

「なら教える。何故やつは生きている？ 朱雀がわざと生かしたのか？ それとも誰かが助けたのか？」

『それを答えて』 『僕に何かメリットがあるのかい？』

少年はさも当たり前前の事の様に尋ねた。

『前にも言ったけど』 『僕と君は利害関係でしか結ばれていないんだよ？』 『だから僕にとってメリットにならない事は一切協力しない』 『その辺はアレイスターよりもシビアだよ』

「球磨川・・・っ！ あんたってやつは!!!」

九条は殺気の籠った目で少年を睨み付ける。

球磨川と呼ばれた少年は全く臆する事なく、ケロツとした態度で言い放つ。

『何故怒るんだい？』 『何故僕が睨まれるんだい？』 『僕は当たり前前の事を言っただけだよ？』

でも、と球磨川は付け加えて、

『何も教えないという訳じゃないよ？』

球磨川はニッコリと意味有りげな笑みを浮かべて言った。

「・・・見返りを渡せという事かしら？」

『話が早くて助かるよ』 『九条さん』

球磨川は大袈裟に頷きながら言った。

『暗部に指令を出してる人達』 『確か電話のなんとかだったかな？』

『その人達の詳しい情報が欲しいんだ』 『名前はもちろん』 『年齢、素性、家族構成、経歴まで全て』

「そんな事知って、何するつもりなの・・・」

『そんなの決まってるじゃないか』

球磨川は今日一番の笑顔を見せて言い切った。

『皆殺しにするんだよ』

九条は一瞬、球磨川が何を言っているのかわからなかった。

それぞれの暗部に指令を出しているのは、皆学園都市の重要なポストに着いている者ばかりだ。

それを皆殺しにするという事は学園都市そのものに喧嘩を売るのと同じ事なのだ。

「何馬鹿な事を言ってるの!? あんた一人でそんな事が出来る訳・・・」

『そうだね』 『確かに僕一人ならいくらなんでもそれは出来ない』
『そう・・・』

『僕一人なら、ね』

球磨川は静かに呟いた。

「あんた・・・一人じゃないと言っの」

『生憎ながら』 『僕はこう見えても仲間は多くてね』 『それも精鋭揃いの仲間がね』

球磨川は自信満々に語る。

「一体あんたは何をする気なの・・・!」

いくら仲間がいるとはいえ、学園都市に喧嘩を売るといふ事は自殺行為に等しい。レベル5全員で立ち向かっても敵わないぐらいだ。

『僕の目的はいつだって一つだよ』 『この腐った街から膿を取り除く』 『住み良い街にする事だよ』

一方通行は路地裏にいた。明らかに異常のある白い肌に暗闇でも目立つであろう紅い目を持つ学園都市の第一位はある実験を行う為に路地裏を歩く。

（つたくよオ、来る日も来る日も実験、実験。オレはマシンじゃねエぞ）

近寄り難い殺気を放ちながら一方通行の目にとある人物を見つけた。半袖短パンと夏を心行くまで満喫してる様な服装に肩まで伸びた青みがかつた黒髪の少女がウロウロしていた。

（一般人かア？ にしても挙動不審だなア。迷子かア？）

これから行う予定の実験は一般人に見られると色々面倒なものなのでとりあえずこの場から排除する為に一方通行は声を掛けた。

「オイ」

少女はビクツとしながら後ろを振り返る。まだあどけなさが残る可愛らしい顔立ちだった。

「デメエ、こんな所で何してンだア」

威嚇も含めた目で一方通行は尋ねた。

「綾季・・・迷子になっちゃった・・・」

少女改め竜守綾季は今にも泣きそうな声で答えた。

(オイオイ、まさかとは思ったがマジで迷子かよ。今時迷子なんて
いんのかよ)

呆れた顔をしている一方通行の服を掴みながら綾季は言う。

「綾季、携帯忘れちゃったの……。だから帰り道がわからないの
・・・」

「だから何だっつてんだ」

「表の通りまで一緒にー」

「却下だア」

一方通行は綾季の言葉を最後まで聞くことなく即答した。歩き出し
た一方通行の手を綾季が掴む。

「ひどいよお!! お願い、綾季を表まで連れて行って!! また
迷子になっちゃう!!」

一方通行はひどく驚いた表情をした。何故なら一方通行に触れてい
る綾季に何の変化もなかったからだ。

(どうなっつてんだア? 何で反射が効いてねエんだア)

一方通行の能力は『ベクトル変換』この世に存在する全ての力の向
きを自在に操る能力だ。この能力を使い、常に反射状態の一方通行
に触れれば何かしらの変化がある筈なのだ。

「ねえー聞いてるっ!?!」

思考に耽っていた一方通行に綾季が声を掛ける。

(このままここにいられんのも面倒だなア・・・とりあえずコイツにはご退場してもらおうかア)

「わかったわかった。表までだけなら運んでヤンよ」

一刻も早く実験場所に向かいたい一方通行は綾季を表の通りまで連れて行く事にした。

「本当に!?! ありがとう!?!」

「うるせエ、喚いてンじゃねエ」

心底面倒くさそうな表情をしながら一方通行は綾季に着いて来る様に促す。

「テメエ、名前は」

歩きながら一方通行は尋ねた。

「竜守綾季だよ。えーと・・・」

「一方通行だア」

一方通行は振り向く事なく言った。

「よろしくね! 一方通行!」

綾季は満面の笑みで言った。だがその笑みが一方通行に届く事はない。

（竜守綾季か……。後で調べる必要があるなア）

神鬼大和はとあるビルの屋上にいた。朱雀から垣根帝督が死んだという知らせを聞いた時は若干動揺したが直ぐにその気持ちを切り捨てた。

（バカな野郎だ。素直にオレの言う事を聞いてりゃアいいものを・・）

後悔も悲しみもない。そこにあるのは哀れな気持ちだけ。大和はひたすら悪に成り下がっていた。

「無言で後ろに立つのはやめてくんねエかなア？」

大和は後ろを振り向く事なく言った。

「垣根の死を受けても、お前は何も感じないのか？」

「感じちゃアいるさ。心底あいつはバカなやつだった、つてなア」

大和は嘲笑いながら言った。親友だったとは思えない態度で。

「貴様っ！ 自分の親友が死んだんだぞっ！」

女の怒りに満ちた事が響いた。

「だからどオしたんだア？ まさかそんなくだらねエ事言う為に来たんじゃねエだろ。影虎、椿」

大和は自分に凄まじい殺気を秘めた目を向けているであろう影虎と椿に言った。

「貴様はやっぱり最悪だ。同じ人間である事が許せないぐらいにな」

「そりゃアお互い様だろオ。オレもテメエ等と同じ空気吸ってるかと思うと悪寒が走るぜ」

大和は立ち上がり、首をゴキゴキと鳴らしながら言った。

「で、何しに来たんだア？」

「仕事だ」

影虎は端的に答えた。

「お前は今回の垣根帝督の件について、何も思わないのか？」

「生憎だが死人に興味はねエんでね」

「垣根帝督はお前達『シーズン』のアジトの場所を知っていた。つまり学園都市の最高機密に近い情報が漏れたという事だ」

大和は何も言わず影虎の言葉に耳を傾けた。

「統括理事会の連中はかなり焦っている。どこから漏れたんだ、つてな」

「勝手にやらせとけよ。オレには関係ねエ話だア」

「そうもいかない。このまま情報の漏洩が進めば暗部の実態が『表』に知られる事に繋がりがねん。そうなればこの街は終わるぞ」

「全ての物にはいずれ終わりが訪れる。この街だって例外じゃねエつて事だろ」

「ふざけるなっ!! 貴様、この街が滅ぶって事がどういう事かわかってるのか!!」

他人事のような態度の大和に椿が怒鳴り付けた。

「知るかよ、んな事。知りたくもねエ」

大和は凄まじい殺気を秘めた目で椿を睨み付けた。かつて魔神に最も近いと言われた椿がたじろぐ程の目で。

「この街が終わってもオレは終わらねエ。オレは生き続ける。終わるなら終わらせればいい。それが運命だからなア」

それに、と大和は付け加えて、

「もオここに未練なんざねエ。家族も親友も全て捨てたオレにはな

ア
」

「はたしてそうかな？」

影虎は意味有りげな笑みを浮かべながら言った。その表情に大和は不快感を覚える。

「親友よりも大切な者がお前にはあるんじゃないのか、大和？」

「あア？」

「上条当麻、垣根帝督よりも前に、お前に光を見せてくれた存在がいるんじゃないのか？」

「・・・だつたら何だつてんだア」

影虎は真剣な眼差しで大和に言う。

「俺達は今ある仕事を受け持っている。竜守綾季とライエの抹殺――」

影虎の言葉を最後まで聞く事なく大和は彼に飛び掛った。影虎も大和が来るとわかってながらもあえて避けようとはしなかった。

「あいつ等に手エ出してみろ。タダじゃ済まさねエぞ・・・！」

影虎の服の胸倉をつかみながら大和は言った。

「俺だつてあの二人を殺したくはない。だがお前が協力しないと言うならば仕方ないだけだ」

「人質かア？ 天下のレベル6も随分と墮ちたもんだなア！！」

「生憎だが俺にも守りたいものがあってな。その為なら卑怯と言われなくても構わんさ」

「テメエ！！」

大和は拳を振り上げる。それを見て影虎は静かに言った。

「俺を殴って気が済むならいくらでも殴れ。今日だけは我慢してやる。だがなあ、これだけは言わせてもらう。こんな卑怯なやり方にキレてるのはお前だけじゃないぞ！」

影虎の言葉を聞いて大和は乱暴に胸倉を離した。

おそらく影虎もなんらかの理由でこの様なやり方に出たのだろう。そうでもなければ影虎ほどの男がこの様なやり方に出るとは思えなかった。

天下のレベル6と学園都市最強の悪魔をすらも屈服させる。これが学園都市の闇だった。

「何だつてやってやるよツ！！ あいつ等を守る為にら外道にも殺人鬼にもモンスターにでもなつてやる！！」

そう言い残し、大和はビルから飛び降りた。常人なら即死の高さも完全聖人である彼には関係ない。

『ねっ！』『言ったでしょ？』『彼もまだ所詮人の子だつて』

重苦しい雰囲気をぶち壊す陽気な声が響いた。

「球磨川つ……!!」

椿は球磨川を見るたび殴り掛かるうとするが影虎に止められる。

「これで大和ちゃんも僕達の味方だ」
アトランタ レジスタント
「万有引力と絶対排斥がいる限り」
「彼は僕達に逆らえない」

球磨川はうんうんと頷きながら言った。

「球磨川、その笑顔はやめると言った筈だ。噛み殺されたいのか？」

口調こそ静かだったが言葉の一つ一つに明確な殺意が秘められている。

「まあそう怒るなよ」
レベル6
「僕の笑顔は自分だけの現実み
パーソナルリアリティー
たいな物なんだぜ？」

球磨川は臆する事なく言い放つ。

「大和ちゃんがいればシーズンが落ちるのも時間の問題だね」
「そうなれば」
「アレイスターも無視出来なくなる筈だよ」

「俺達がお前に協力するのはアレイスターを噛み殺す為だ。仲間意識など微塵もないぞ」

「わかってるよ」
「僕も君達みたいな化け物と一緒にされるのは御免さ」

普段の影虎なら球磨川を地球の裏側まで殴り飛ばしていただろう。だがアレイスター抹殺の野望の為には球磨川の協力がどうしても必要なのだ。

影虎は苦虫を噛み潰した様な表情で必死に我慢する。

『我慢強い子だね』『影虎君は』『そんなにアレイスターを殺したいの?』

「・・・お前が知る必要はない」

球磨川の間に影虎は冷たく答えた。

『確かにね』『僕が知る必要はない』『僕はアレイスターが死ねば満足だからね』

球磨川また微笑みながら言った。その笑みはまるで仮面の様に見える。

「お前こそ、何故アレイスターの死を望む?」

『さあ』『なんでだろうね』

球磨川はあっけらかんとした表情で答えた。

彼の言動の一つ一つが二人の殺意を増幅させていく。

『なににせよ』『僕達はしばらくは仲間だよ』『よろしくね』

球磨川は手を差し出し握手を求めたが影虎はそれを拒否する。

「馴れ馴れしくするつもりはない」

『ノリが悪いなあ』『影虎君は』『こーゆうのは握手しとくものな
んだよ?』

球磨川は大袈裟な身振り手振りで説得するが影虎は聞く耳を持たない。

『仕方ないな』『じゃあ今日はなしにするよ』

そう言つて球磨川は姿を消した。まるで最初からそこにいなかったかの様に。

「くっ、あの野郎・・・っ!」

「落ち着け椿。今は我慢だ」

握り拳を作りながらギリギリと齒軋りをする椿を影虎がなだめた。

影虎としても今直ぐ球磨川を殺したい気持ちでいっぱいだが必死に殺意を押し殺す。

学園都市は少しづつだが確実に、変革されようとしていた。

『僕は悪くない』

『裏の序列ブラックリストか。小野寺朱雀はそこまで君に話したか』

電話越しに溜息混じりのエイワスの声が聞こえる。

「教える、エイワス。裏の序列ブラックリストつてのは何だ？ てめえなら何か知ってる筈だ」

打倒シーズンの為に活動を開始した垣根帝督が尋ねた。

『裏の序列ブラックリストはとある理由から表立って公表出来ない能力者達の集まりの様なもの。学園都市のタブーの様な存在だよ』

「タブーだと？ 暗部みてえなものか？」

今更何がタブーなんだと垣根は思いながら尋ねた。

『確かに暗部の様なものだが君の思う様な生温いものではない』

「なに・・・？」

『裏の序列ブラックリストはその能力の高過ぎる有能性、危険性、凶悪性ゆえに闇の中で飼殺す為に作られたものだ。だが実態は暗部となら変わらない存在。もちろん扱う仕事は君達と比べ物にはならないがね』

その言葉の一つ一つが垣根を馬鹿にしている様にしか聞こえなかった。イライラしながら垣根は尋ねる。

「とんでもねえ奴等つてのはよおくわかった。で、竜守綾季とライエとやらは裏の序列ブラックリストにランクインしてるのか？」

「竜守綾季はランクインしている。だが彼女が裏の序列ブラックリストに含まれてるのは能力の強さではない」

「ああ？ どういう意味だそりゃあ」

「竜守綾季は万有引力アトラクタのレベル5だ。統括理事会が彼女を恐れる理由は別にある」

「いや、訳わかんねえよ。裏の序列ブラックリストにランクインするだけの奴だ。当然能力も凶悪、しかもレベル5ときた。それ以外何を恐れる理由があるんだよ」

あの朱雀もそうだった。未元物質を跡形もなく分解する能力は裏の序列ブラックリストにランクインして違和感ない程の力だった。

「統括理事会が彼女を恐れる理由は」

「彼女の優しさだ」

垣根はエイワスが何を言っているのか理解出来なかった。

優しさが怖い？ 一体いつから統括理事会の連中はそんなチキンになっただんだ？

「竜守綾季の優しさはどんな悪も善に変え、どんな闇も光で照らすと言われる程だ。ある意味能力以上に強力な力と言える」

「全く意味がわかんねえな。そんなもんで大和の奴が動くのか？」

『寧ろ今の神鬼大和を動かせるのは彼女とライエしかない』

エイワスはハッキリと言いつつ切った。

一体大和にとってどれ程巨大な存在なのか。

『垣根帝督。君は一刻も早く二人と接触したまえ。急がないと手遅れになる』

「ああ？」

『竜守綾季とライエは統括理事会にとって目の上の瘤だ。今まではうやむやに処理してきた様だがいよいよ本格的に二人の抹殺に動き始めるだろう』

恐らく主犯はアレイスターだろう。エイワスの言う事が本当なら奴が抹殺したがるのも無理ない。

「わかった。今から二人を探し出す」

そう言つて垣根は電話を切る。

電話を切られたエイワスはある少年の笑みが浮かんだ。

「球磨川……。思った以上に早いな。まさか『ジョーカー』のみならず『シーズン』まで掌握する気か」

球磨川はとある建物の前に来ていた。ここは暗部組織『アイテム』の下部組織のアジトの一つ。レベル5の麦野擁するだけの下部組織の数も少なくない。

『千里の道も一歩から』って言うしね』

球磨川は懐から巨大な螺子を取り出すとスタスタと入り口に向かう。そして、

『えいつー！』

可愛らしい声と共に固く閉じられた扉に螺子を突き刺した。

その瞬間、凄まじい爆発と共に扉は跡形もなく吹き飛んだ。

球磨川は何事もなかったかの様に建物の内部に侵入して行く。建物全体に警報音が鳴り響き、球磨川の侵入を知らせる。

『うるさいなあ』

球磨川がそう呟くとそれに応える様に警報音がパタリと止んだ。

『そうそう』 『せっかくの殺し合い（ショータイム）なんだ』 『静かに頼むよ』

独り言を呟く球磨川に一発の銃弾が襲う。

『おっと！』

球磨川は人間離れた反射神経でそれを躲すと銃弾が飛んで来た方を見る。

『いやあ君下手くそだね』 『こんな距離も当てられないなんて』 『本当に暗部の人間なの？』

笑顔で罵倒する球磨川の視線の先には信じられないといった表情で球磨川を見る数人の男がいた。

『すごい顔してるよ君達』 『間抜け面って今の君達の事を言うんだね』

球磨川は螺子の先端をクルクル回しながら言った。

「テメエ、何者だ！！」

発砲した男が球磨川に叫んだ。

『生徒会副会長の球磨川震です』 『楔じゃないよ震だよ』

球磨川は深々と頭を下げながら自己紹介をする。

「ふざけてんのか！！」

『ふざけてなんかないよ？』 『君は名前を聞いてきたんじゃないか』 『僕はちゃんと自己紹介したよ』 『次は手差し出して握手だろ？』

『こんな風にね』

何時の間にか球磨川は男の手を握っていた。男は球磨川に触れられるまで気付かなかった。まるで最初から目の前にいた様に。

『さっき僕に向かって発砲したよね？』 『だから僕も仕返しさせてもらうよ？』

そう宣告した球磨川は人の腕ほどある巨大な螺子を男の眉間に突き刺した。

男は悲鳴を上げる間もなく絶命し力なく地面に崩れ落ちる。

自分達の目の前で起きた惨劇に他の男達は一瞬眉を顰めたが直ぐに球磨川に怒鳴り付ける。

「てめえ！！ 何しやがった！！」

銃口を向けられながら球磨川は臆する事なく答える。

『正当防衛だよ』 『僕には殺すつもりなんかなかったんだよ？』 『でも君達が発砲してきたから事情は変わったんだ』 『僕だって死にたくないんだよ』

「ふざけんじゃねえ！！」

『どうして怒るの？』 『君達だって街中で喧嘩売られたら仕返しするだろ？』 『それともなに？』 『君達は仕返ししてもいいけど僕は

ダメだと言いたいのか？」

平然と言い放つ球磨川に男達の怒りはドンドン積っていく。

「それでも、やり過ぎだろうが！！」

『やり過ぎ？』 『君達は何を甘い事言ってるの？』 『僕は殺されそうになったんだよ？』 『そんなやつに』 『手加減なんてする余裕があると思ってるの？』

球磨川の言ってる事は至極真つ当な事だ。自分を殺そうとしてる相手に手加減をする余裕など少なくとも自分達にはない。
男達は何も言い返せない。

『これは正当防衛だ』 『僕は身の危険を感じたからこの男を殺した』
『そうしないと』 『僕が殺されたからね』 『だから・・・』

『僕は悪くない』

球磨川はハッキリと言い切った。自分は悪くない、自分には何も非はないと。

『君達も危なそうだからここで殺すね』 『これも正当防衛だ』 『だから恨まないでくれよ』

球磨川は巨大な螺子を両手に持ち接近する。

男達は何故か武器を構えなかった。いや構えられないのだ。

男達は球磨川に得体の知れない恐怖を感じていた。

相手は一人、こっちは武器もある。状況は圧倒的に有利にも関わらず男達は動けなかった。先程の球磨川の言葉が金縛りの様に男達を締め付けるのだ。

第三者がこの状況を見ればどう考えても悪は球磨川だ。豪快に侵入してきた上に、殺人まで犯した球磨川に弁明の余地などない筈なのだ。

だが男達が抱いていたのは真逆の心情。悪いのは自分達。球磨川の話もろくに聞かず、彼を殺そうとした自分達が悪だと。

本来なら考えられない可能性を、球磨川の言葉が現実のものとする。

男達の目の前にまで接近した球磨川は微笑みながら言い放った。

『馬鹿だろ君達』『どう見ても』『悪いのは僕だろ?』

男達はハツとした。そこから始まったのは圧倒的な虐殺だった。

『ふうー』『スッキリした』

球磨川は顔に着いた血を拭いながら呟いた。

つい先程まで綺麗に整理された下部組織の建物の内部は虐殺の現場

に変わっていた。

壁や地面に男達が螺子で串刺しになっている。止めどなく流れる血のせいで部屋の中は血の海になっていた。

常人なら思わず失神しかねない光景だが、この惨状を作り出した球磨川は清々しい顔をしていた。

『やっぱり掃除したら』 『気分まで清々しくなるって本当みたい』

命を命と思わない発言をする球磨川。

『さてと』 『そろそろ帰ろうかな?』 『お腹も空いてきたし』

球磨川は出口に向かおうとするがピタリとその足を止める。

『こそそしないで出てきたらどうなの?』 『君に隠密なんて似合わないよ』

球磨川は振り返る事なく言った。

その目はまるで、獲物を見つけた虎の様な目をしていた。

「……どうしてわかった。気配は完全に消したつもりだったんだが」

『気配は消えてたよ』 『君は存在感がデカ過ぎるんだよ』

球磨川は振り返る事なく言った。

「そうか。一つ聞くぞ、この惨状はお前の仕業か?」

『だったら何だい？』

「ひどく根性がねえヤツだと思ってな。ここまでやる必要があったのか」

『あつたよ』

球磨川はようやく後ろを振り向いた。その両手には巨大な螺子が握られていた。

『やるからには本気でやる』『そうしないと相手に失礼だろ？』『手加減する方がよっぽど根性なしじゃないかな』

「……、」

『で？』『君は何しに来たの？』『まさか僕に君の根性論聞かせる為とかじゃないよね？』

球磨川は今にも喉元に喰らい付きそうな歪んだ笑みを見せる。

「最初はそのつもりだったんだが……」

『?????』

その瞬間、球磨川に衝撃波が襲いかかる。とつさの事に反応出来なかった球磨川はそのまま後ろに吹き飛んだ。

「お前にだけは口よりも身体で教えた方がいいな、球磨川囊」

学園都市の第七位、削板軍覇は力強く言った。

『痛いなあ・・・』

煙の中から背筋が凍る様な声が聞こえた。

『いきなり攻撃って酷いなあ』『でも』『感謝するよ』

煙の中から現れた球磨川は学ランをパンパンと払いながら言った。

『君から攻撃してくれたおかげで僕が君を殺す理由が生まれた』
『今から僕がするのは殺人じゃない』『正当防衛だ』『だから・・・』

球磨川は螺子を構えながら言い放った。

『僕は悪くない』

『現実逃避』（オールフィクション）

削板は球磨川を睨み付けた。両手に巨大な螺子を持つ童顔の殺人鬼は相変わらぬニヤニヤした顔をしている。

顔には出さなかったが削板は内心かなり驚いていた。彼の必殺技である念動砲弾こと『すごいパンチ』を受けても球磨川は無傷だったからだ。

威力を抑えたとはいえ直撃すれば無傷で済む様な代物ではない。にも関わらず球磨川は痛がる素振りすら見せなかった。

『一つ聞いていいかな？』 『軍霸ちゃん』

球磨川は唐突に尋ねた。

「なんだ？」

『軍霸ちゃんはさあ』 『どうして生きてるの？』

全く趣旨の掴めない質問に削板は疑問を覚える。

『人間はみんな』 『何か生きている理由を持っているってね』 『本に書いてたんだ』 『軍霸ちゃんは どうして生きてるの？』

球磨川は真つ直ぐに削板を見つめながら言った。その射抜く様な視線に削板は思わずたじろいた。

「俺は生きたいから生きている。それ以外に理由はない」

削板の答えに球磨川は小馬鹿にした様な笑みを浮かべた。

『軍霸ちゃんらしい答えだね』『生きたいから生きているかあ』『僕には到底思いつかないし理解出来ないよ』

でも、と球磨川は付け加えて、

『それは君の個性だ』『君の暑苦しい根性論も』『君の個性だ』『僕はそれを否定しないし尊敬するよ』

そう言った球磨川は何時の間にか削板の目の前にいた。まるで最初からそこにいたかの様に。

『尊敬はするけど理解する気はないよ』

球磨川は右手に持っていた螺子を削板に突き刺そうとする。

「なっ!?!」

削板は人間離れた反射神経で何とか躲そうとするが無情にも螺子は彼の脇腹を捉えた。

ドバツと返り血を浴びた球磨川は螺子を突き刺したまま後ろに下がる。

脇腹から螺子を引き抜き、苦しそうにしている削板を球磨川は満足そうな表情で見つめた。

『驚いたよ』『確実に急所を捉えたと思ったのに』『まさか躲すとはね』『流石は軍霸ちゃん』『やるうー』

称賛の一つ一つが馬鹿にしている様にしか聞こえなかった。

『軍霸ちゃん』 『根性があれば何でも出来るんだろ？』 『だったらいつもみたいに痛いだけで済ませてよ』 『ほら軍霸ちゃん』 『どうしたの？』

削板はそこで気付いた。何時もの様に痛みを緩和出来ない事に。

心臓を始め体中に銃弾を受けても、ナイフで刺されても『痛い』程度で大したダメージを受けない筈の自分が苦しんでいる。

「お前、何をした・・・」

今思えばおかしかった。『すごいパンチ』を受けても無傷、まるで最初から目の前にいたかの様な瞬間移動、そして能力の壁を超えた激痛。

『簡単だよ』 『君のその力を』

『拒絶しただけさ』

削板は球磨川の言った事が理解出来なかった。

『正確に言えば君の演算を拒絶したんだよ』 『能力そのものが消えた訳じゃないから安心してね』

削板にとってはそんな事はどうでもよかった。問題は球磨川が行った拒絶だ。

拒絶という言葉で削板の頭にはある人物が浮かんだ。

学園都市の第零位、同じレベル5でも削板しか知らない学園都市の悪魔、

神鬼大和

演算を拒絶したという事は演算をしたという事象を拒絶した事になる。だが事象を拒絶する事など大和以外に出来る者はいない筈だ。

そして何より理解出来なかったのは出来なかったのは自分の行動に直接干渉してきた事だ。

オールセレクト
事象選択は対象者には直接干渉する事は出来ない。具体的には『怪我を拒絶する』とか『死を拒絶する』などだ。
だから削板の演算をしたという事象を拒絶する事など出来ない筈なのだ。

『軍霸ちゃんは今大和ちゃんの事考えてるね？』

削板の心を見透かしたかのように球磨川は言った。

『僕的能力は大和ちゃんとそっくりだけど同じじゃないよ』

『なに……？』

『僕は大和ちゃんみたいに』 『起こった事象を別の結果に変更する事は出来ない』 『でもその代わりにね』 『僕は大和ちゃんには出来ない事が出来るんだ』 『それは』

『全ての「事象」（リアル）を「拒絶（なかつた事に）する」』
『それが僕の能力』 『「現実逃避」（オールフィクション）さ』

全てを拒絶する？ そんな力があれば確実にレベル6、いや神の領域に達している。

『君のその才能も』 『力も』 『可能性も』 『根性も』 『現実も』 『全て僕の一言で拒絶出来る』

球磨川は懐から再び巨大な螺子を取り出した。

『君じゃ僕には勝てないよ』 『「表の序列」（レギュラーメンバー）の君じゃあ僕の足元にも及ばない』

削板は体勢を立て直そうとするが体が上手く動いてくれない。

『いいよ軍覇ちゃん』 『怖い物知らずの君が』 『恐怖で歪んでいる顔は最高にいい顔だ』

恐怖に歪んでいる？ 自分が？ 削板は信じたくなかったが彼は今怯えていた。

目の前に迫って来る、殺人鬼に。

『君がいけないんだよ？』 『君が僕に挑んで来るからいけないんだよ？』 『君がここで死ぬのは君が悪いからだ』 『僕には何の責任もない』 『悪いのは君だけだ』 『だから・・・』

球磨川は削板の目の前に立つと見下ろしながら言った。

『僕は悪くない』

それが削板軍覇が学園都市の第七位として聞いた最期の言葉だった。

研究所を出た球磨川を待っていたのは永松大王だった。永松は球磨川の傷一つ汚れ一つない様子を見て満足そうに言った。

「やったのかい？ 彼を、ナンバーセブンを」

『殺してはいないよ』 『ただしばらくは能力は使えないだろうね』

『彼の自分だけの現実バーンナルリアリティーは殺し尽くしたからね』

球磨川は笑顔で言った。

『彼はもう能力者としては死んだよ』 『あそこから立ち直るのは』
『余程の事がない限り無理だね』

「君も中々残酷なヤツだなあ。能力だけを殺してしまうなんて」

永松は球磨川から少し距離を開けながら言った。

『何を言ってるんだい？』 『永松君』 『彼を僕のところに来る様に仕向けたの君だろ？』

球磨川は懐からまた螺子を取り出す。

「さあね、何の事かな」

球磨川の螺子を見ても全く臆する事なく永松は言った。

しばしの沈黙が続いて球磨川が口を開く。

『まあいいよ』 『これで僕の計画がまた前進した』 『アレイスターは軍覇ちゃんの代わりを用意する必要がある』

球磨川は今度は笑ながらではなく、真剣な表情で言った。

『アレイスターは確実に彼女を新しい第七位に据える筈さ』 『能力的にも実力的にも』 『彼女以外に第七位は有り得ない』 『竜守綾季以外にね』

竜守綾季を第七位に据させ、裏の序列から引きずり出す。これこそが球磨川の狙いだった。

「どうして綾季ちゃんにそこまで拘るんだい？」

『彼女はこの先僕の戦力にも』 『逆に障害にもなりうる存在だ』 『でも現時点では障害になる確率の方が高い』

「それが第七位に据える事とどう関係あるんだい？」

『彼女の存在を必死に隠してるのは間違いなく絶対排斥だ』 『第七位になれば必然的にその存在は学園都市中に広がる』 『そうなれば』

絶対排斥も』 『今までの様にはいなくなる』
レジスタント

「無理矢理表舞台に引きずり出す気なんだね」

でも、と永松は付け加えて、

「アレイスターは君の思惑通りに綾季ちゃんを第七位にするのかな。アレイスターだって彼女の脅威は十分理解してるだろ？」

『絶対にするよ』 『いや彼女以外を第七位には出来ない』

球磨川はハッキリと言い切った。

『裏の序列ブラックリストの存在は学園都市最大のタブーの一つだ』 『綾季ちゃん以外を第七位にすれば』 『その存在が街中に知られてしまうリスクがある』 『綾季ちゃんならそのリスクを最小限に抑える事が出来るのよ』

「なるほどね。で、綾季ちゃんはどうする気？ 仲間にするの？」

『もちろんだよ』 『彼女が僕たちの仲間になれば』 『生徒会の力は盤石となる』

その為には、と球磨川は付け加えて、

『彼女の周りをブンブンと飛ぶ』 『うるさい羽虫を叩き潰す必要がある』

球磨川は殺気を漂わせながら静かに言った。

「ライエを殺すのかい？ でもそんな事しようとするれば確実に大和と、さらに綾季ちゃんとぶつかる事になるよ？」

意味ないじゃん、と永松は付け加えた。

「わかってるよ」 「だから僕は手を出さない」 「もちろん他のメンバーにも手を出させないよ」

「じゃあどうやって・・・」

「簡単だよ」

球磨川は言った。最高に効率的で確実に最悪な考えを。

「大和ちゃんと綾季ちゃんに殺してもらうんだよ」 「学園都市最強の悪魔に」 「ライエ君の一番大切な人」 「これ程適任な存在」 「他にいるかい？」

永松は球磨川の考えがまるで理解出来なかった。あの二人にライエを殺させるなど絶対に不可能な事の筈だ。

「そんなの無理だよ、雲君。あの二人がライエ君を殺す筈ないよ」

「大丈夫だよ」 「永松君」 「あの二人だって人間さ」 「絶対なんてないよ」

球磨川はキツパリと言い切った。

「まあ任せてくれよ」 「僕が何年この街の闇にいたと思ってるんだい？」 「ガキ二人たぶらかす事なんて」 「ごみ虫（レベル5）共踏

み漬すより簡単だぜ』

新第七位 竜守綾季

学園都市の第七位、削板軍覇の死亡の知らせは瞬く間に街中に広がった。

レベル5の敗北は学園都市に衝撃を与え、人々は様々な反応を見せた。

純粹に悲しむ者、驚きを隠せない者、他人事のように興味を示さない者、

だが街中の全ての人間が共通して思ったのは――

レベル5の威厳と存在価値に疑問が生じた事だ。

レベル5は一人で軍隊相手に勝利を収める事が出来るというのがキヤッチコピーだ。だが削板の死亡によりその信憑性が問われ始めていたのだ。

そしてそれは学園都市の第一位と言えども例外ではなかった。

一方通行はひどくイライラしていた。何故なら彼が現在進行形で行っている実験が当然、一時中止になったからだ。

第七位の死亡により一方通行の能力者としての価値に疑問が生じたのだ。

普通に考えれば第七位と第一位とは絶対的な差があると思うだろう。だが削板は原石、それも世界最大とも称される程の。原石である削板は第二位の垣根帝督と同様、一方通行に並ぶ事が出来る者と考えられていた。

その第七位の敗北の影響は絶対的な存在であった一方通行にまで及んでいたのだ。

予定されていた実験が中止となった一方通行はファイルからある人物の調査結果を取り出した。

紙には『竜守綾季』という名前が書かれていた。

(まさかオレが把握してねレベル5がいたとわなア)

調査結果には綾季の能力である『万有引力』(アトランタ)の名とその内容、能力の強度、そして『裏の序列』(ブラックリスト)という言葉が書かれていた。

(『裏の序列』(ブラックリスト)か。学園都市もとんでもねエモン飼ってンじゃねエか)

一方通行は調査結果を投げ捨てるとスツと立ち上がった。

(コイツは後々オレの脅威になる。なら、今のうちに潰しとく方が正解だよなア)

引き裂く様な笑みを浮かべながら一方通行は今ここに綾季の抹殺を決めた。

だが彼はまだ知らない。彼が綾季の抹殺を決意する事はとある人物の思惑通りである事に。一方通行に綾季の詳細、さらには『裏の序列』（ブラックリスト）の存在まで流したのも球磨川の思惑通りである事に。

場所は変わり、ここは学園都市の暗部組織『シーズン』のアジト。前のアジトは垣根帝督の襲撃により大破してしまったので新しいアジトにいた。

「第七位が死んだ？」

リーダーの小野寺朱雀が思わず聞き返した。

「いや、正確に言えば生きてる事には生きている。だが精神が壊れちまってほとんど廃人に近い状態らしいぜ」

構成員の一人、柊夜野透が言った。

「信じられませんね……。脳味噌はまだ筋肉で出来ている様な彼が廃人になるなんて」

先日、垣根との戦闘による負傷からようやく全快した神野慈雨が零した。

「慈雨の言う通りね。精神的には『表の序列』（レギュラーメンバー）の中じゃ一番強かった彼をスタボロにするだけの存在がいる」

「焦ってんのか？」

「いえ。面白いやつもまだいたんだなあ、と思っただけよ。第七位如き潰したところで、私達の脅威にはならないわ」

朱雀はキツパリと言いつつ切った。

「第七位の敗北はすげえ反響だぜ。そのせいで『表の序列』（レギュラーメンバー）の存在価値が揺らいでるらしい」

柊夜野はククツと笑いながら言った。

「そりゃ当然でしょ。表沙汰にはなつてないけど第二位と第四位も私達が潰してる。アレイスターが頭抱えるのも無理ないわよ」

「おまけに一方通行のあの実験もストップが掛かったらしいぜ」

「絶対能力者進化（レベル6シフト）実験ですか。第一位もよつぽど暇なんですわね。私ならあんな実験、死んでも断りますよ」

慈雨は他人事の様に吐き捨てた。

「一方通行もだが一番イカれてるのはそれを思い付いたヤツだろ。オレは祥吾のヤツが参加してないのを祈るよ」

柊夜野は今この場にはいない構成員の事を思い出した。

「そう言えば岩見さん、今日はどうしたんですか？」

「第七位のおかげで本職が忙しいみたいよ。彼は優秀な科学者だからね。」

朱雀は素直に称賛した。

「朱雀、世間話はそろそろ終いにして本題に入らねえか？」

「それもそうね。そろそろいきましようか」

朱雀はスツと立ち上がりながら言った。

「みんなは先日第二位の襲撃についてどう考えてる？」

「命知らずの馬鹿だ。身の程知らずにも程があるぜ」

「私も柊夜野さんに同意ですね。身の丈をわきまえないってアレの事ですよ」

もはや考えというより感想を述べる二人に朱雀は呆れながら言う。

「そういう事じゃないわよ二人とも。私が言いたいのはどうして第二位はアジトの場所を知っていたかって事よ」

「・・・言われてみりゃ確かにそうだな。あの野郎どこで知りやがったんだ？」

朱雀はパンパンと手を叩きながら言う。

「今回の仕事はその情報の出どころの調査とその後始末よ。祥吾と大和君は今回は期待出来ないから私達三人でやるわよ」

「そう言えば大和さんはどうしたんです？」

「知らねえよ。アイツはアイツでまた何かしてんだろ。ほっとけよ」

柊夜野はバツサリと切り捨てた。

「二人には私から伝えとくわ。今日はこれで解散よ」

永松大王は夜の公園のベンチに一人座っていた。その表情は疲れ切っており、額からは止めどなく汗が流れ呼吸も荒い。

「球磨川君・・・本当にやってくれるよ君は」

それはつい一時間前程の事だ。球磨川から衝撃的な告白を聞いた後、永松は球磨川にある事を尋ねた事がキツカケだった。

「これから君はどうするつもりだい？」

とりあえず目先の目標を達成した球磨川に永松は尋ねた。

『そうだね』 『第七位の死亡はアレイスターにとって』 『相当痛い筈だ』 『でも』 『まだインパクトに欠ける』

「そんな事ないと思うよう。世界最大の原石の死亡はアレイスター

に十分堪えた筈だよ？」

永松はそう言ったが球磨川は頭を横に振る。

『いやいやダメだよ』 『第七位はあまりメジャーじゃない』 『アレイスターに右ストレート入れるには』 『もっとメジャーな能力者を殺す必要がある』

「ま、まさか君……」

球磨川は引き裂く様な笑みを浮かべると次なる標的の名前を告げた。

『御坂美琴』 『次の標的は学園都市の第三位』 『「常盤台の超電磁砲」』

美琴は学園都市で最も有名な能力者だ。

その存在を隠蔽している大和や暗部の垣根や麦野とは違い、その知名度は絶大なものだ。

『今回は能力だけじゃない』 『みこっちゃんには本当に死んでもらうよ』

「……どうして殺すんだい？ 殺す必要があるの？」

『彼女は学園都市の看板だ』 『看板が消えれば』 『アレイスターを大きく揺さぶる事が出来る』

それに、と球磨川は付け加え、

『みこっちゃんが死ねば』 『絶対能力（レベル6シフト）実験は完全に凍結せざるを得なくなる』 『僕の目指す学園都市に』 『レベル』

6は必要ない』 『例え必要になつたとしても』 『それは一方通行じゃないよ』

永松は啞然とした。この少年は御坂美琴の抹殺を最悪の理由で肯定しようとしている。しかもその理由も後々の自分の目的の為。

もはや人の命を命として扱わないという次元を超えている。

『でも』 『みこっちゃんを殺す理由はそれだけじゃない』

「えっ？」

永松は思わず聞き返した。

『「守護神」(ゴールキーパー)をこちらに引き入れる為さ』 『アレの力はこの先必ず役に立つ』

「彼女をかい・・・？ 無理だよ。だって彼女の周りにはー」

『わかつてるよ』 『だから』 『ついでに周りの人達にも死んでもらうつもりさ』 『僕が欲しいのはレアカードだけ』 『周りのカスカードは必要ないよ』

球磨川はハッキリと言いつつ切った。

永松は今ハッキリと理解した。こいつは人間じゃない。人間の皮を被った悪魔だと。いや、まだ悪魔の方が幾分マシだろう。

それだけ球磨川の策は外道を極め、外道の底を突き破っていた。

『そう言えば永松君』

突然名前を呼ばれた事に永松はビクツとした。

『君前にさあ』『僕に使い捨てにされた人達って』『死ぬ時にどんな事』『思っただろう？』『って言ってたよね？』

球磨川は永松に尋ねた。そう言えば以前、そんな事を聞いた気がする。

「うん。確かに聞いたよ。それがどうかしたの？」

『うん』『だからね・・・』

球磨川は目にも留まらぬスピードで永松の眉間に巨大な螺子を突き刺した。

大量の返り血を浴びながら球磨川は力なく崩れ落ちる永松に言った。

『これがその気持ちだよ』

球磨川は言った。この世のものとは思えない歪んだ笑みを浮かべながら。

球磨川の言葉を聞きながら永松は思った。

これが死ぬって事なんだと。これが今まで知りたかった死後の気持ちなんだと。

そこで永松の意識は途絶えた。永松は死んだのだ。確実に、絶対に。

だが永松の死んだという事象は拒絶された。彼を殺した張本人であ

る球磨川震によって。

「ゲホツ！ ゲホツ！ うぐっ、オエエエえっ！！」

無理矢理死後の世界から引きずり戻された永松は激しく嘔吐する。

『どうだった永松君？』 『死後の世界は』 『かわいい天使さんに会った？』

球磨川はとてつなく歪んだ笑みを浮かべながら尋ねてくる。

「ハア、ハア、ハア、さ、最悪だったよ・・・」

永松は素直に答えた。

『そっか』 『今日もいい事したなあ』 『永松君の願いを叶えてあげれた』

一体こいつはどこまで歪んでいるのか。永松はもうわからなかった。だが永松は一つだけわかった事がある。

この少年には決して逆らってはいけない。逆らえば死よりも辛い運命が待っている。

永松は心に強く刻み込んだ。

重要なお知らせとお詫び

私は執筆している『とある都市の事象選択』の更新をしばらく中断します。後先考えずに執筆した結果、自分の考えている小説とのイメージとズレが生じてしまいました。

応援して下さった方、お気に入り登録して下さった方には本当に申し訳ないです。

代わりではありませんが新規として『とある都市の事象選択』の神鬼大和を主人公としたものを執筆する予定です。

大和をはじめとするキャラに大幅な変更を加えた作品にする予定です。ですのでよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7279x/>

とある都市の事象選択《オールセレクト》

2012年1月10日12時47分発行